

史跡  
伊勢国分寺跡

- 遺物編 -



2018年3月

鈴鹿市

# 例言

1 本書は、三重県鈴鹿市国分町字堂跡 299 番外に所在する史跡伊勢国分寺跡の発掘調査報告の第二分冊にあたる遺物編である。

2 伊勢国分寺跡の調査は、国・県の補助を得ながら昭和 63（1988）年度に史跡の範囲確認調査として着手された。平成 2（1990）年度からは尼寺跡推定地およびに関連遺跡としての河曲郡衙推定地も対象としたことから、調査回数については複数遺跡に跨って通番で付与している。

3 本書で扱う調査は、史跡整備を目標に主要伽藍の位置と規模を確認するために実施した調査である第 22 ～ 25・28 ～ 31・35 次調査である。

4 発掘調査は以下の体制で実施した。なお、所属等は調査当時のもので、発掘調査の主担当には※を記した（敬称略・順不同）。

(1) 第 22・23 次 平成 11 年度

[ 調査指導 ]

八賀 晋（三重大学名誉教授）

文化庁

三重県教育委員会

三重県埋蔵文化財センター

[ 組織・構成 ]

鈴鹿市教育委員会（教育長 山下 健）

考古博物館長 林 銀哉

副参事 村山 邦彦

館長補佐兼埋蔵文化財係長 中森成行

指導主事 岡田雅幸

副主査 新田 剛※

事務吏員 伊藤朋之

嘱託職員 吉田真由美・林 和範

(2) 第 24 次 平成 12 年度

[ 調査指導 ]

八賀 晋（三重大学名誉教授）

文化庁

三重県教育委員会

三重県埋蔵文化財センター

[ 組織・構成 ]

鈴鹿市教育委員会（教育長 山下 健）

参事兼考古博物館長 林 銀哉

副参事兼埋蔵文化財係長 中森成行

指導主事 岡田雅幸

副主査 新田 剛※

事務吏員 河村みゆき

嘱託職員 吉田真由美・林 和範・石田浩司

(3) 第 25 次 平成 13 年度

[ 調査指導 ]

大場 範久 (鈴鹿市文化財調査会会長)

川越 俊一 (奈良文化財研究所)

高瀬 要一 (奈良文化財研究所)

八賀 晋 (三重大学名誉教授)

渡辺 寛 (皇學館大学教授)

文化庁文化財保護部記念物課・三重県教育委員会スポーツ生涯学習課文化財保護室・三重県埋蔵文化財センター

[ 組織・構成 ]

鈴鹿市教育委員会 (教育長 山下 健)

参事兼考古博物館長 林 銀哉

副参事兼埋蔵文化財係長 中森成行

指導主事 北条正則

副主幹 藤原秀樹※

副主査 鈴木孝幸

事務吏員 河村みゆき

嘱託職員 吉田真由美・林 和範

(4) 第 28 次 平成 14 年度

[ 調査指導 ]

大場 範久 (鈴鹿市文化財調査会会長)

川越 俊一 (奈良文化財研究所)

高瀬 要一 (奈良文化財研究所)

八賀 晋 (三重大学名誉教授)

渡辺 寛 (皇學館大学教授)

文化庁文化財保護部記念物課・三重県教育委員会文化財保護チーム・三重県埋蔵文化財センター

[ 組織・構成 ]

鈴鹿市教育委員会 (教育長 山下 健)

参事兼考古博物館長 林 銀哉

副参事兼埋蔵文化財係長 中森成行

指導主事 北条正則・河合圭子

副主幹 藤原秀樹※

副主査 鈴木孝幸・田中忠昭

嘱託職員 吉田真由美・林 和範

(5) 第 29 次 平成 15 年度

[ 調査指導 ]

大場 範久 (鈴鹿市文化財調査会会長)

川越 俊一 (奈良文化財研究所)

高瀬 要一 (奈良文化財研究所)

八賀 晋 (三重大学名誉教授)

渡辺 寛 (皇學館大学教授)

文化庁記念物課・三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館

[ 組織・構成 ]

鈴鹿市教育委員会 (教育長 山下 健)

参事兼考古博物館長 林 銀哉  
副参事兼埋蔵文化財グループリーダー 中森成行  
指導主事 北条正則  
副主幹 藤原秀樹※  
副主査 田中忠昭  
技師 水橋公恵  
(県へ派遣) 小倉 整  
事務吏員 伊藤 淳  
嘱託職員 吉田真由美・林 和範

(6) 第 30 次 平成 16 年度

[ 調査指導 ]

大場範久 (鈴鹿市文化財調査会会長)  
川越俊一 (奈良文化財研究所)  
金田章裕 (京都大学理事・副学長)  
高瀬要一 (奈良文化財研究所)  
八賀 晋 (三重大学名誉教授)  
渡辺 寛 (皇學館大学教授)  
和田勝彦 (四日市市立博物館長)  
文化庁文化財部記念物課・三重県教育委員会文化財保護室

[ 組織・構成 ]

鈴鹿市 (市長 川岸光男)  
参事兼考古博物館長 平井茂公  
副参事兼埋蔵文化財グループリーダー 中森成行  
主幹 北条正則・宮崎正光  
副主査 田中忠昭・水橋公恵  
(県へ派遣) 小倉 整  
事務吏員 伊藤 淳※  
嘱託職員 吉田真由美・林 和範

(7) 第 31 次 平成 17 年度

[ 調査指導 ]

大場範久 (鈴鹿市文化財調査会会長)  
川越俊一 (奈良文化財研究所)  
金田章裕 (京都大学理事・副学長)  
高瀬要一 (奈良文化財研究所)  
八賀 晋 (三重大学名誉教授)  
渡辺 寛 (皇學館大学教授)  
和田勝彦 (四日市市立博物館長)  
文化庁文化財部記念物課・三重県教育委員会文化財保護室

[ 組織・構成 ]

鈴鹿市 (市長 川岸光男)  
考古博物館長 中森成行  
主幹兼埋蔵文化財グループリーダー 藤原秀樹  
主幹 宮崎正光

副主査 田中忠昭・小倉 整  
事務吏員 伊藤 淳※  
嘱託職員 吉田真由美  
嘱託職員 林 和範・服部英世・小西絵美

(8) 第 35 次 平成 20 年度

[ 調査指導 ]

国史跡伊勢国分寺跡保存整備検討委員会  
伊藤久嗣（鈴鹿市文化財調査会委員，元三重県立博物館長）  
内田和伸（奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室長）  
加藤二三子（元鈴鹿市青少年育成市民会議会長）  
桐生明光（国分町自治会長）  
桐生悦夫（元河曲地区青少年育成町民会議会長）  
箱崎和久（奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室主任研究員）  
橋爪貴子（NPO 法人五十鈴塾理事）  
八賀 晋（三重大学名誉教授）  
林 紘（博物館サポーター）  
渡辺 寛（皇學館大學教授）  
伊勢国府跡発掘調査指導委員会  
八賀 晋（三重大学名誉教授）  
伊藤久嗣（鈴鹿市文化財調査会委員，元三重県立博物館長）  
内田和伸（奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室長）  
川越俊一（前奈良文化財研究所都城発掘調査部長）  
金田章裕（大学共同利用機関法人人間文化研究機構長）  
和田勝彦（前東京純心女子大学事務局長）  
渡辺 寛（皇學館大學教授）

[ 組織・構成 ]

鈴鹿市（市長 川岸光男）  
考古博物館長 中森成行  
主幹兼埋蔵文化財グループリーダー 藤原秀樹  
副主幹 新田 剛※・浅野隆司  
主査 田中忠明  
事務職員 吉田隆史・田部剛士  
嘱託職員 伊藤 洋・下津菜な子

5 報告書刊行時（平成 29 年度）の体制は以下のとおりである。

[ 指導 ]

国史跡伊勢国分寺跡保存整備検討会議  
朝倉由希（静岡文化芸術大学・福井県立大学・東京藝術大学非常勤講師）  
伊藤久嗣（鈴鹿市文化財調査会委員，元三重県立博物館長）  
小岐須 寛（国分町自治会長）  
加藤二三子（元鈴鹿市青少年育成市民会議会長）  
桐生悦夫（元河曲地区青少年育成町民会議会長）  
箱崎和久（奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室長）  
中島義晴（奈良文化財研究所都文化遺産部主任研究員）

林 紘（鈴鹿市考古博物館サポート会会長）

渡辺 寛（皇學館大学名誉教授）

[組織・構成]

鈴鹿市（市長 末松 則子）

文化スポーツ部長 石坂 健

文化財課長 新田 剛

副参事兼発掘調査グループリーダー 青井和徳

主幹 藤原秀樹

副主幹 田部剛士・吉田隆史

嘱託職員 太田有香・佐藤梨花

- 6 本書の執筆は主に新田が行い、藤原が編集を担当した。
- 7 本書で図示する座標は日本測地系（第Ⅵ系）である。
- 8 遺物実測図の縮尺は、石器・鉄製品（刀子）1点を1/2とした以外はすべて1/4とした。
- 9 遺物番号は該当調査の出土遺物を通じて新たに1番から505番まで番号を付与し、遺物観察表において概報掲載の番号と対照できるようにした。なお、概報未掲載遺物の概報番号は新たに付与した。
- 10 遺物実測図・写真については基本的に主要遺構ごとにまとめたが、「その他出土」とした瓦と土器等について図版ごとに出土箇所を付記した。
- 11 使用した遺構の略称は以下のとおりである。  
SA= 築地塀・塀・柱列 SB = 掘立柱建物 SC = 回廊・軒廊・道路遺構 SD = 溝 SH = 竪穴建物 SK = 土坑  
SX = 墓壙・古墳周溝および不明遺構
- 12 本書にかかる遺物・図面・写真・記録類は考古博物館において保管している。
- 13 現地調査の際には、上記委員を始め、国分町自治会や関係行政機関その他多くの方々の御指導・御協力を得ました。

# 目次

例言		3 回廊の瓦塼	17
目次		4 金堂の瓦塼	18
第1章 調査の概要		5 講堂の瓦塼	18
1 はじめに	1	6 僧坊の瓦塼	20
2 調査履歴	1	7 小院の瓦塼	21
第2章 軒瓦の型式分類		8 北東院の瓦	24
1 はじめに	5	9 その他の瓦	25
2 軒丸瓦	5	10 土器その他	25
3 軒平瓦	6	第5章 出土遺物から見た伊勢国分寺跡の変遷	
第3章 文字瓦の型式分類		1 はじめに	38
1 はじめに	9	2 伽藍ごとの概要	38
2 型式の概要	9	3 総括	39
3 伊勢国分寺跡出土の文字瓦	13	報告書抄録	177
第4章 出土遺物			
1 南門の瓦	15		
2 中門の瓦	15		

# 表目次

Tab.1 伊勢国分寺跡発掘調査履歴	2	Tab.5 鬼瓦・塼観察表	33
Tab.2 文字瓦型式一覧	14	Tab.6 丸瓦・平瓦観察表	34
Tab.3 軒丸瓦観察表	28	Tab.7 土器観察表	35
Tab.4 軒平瓦観察表	30	Tab.8 その他観察表	37

# 挿図目次

Fig. 1 伊勢国分寺伽藍配置図	4
Fig. 2 南門の軒瓦 IRE II A03・ICE II B01	15
Fig. 3 中門の軒瓦1 IRE II A03・ICE II B01	15
Fig. 4 中門の軒瓦2 IRE I A09	15
Fig. 5 南門・中門・金堂付近調査区および主要遺構配置図	16
Fig. 6 回廊の軒瓦1 IRE II A04・ICE II B01	17
Fig. 7 回廊の軒瓦2 ICE II A06	17
Fig. 8 金堂の軒瓦1 IRE II A03・ICE II B01	17
Fig. 9 金堂の軒瓦2 ICE II B12	18
Fig.10 講堂の軒瓦1 IRE II A02・ICE II B02	18
Fig.11 講堂の軒瓦2 IRE II G01・ICE II B14	18
Fig.12 講堂・僧坊付近調査区および主要遺構配置図	19
Fig.13 僧坊の軒瓦2 IRE II A08・ICE II B02	21
Fig.14 北東院の軒瓦 IRE II G01	21
Fig.15 南東門の軒瓦 IRE II A02・ICE II B02	21
Fig.16 小院付近調査区および主要遺構配置図	22
Fig.17 北東院付近調査区および主要遺構配置図	23

# 図版目次

Plate 1	伊勢国分寺跡軒瓦型式一覧	43	Plate 50	北東院の瓦 (3)	92
Plate 2	伊勢国分寺跡軒丸瓦型式 (1)	44	Plate 51	北東院の瓦 (4)	93
Plate 3	伊勢国分寺跡軒丸瓦型式 (2)	45	Plate 52	北東院の瓦 (5)	94
Plate 4	伊勢国分寺跡軒丸瓦型式 (3)	46	Plate 53	北東院の瓦 (6)	95
Plate 5	伊勢国分寺跡軒平瓦型式 (1)	47	Plate 54	北東院の瓦 (7)	96
Plate 6	伊勢国分寺跡軒平瓦型式 (2)	48	Plate 55	北東院の瓦 (8)	97
Plate 7	伊勢国分寺跡軒平瓦型式 (3)	49	Plate 56	北東院の瓦 (9)	98
Plate 8	伊勢国府・国分寺跡文字瓦型式	50	Plate 57	北東院の瓦 (10)	99
Plate 9	南門の瓦 (1)	51	Plate 58	その他の瓦 (1)	100
Plate 10	南門の瓦 (2)	52	Plate 59	その他の瓦 (2)	101
Plate 11	南門の瓦 (3)	53	Plate 60	その他の瓦 (3)	102
Plate 12	南門の瓦 (4)	54	Plate 61	その他の瓦 (4)	103
Plate 13	南門の瓦 (5)	55	Plate 62	その他の瓦 (5)	104
Plate 14	中門の瓦 (1)	56	Plate 63	その他の瓦 (6)	105
Plate 15	中門の瓦 (2)	57	Plate 64	土器その他 (1)	106
Plate 16	中門の瓦塼	58	Plate 65	土器その他 (2)	107
Plate 17	回廊の瓦 (1)	59	Plate 66	土器その他 (3)	108
Plate 18	回廊の瓦 (2)	60	Plate 67	南門の瓦 (1)	109
Plate 19	回廊の瓦 (3)	61	Plate 68	南門の瓦 (2)	110
Plate 20	回廊の瓦 (4)	62	Plate 69	南門の瓦 (3)	111
Plate 21	回廊の瓦塼	63	Plate 70	南門の瓦 (4)	112
Plate 22	回廊の瓦 (5)	64	Plate 71	中門の瓦 (1)	113
Plate 23	金堂の瓦 (1)	65	Plate 72	中門の瓦 (2)	114
Plate 24	金堂の瓦塼	66	Plate 73	中門の瓦 (3)	115
Plate 25	金堂の瓦 (2)	67	Plate 74	回廊の瓦 (1)	116
Plate 26	講堂の瓦 (1)	68	Plate 75	回廊の瓦 (2)	117
Plate 27	講堂の瓦 (2)	69	Plate 76	回廊の瓦 (3)	118
Plate 28	講堂の瓦 (3)	70	Plate 77	回廊の瓦 (4)	119
Plate 29	講堂の瓦 (4)	71	Plate 78	回廊の瓦 (5)	120
Plate 30	講堂の瓦 (5)	72	Plate 79	回廊の瓦塼	121
Plate 31	講堂の瓦 (6)	73	Plate 80	回廊の瓦 (6)	122
Plate 32	講堂の瓦 (7)	74	Plate 81	金堂の瓦塼 (1)	123
Plate 33	講堂の瓦 (8)	75	Plate 82	金堂の瓦塼 (2)・講堂の瓦 (1)	124
Plate 34	講堂の瓦 (9)	76	Plate 83	講堂の瓦 (2)	125
Plate 35	講堂の瓦 (10)	77	Plate 84	講堂の瓦 (3)	126
Plate 36	講堂の瓦 (11)	78	Plate 85	講堂の瓦 (4)	127
Plate 37	講堂の瓦 (12)	79	Plate 86	講堂の瓦 (5)	128
Plate 38	講堂の瓦 (13)	80	Plate 87	講堂の瓦 (6)	129
Plate 39	講堂の瓦塼	81	Plate 88	講堂の瓦 (7)	130
Plate 40	講堂の瓦 (14)	82	Plate 89	講堂の瓦 (8)	131
Plate 41	講堂の瓦 (15)	83	Plate 90	講堂の瓦 (9)	132
Plate 42	僧坊の瓦	84	Plate 91	講堂の瓦 (10)	133
Plate 43	僧坊の瓦塼	85	Plate 92	講堂の瓦 (11)	134
Plate 44	小院の瓦 (1)	86	Plate 93	講堂の瓦 (12)	135
Plate 45	小院の瓦塼	87	Plate 94	講堂の瓦 (13)	136
Plate 46	小院の瓦 (2)	88	Plate 95	講堂の瓦 (14)・僧坊の瓦 (1)	137
Plate 47	小院の瓦 (3)	89	Plate 96	僧坊の瓦 (2)	138
Plate 48	北東院の瓦 (1)	90	Plate 97	僧坊の瓦塼	139
Plate 49	北東院の瓦 (2)	91	Plate 98	僧坊の瓦 (3)	140



Plate 99	僧坊の瓦 (4)・小院の瓦 (1)	141	Plate 118	北東院の瓦 (15)	160
Plate 100	小院の瓦 (2)	142	Plate 119	北東院の瓦 (16)	161
Plate 101	小院の瓦 (3)	143	Plate 120	北東院の瓦 (17)	162
Plate 102	小院の瓦塼	144	Plate 121	北東院の瓦 (18)	163
Plate 103	小院の瓦 (4)	145	Plate 122	北東院の瓦 (19)	164
Plate 104	小院の瓦 (5)・北東院の瓦 (1)	146	Plate 123	北東院の瓦 (20)・その他の瓦 (1)	165
Plate 105	北東院の瓦 (2)	147	Plate 124	その他の瓦 (2)	166
Plate 106	北東院の瓦 (3)	148	Plate 125	その他の瓦 (3)	167
Plate 107	北東院の瓦 (4)	149	Plate 126	その他の瓦 (4)	168
Plate 108	北東院の瓦 (5)	150	Plate 127	その他の瓦 (5)	169
Plate 109	北東院の瓦 (6)	151	Plate 128	その他の瓦 (6)	170
Plate 110	北東院の瓦 (7)	152	Plate 129	その他の瓦 (7)・土師器 (1)	171
Plate 111	北東院の瓦 (8)	153	Plate 130	土師器 (2)・製塩土器・須恵器 (1)	172
Plate 112	北東院の瓦 (9)	154	Plate 131	須恵器 (2)	173
Plate 113	北東院の瓦 (10)	155	Plate 132	須恵器 (3)	174
Plate 114	北東院の瓦 (11)	156	Plate 133	須恵器 (4)・灰釉陶器 (1)	175
Plate 115	北東院の瓦 (12)	157	Plate 134	灰釉陶器 (2)・緑釉陶器・山茶碗・陶器	
Plate 116	北東院の瓦 (13)	158		・鉄製品・石器	176
Plate 117	北東院の瓦 (14)	159			

# 第1章 調査の概要

## 1 はじめに

史跡伊勢国分寺跡の位置と環境、地誌・史料、史跡指定と保存の経緯そして調査に至る経緯と調査履歴については先に刊行した「史跡 伊勢国分寺跡 - 遺構編 -」に詳しく記しているため、そちらを参照されたい。ここでは、本書の対象とする第22～25・28～31・35次の発掘調査の履歴のみ掲載する。

## 2 調査履歴

### (1) 平成11(1999)年度 第22・23次調査

史跡の公有地化が完了したことを受け、史跡整備のための調査に着手した。この調査以降は主要伽藍の位置及び規模・構造の確認を試みることとなった。「指定範囲」のうち、かろうじて基壇の一部を留める通称「堂跡」について範囲確認調査を行った。「堂跡」は伽藍地内の位置から講堂に比定できるものであることは確認されており、伽藍配置を明らかにするための手がかりになるものであった。

講堂の東西規模を確認するために2か所(6BEB-A-1・6BEB-A-2)、南北規模を確認するために2か所(6BEB-A-3・6BEB-A-4)、講堂北辺中央に1か所(6BEB-A-5)調査区を設けた。

6BEB-A-1区からは講堂SB9906の基礎地業と講堂西辺溝SD9902が検出され、基壇や溝の下層からは飛鳥時代の竪穴建物SH9903・9907・9908が検出された。

6BEB-A-2区は講堂東辺部分に相当し、講堂東辺溝SD9905が検出された。

6BEB-A-3区は講堂南西隅で、講堂SB9906の基礎地業と講堂西辺溝SD9902・同南辺溝SD9912が検出された。北に延長した部分からは、のちの調査で僧坊の北辺及び南辺に掘られた溝と推定されることになる溝SD9916・SD9917が検出された。

6BEB-A-4区は講堂北西隅付近で、講堂SB9906の基礎地業と講堂北辺溝SD9913・同西辺溝SD9902が検出された。

6BEB-A-5区は講堂北辺中央付近に相当し、講堂SB9906の基礎地業が確認された。

### (2) 平成12(2000)年度 第24次調査

前年度に引き続き講堂の精査を行い、併せて地上の痕跡が極めて不鮮明である金堂の範囲確認を行った。

22・23次調査区のうち6BEB-A-3・6BEB-A-4区を再度調査し、さらに講堂南面の一部(6BEB-A-6)と金堂に11か所(6BEE-A-1～11)調査区を設定した。

6BEB-A-6区からは講堂SB9906の基礎地業と講堂南辺溝SD9912が検出された。

6BEE-A-1～2区は金堂北西隅付近に相当し、金堂北辺溝SD0001が検出された。

6BEE-A-3～5区は金堂北辺に相当し、金堂SB0003の基礎地業と金堂北辺溝SD0001が検出された。

6BEE-A-6～8区は金堂西半に相当し、金堂SB0003の基礎地業が確認された。

6BEE-A-9区は金堂南西隅に相当し、金堂SB0003の基礎地業や金堂西辺溝SD0004・南辺溝SD0002が検出された。

6BEE-A-10～11区は金堂南辺で、金堂SB0003の基礎地業や金堂南辺溝SD0002が検出された。

### (3) 平成13(2001)年度 第25次調査

中門・回廊・南門・塔の範囲確認のため、中門・東回廊南東隅・東回廊北東隅・南門が推定される部分と塔の存在が推定できる伽藍地東半部分に調査区を設定した。

中門付近では、中門SB0101の基礎地業・中門南面溝SD0131・土坑SK0132・西回廊SC0102基底部・西回廊南面外溝SD0104・西回廊南面内溝SD0106・東回廊SC0114・東回廊南面外溝SD0115・柱穴列SA0113・溝SD0111・溝SD0112が検出された。

東回廊南東隅では、東回廊SC0114基底部・東回廊南面外溝SD0115・東回廊東面内溝SD0116・東回廊東面外溝SD0117・竪穴建物SH0126・SH0127・SH0128・SH0129・SH0130・土坑SK0125が検出された。

東回廊北東隅では、東回廊SC0114基底部・東回廊北面内溝SD0119・同外溝SD0120・柱穴列SA0121・竪穴建物SH0122・SH0123・SH0124・SH0138が検出された。

南門付近及び伽藍東半の調査は次年度に引き継がれた。

### (4) 平成14(2002)年度 第28次調査

南門付近と金堂東の塔推定地、伽藍地南東隅付近において調査区を設定した。金堂東や伽藍地南東付近は塔の存在を確認するための調査区である。塔は確認されなかったが、伽藍地南東付近からは掘立柱建物が検出された。

南門付近の調査区では、南門SB0140基底部・柱穴列SA0153・南辺築地SA0141基底部・南門北面溝SD0142・南門南面溝SD0144・南辺築地外溝SD0151が検出された。

金堂東の塔推定地では、伽藍地内を区画する施設が存在が明らかになり、伽藍地北東部分の区画を北東院と呼んでいる。またのちに確認される小院関連の遺構

Tabl. 1 伊勢国分寺跡発掘調査履歴

次数	調査年度	遺跡名	調査期間	面積㎡	調査原因	概要	
1次	1988	伊勢国分寺跡	880920～881215	450	学術	国分寺築地・掘立・竪穴	
2次	1989	伊勢国分寺跡	891002～891219	470	学術	国分寺築地	
3次	1990	伊勢国分寺跡	901011～901223	352	学術	竪穴・掘立柱建物・国分寺南門・築地	
		南浦遺跡		150			掘立柱建物
4次	1991	伊勢国分寺跡	911002～911225	80	学術	土坑	
		南浦遺跡		545		瓦溜・掘立柱建物	
5次	1992	南浦遺跡	920907～921105	200	学術	大鹿山6号墳・瓦溜	
		国分南遺跡		80			溝
6次	1993	国分西遺跡	930913～931124	338	学術	瓦溜・鬼瓦	
		国分遺跡		19			柱穴
		伊勢国分寺跡		142			溝
7次	1994	伊勢国分寺跡	940523～940731	3,500	博物館	大型掘立柱建物	
			941201～950131			掘立柱建物・古墳周溝	
8次	1994	国分遺跡	940801～941030	300	学術	尼寺北限溝・鬼瓦・瓦塔	
		国分西遺跡		8		なし	
9次	1994	伊勢国分寺跡	950105～950228	1,200	博物館	掘立柱建物(倉庫)・掘立柱塀	
10次	1995	狐塚遺跡	950803～951016	880	学術	掘立柱建物(郡衙正倉)・竪穴住居古墳周溝	
11次	1995	伊勢国分寺跡	950510～950728	1,200	博物館	溝・土坑・掘立柱建物	
12次	1995	狐塚遺跡・伊勢国分寺跡	950626～960111	2,170	博物館 (進入路)	掘立柱建物(河曲郡衙政庁)	
						掘立柱建物・竪穴	
13次	1996	伊勢国分寺跡	960415～970306	3,100	博物館 (進入路・駐車場)	掘立柱建物	
		狐塚遺跡				大型掘立柱建物(河曲郡衙政庁)	
14次	1996	伊勢国分寺跡	960605～961002	850	博物館	溝・土坑	
14-2次	1996	国分遺跡	970221～970221	12	寺院	土坑・灰釉陶器	
15次	1996・1997	伊勢国分寺跡	970307～970425	650	博物館	溝・掘立柱柵	
16次	1997	国分南遺跡	970424～970531	1,140	ビニールハウス	掘立柱建物・鋳造遺構	
17次	1997	南浦遺跡	970617～970816	830	ビニールハウス	掘立柱建物・鬼瓦	
18次	1997	伊勢国分寺跡	970918～971204	680	博物館(外周道路)	掘立柱建物(川曲郡衙正倉)	
19次	1997	伊勢国分寺跡	970929～980214	3,000	農地造成	掘立柱建物・中世墓・古墳	
20次	1997	狐塚遺跡	980304～980316	90	土地造成	掘立柱建物	
21次	1998	狐塚遺跡	980805～980809	1,129	農地造成	竪穴・掘立	
22次	1999	伊勢国分寺跡	990715～990930	153	学術(市単)	国分寺講堂	
23次	1999	伊勢国分寺跡	000204～000331	132	学術(市単)	国分寺講堂	
24次	2000	伊勢国分寺跡	000508～000919	216	学術(市単)	国分寺講堂・金堂	
25次	2001	伊勢国分寺跡	010514～011031	1,100	学術(国補)	国分寺中門・回廊・	
			020207～020312			国分寺南門・竪穴・掘立柱建物	
26次	2001	国分西遺跡	010703～010704	16	個人住宅(国補)	土坑・溝	
27次	2001	国分西遺跡	020115～020131	98	個人住宅(国補)	土坑・掘立柱建物・溝・鋳造関係遺物	
28次	2002	伊勢国分寺跡	020509～030228	1,891	学術(国補)	国分寺南門・築地・大型掘立柱建物	
29次	2003	伊勢国分寺跡	030804～040312	2,374	学術(国補)	国分寺僧坊・北門・大型掘立柱建物・築地	
30次	2004	伊勢国分寺跡	040723～050128	1,100	学術(国補)	国分寺僧坊・築地	
31次	2005	伊勢国分寺跡	050728～051209	1,022	学術(国補)	国分寺小築地塀・門	
32次	2007	国分遺跡	070418～070511	120	個人住宅(国補)	掘立柱建物・溝	
33次	2008	伊勢国分寺跡	071031～071116	123	市道改良	溝・柱穴	
34次	2008	国分遺跡	080523～080529	80	個人住宅(国補)	土坑・溝・柵列・柱穴	
35次	2008	伊勢国分寺跡	080714～090227	2,024	学術(国補)	国分寺講堂・北東院・小院・築地塀	
36次	2012	国分西遺跡	120223～120305	110	個人住宅(国補)	平行する2条の溝(道路)・竪穴建物	
37次	2013	狐塚遺跡	140120～140208	240	個人住宅(国補)	柱穴	
38次	2013	伊勢国分寺跡	140211	8	排水路工事	なし	
39次	2014	狐塚遺跡	140905～141014	128	個人住宅(国補)	掘立柱建物2棟, 中世の地割溝	
40次	2015	伊勢国分寺跡	160219～160326	135	個人住宅(国補)	古墳周溝・溝・道路・掘立柱建物 中世の塚	
41次	2017	念仏山遺跡	170508～170624	73	個人住宅(国補)	柱穴	
合計				34,708			

\* 薄い網掛けは範囲確認のための学術調査。濃い網掛けは開発に伴う緊急調査。

も検出された。この地点では北東院南辺築地 SA0203・同西辺築地 SA0206・伽藍地東辺築地 SA0219・掘立柱建物 SB0232・道路遺構 SC0204・北東院南辺築地外溝 SD0205・北東院南辺築地内溝 SD0209・同 SD0216・北東院西辺築地内溝 SD0210・同外溝 SD0212・小院東辺築地内溝 SD0244・東辺築地 SA0219 基底部・東辺築地内溝 SD0217・東辺築地外溝 SD0218・土坑 SK0213 などが検出された。

伽藍地南東隅付近では、掘立柱建物 SB0220・東辺築地 SA0219 基底部・同外溝 SD0218・同内溝 SD0217・南辺築地 SA0141 基底部・同外溝 SD0222・同内溝 SD0221 が検出された。

#### (5) 平成 15 (2003) 年度 第 29 次調査

伽藍地南東隅・講堂東・僧坊・北門・鐘楼（経蔵）推定地・回廊内・回廊西・回廊南に調査区を設けた。僧坊・北門・鐘楼（経蔵）推定地以外は塔の探索のための調査区であるが、塔の確認には至らず、伽藍地南東隅では掘立柱建物が、講堂東では北東院と仮称する区画と食堂が検出された。北東院は創建時のものではなく、修造期に新たに設けられた区画である。

伽藍地南東隅では、掘立柱建物 SB0301・柱穴列 SA0326・溝 SD0318・同 SD0319 が検出された。講堂東調査区では、伽藍地東辺築地基底部 SA0219、同内溝 SD0217、同外溝 SD0218、食堂 SB0302、掘立柱建物 SB0306、北東院築地基底部 SA0206、同内溝 SD0312・SD0210、同外溝 SD0212、北東院西門 SB0311、溝（方墳の周溝か）SD0377 などが検出された。

僧坊推定地調査区では、溝 SD0353・SD0355・SD0358・SD0359・SD0382・SD0387 から僧坊 SB0350 基底部が推定され、溝 SD0361 から軒廊 SC0360 基底部が想定されたほか、竪穴建物 SH0362・SH0363・SH0364 や掘立柱建物 SB0378・SB0379・SB0380・SB0381 などが検出された。

竪穴建物・掘立柱建物は国分寺に直接関係する時期のものではない。

北門推定地調査区では、北辺築地 SA0351 基底部、同外溝 SD0352、同内溝 SD0348・SD0349 が検出され、北門 SB0344 の存在が推定された。

鐘楼（経蔵）推定地調査区では、国分寺に関連する遺構が確認されなかった。

回廊内調査区では、竪穴建物 SH0333・SH0334・SH0336、掘立柱建物 SB0331・SB0332 が検出されたが、いずれも国分寺とは直接関係のない時期のものである。

回廊南調査区では国分寺に関連する遺構は確認されな

かった。

回廊西調査区では西辺築地 SA0367 基底部、同内溝 SD0368、同外溝 SD0369 が検出された。

#### (6) 平成 16 (2004) 年度 第 30 次調査

北東院やその南に想定できる南東院、僧坊を中心に調査を実施した。

伽藍地南辺部の調査区では、南辺築地 SA0141 基底部、同内溝 SD0221 や SD0221 を切る溝 SD04010 が検出された。

塔推定地調査区では、竪穴建物 SH04026 が検出された。

東門推定地では、東辺築地 SA0219 基底部、同内溝 SD0217、同外溝 0218 が確認された。

伽藍地北辺部の調査区では、北辺築地 SA0351 基底部、同外溝 SD0352、同内溝 SD0349、北東院西辺築地 SA0206 基底部、同内溝 SD0312、同外溝 SD0212 が検出された。

僧坊調査区では国分寺に直接関係する遺構は確認できなかった。

#### (7) 平成 17 (2005) 年度 第 31 次調査

塔の存在が想定できる北東院の南において調査区を設けた。塔の確認には至らなかったが、小院と仮称する小区画の存在が明らかになった。

小院南辺築地 SA05027 基底部、同内溝 SD05002-1・SD05002-2、同外溝 SD05003-1・SD05003-2、小院東辺築地 SA05028 基底部、同内溝 SD0244、同外溝 SD05003-3、小院南門 SB05022、柱列 SA05004・SA05005 などが検出された。

#### (8) 平成 20 (2008) 年度 第 35 次調査

講堂（35-1・8 区）・小院及び北東院（35-2～7 区）・伽藍地四隅（35-9～10・12～13 区）・鐘楼（経蔵）推定地（35-11 区）・伽藍地東門推定地（35-14～16 区）において史跡整備のための最終的な確認調査を行った。

35-1・8 区では講堂 SB9906 における基壇化粧の状況を確認した。

35-2～7 区では小院西辺築地 SA05026 基底部、同外溝 SD05001、同内溝 SD08040、小院東辺築地 SA05028 基底部、同内溝 SD0212、同外溝 SD05003-3、方形溝状遺構西辺 SD08019、同東辺 SD0202、同北辺 SD08038、北東院西辺築地 SA0206、同外溝 SD0212、同内溝 SD0210、北東院南辺築地 SA0203 基底部、同内溝 SD0209・SD0216、同外溝 SD0205、掘立柱建物

SB0232, 竪穴建物 SH0231 が検出された。

35-9 区は伽藍地南東隅で, 東辺築地 SA0219 及び南辺築地 SA0141 の基底部に相当し, 南辺内溝 SD0221 と同内溝 SD0222 が検出された。

35-10 区は伽藍地南西隅で, 西辺築地 SA0367 及び南辺築地 SA0141 の基底部に相当し, 築地外溝の検出が見込まれた地点である。本来の形状は不明確であるものの西辺外溝及び南辺外溝に相当する部分に後世の落ち込みが見られた。

35-12 区は伽藍地北東隅で, 北辺築地 SA0351 及び東辺築地 SA0219 基底部に相当し, 北辺築地内溝 SD0349

と同外溝 SD0352, 東辺築地外溝 SD0218 が検出された。

35-13 区は伽藍地北西隅で, 北辺築地 SA0351 の西端付近に相当し, 北辺築地外溝 SD0352 と同内溝 SD0348 が検出された。

35-11 区では建物遺構は確認されず, 瓦溜 SX08031 が検出された。

35-14 ~ 16 では東門の手がかりは得られなかった。築地内外の溝は大部分が後世の落ち込みにより失われており, 35-14 区で東辺築地内溝 SD0217 の一部が残っており, かくうじて東辺築地 SA0219 基底部が認識できる。

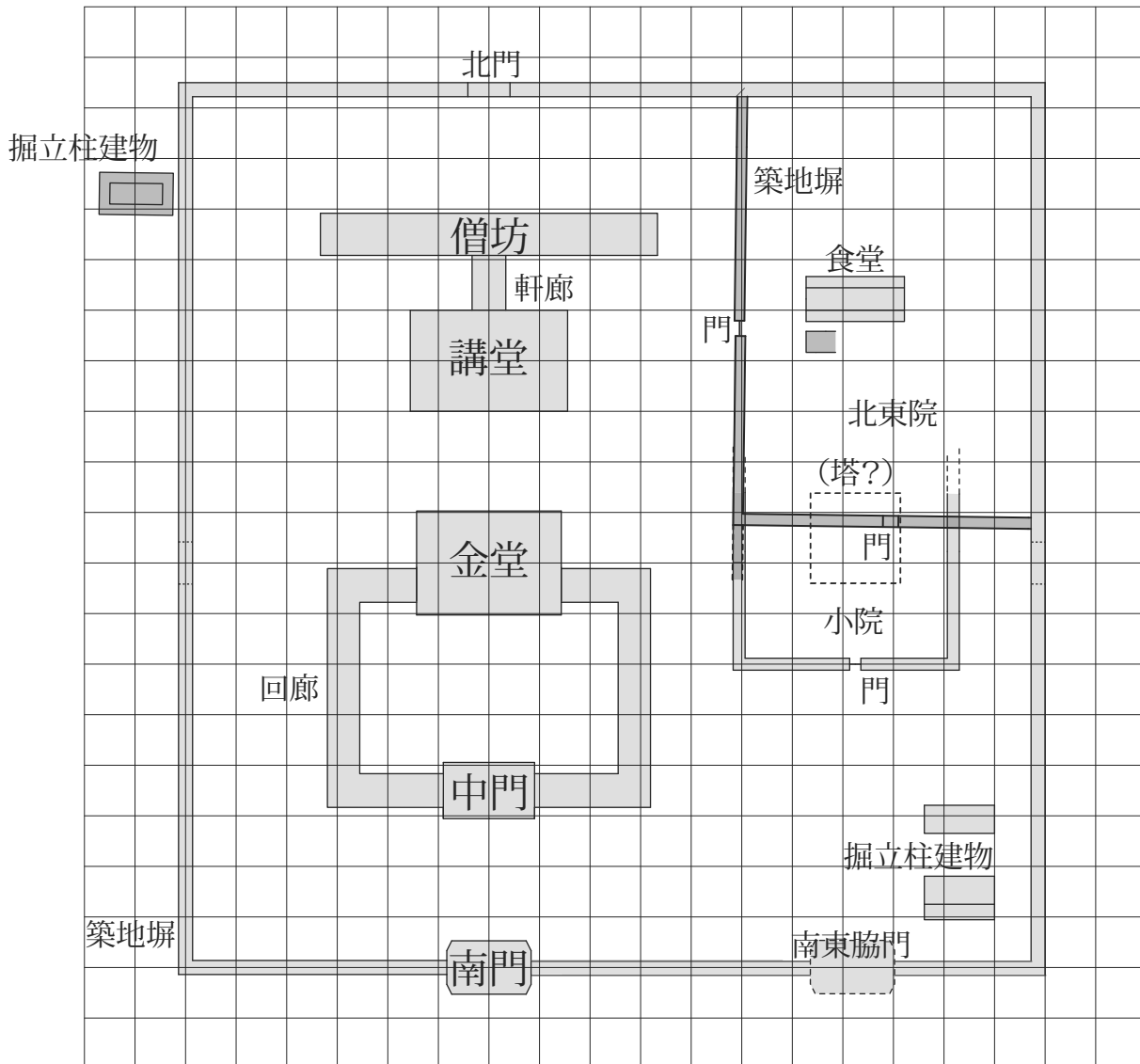


Fig. 1 伊勢国分寺伽藍配置図 (1/1, 500)

## 第2章 軒瓦の型式分類 (Plate 1)

### 1 はじめに

史跡伊勢国分寺跡の軒瓦を分類するにあたっては、過去の調査や研究の経緯から史跡伊勢国分寺跡のみならず周辺の遺跡から出土した瓦も含めて整理する手法がとられてきた。したがって、当報告に含まれない型式も併せて取り扱うこととする。型式名はこれまでの名称を踏襲し、想定される瓦範の異同を元に設定したものである。ただし、過去の出版物において示したことのある型式のうち軒平瓦のⅡ B05についてはこれまでの認識が誤りで、Ⅱ B06と同一のものであることがわかったことから欠番となった。

なお、史跡伊勢国分寺跡を含む長者屋敷遺跡に由来する軒瓦も多く含まれているため、同遺跡と共通の型式名を与えている。軒丸瓦と軒平瓦には同じ記号を用いているため、必要に応じて軒丸瓦にはIREを、軒平瓦にはICEの記号を付すことがある。

### 2 軒丸瓦 (Plate 2～4)

#### (1) 三重圏文軒丸瓦

外縁を含めて三重となる重圏文軒丸瓦で、長者屋敷遺跡に由来すると考えられる。国分寺の修造に際し持ち込まれたもので、本来は伊勢国庁及び関連官衙で用いられたものの再利用品と考えられる。型式が分かるものは3種認められる。

I A02 瓦当径は140mmである。横置型一本作りにより製作されており、丸瓦部は極めて厚く、直線的である。瓦当面はやや扁平である。淡黄灰色ないし灰白色を呈し、やや軟質である。八戸遺跡にも出土例がある。伽藍地内では確かな例はないが、伽藍地西辺築地の西で竪穴建物から竈の部材として出土している。

I A08 瓦当径は182mmである。横置型一本作りにより製作されており、瓦当面に対する丸瓦部の位置は高い。瓦当面は凸レンズ状である。史跡伊勢国分寺跡での出土例は無く、尼寺推定地である国分遺跡出土の例が知られ、硬質である。長者屋敷遺跡では北方官衙で2例知られるほか、大角遺跡出土とされる資料がある。

I A09 瓦当径は153mmである。横置型一本作りにより製作されており、丸瓦部は曲線的である。灰色を呈する。国分寺跡では中門付近で1点のみ出土しており、国庁跡で2点出土している。

#### (2) 単弁八葉蓮華文軒丸瓦

国分寺よりも古いⅡ A01、僧寺所用のⅡ A02・Ⅱ A03・Ⅱ A04・Ⅱ A05・Ⅱ A06・Ⅱ A08、尼寺所用と思

われるⅡ A07がある。

Ⅱ A01 瓦当径は158mmである。素文縁は丸みを帯び、文様の彫りは比較的深い。弁中央には鎬状の稜があり、間弁は平坦である。中房の蓮子は1+8個である。広義の山田寺式軒丸瓦の範疇に含まれるとされるが、外縁や蓮弁の形状等相違点が多い。丸瓦接合式で、丸瓦の先端は未加工と思われるが、丸瓦部を完存する個体は未発見である。重弧文軒平瓦が組合い、行基葺き式丸瓦が相伴している。南浦遺跡（大鹿麿寺）で主体を占める軒丸瓦である。須恵質に近い硬質のものも稀に認められるが、大半は軟質である。Ⅱ A02やⅡ A03等の祖形と考えられる瓦当文様である。

南浦遺跡は伊勢国分寺よりも早く創建された寺院跡と考えられ、平安時代まで存続したものと考えられている。この寺院は、河曲郡に拠点を有していたとされる伊勢大鹿氏に因み、大鹿麿寺と呼称されることがあるが、記録や伝承に基づくものではない。

Ⅱ A02 瓦当径は166mmである。中房・内区・外区の境界は圏線で表現され、蓮弁や間弁は平面的である。外区の珠文は蓮弁・間弁に対応して16個配されるが、中房の蓮子は1+5個である。横置型一本作りにより成形され、瓦当部は積上技法による。丸瓦部の凹面・凸面ともに基本的には長軸方向にケズリ調整され、凹面には布目痕が残存する。瓦当部に対する丸瓦部の位置は高く、瓦当厚30mmほどの個体が多い。僧寺講堂の創建瓦と考えられるが、築地南辺付近においては瓦当中央に範傷が発達した個体が多く見受けられる。

瓦当部と丸瓦部の位置関係は、180度異なる2種が見られ、瓦範が方形であった可能性が考えられる。

Ⅱ A03 外区珠文帯の外側に圏線を有するもの(L)と圏線を欠くもの(S)があるが、同一瓦範によるものと考えられる。瓦当径は前者が169mm、後者が147mmである。基本的な文様構成はⅡ A02と同じであるが、中房の蓮子が1+6個となる。横置型一本作りにより成形されており、瓦当部は比較的厚いものが多い。丸瓦部が完存する個体は少ないが、調整技法はⅡ A02と大差ない。金堂・中門・南門で出土例が多い。

Ⅱ A04 Ⅱ A03の外縁ないしは外区圏線付近を中心に彫りなおした範を使用していると思われる。瓦当径は174mmである。横置型一本作りにより成形されていると考えられる。回廊・南門に出土例が多い。

Ⅱ A05 瓦当径は短径125mm、長径140mmで、楕円形となっている。僧寺では瓦当径が最も小さい。文様構成はⅡ A02と同様である。横置型一本作りにより成形されていると考えられ、瓦当部は折曲技法による。

II A06 瓦当径は160mmほどと推定される。中房・内区の圏線と間弁が繋がっており、外区の珠文と間弁・蓮弁との間に対応関係がなく、16個以上になると考えられる。中房の蓮子は完存例がない。焼成は劣悪で、調整技法や製作技法ははっきりしない。丸瓦接合式により成形されていると考えられる。僧寺では北東院に出土例がある。

II A07 突出した外縁を有するもの(L)と有さないもの(S)がある。瓦当径は前者が180mmほど、後者が160mmほどと推定される。蓮弁は弁端が二つに分かれ、蓮弁の周囲には細い界線が廻る。中房の周囲には細い突線からなる界線が廻り、球面状に緩く突出する中房の蓮子は1+5個である。外区には蓮弁に対応して、三葉構成の唐草文が8単位配置される。橙褐色に焼成される。尼寺跡推定地付近でのみ出土する。

II A08 瓦当径は168mmである。II A04に似るが、外区外側の圏線はやや狭く、中房蓮子の配置が異なる。範傷がよく発達する。僧坊・北門で出土する。

### (3) 単弁十葉蓮華文軒丸瓦

II B01 瓦当径は160mmである。中房の蓮子は1+8個、外区の珠文は27個である。蓮弁は、輪郭・子葉・鎬状の稜が突線で表現されている。尼寺跡出土とされるものが1例あるのみである。

### (4) 単弁十二葉蓮華文軒丸瓦

II C01 瓦当径は135mmである。中房の蓮子は7+11個で、不規則に配される。蓮弁は重弁で、外区の珠文は35個である。全体的に彫りが浅いが、中房の蓮子や外区の珠文は強く突出する。蓮弁には範の柁目痕が表れている。南浦遺跡に出土例がある。

II C02 瓦当径は163mmである。蓮弁は重弁で、わずかに照り起りが認められる。わずかに突出する中房には1+8+12個の蓮子があり、わずかに円座が認められる。外区には円座を伴う珠文が36個認められる。横置型一本作りにより成形されていると考えられ、瓦当厚は比較的薄い。橙褐色に焼成されるものが多く、尼寺推定地付近や南浦遺跡、八野遺跡で出土する。II D01とともに尼寺創建瓦と考えられ、外区珠文の密接度合いから軒平瓦II B08やII B09と組み合うと考えられる。

II C03 瓦当径は172mmである。蓮弁は重弁で、わずかに照り起りがみられる。中房はわずかに突出し、1+4+8個の蓮子が配される。外区珠文は27個ほどと考えられる。川原井瓦窯跡群に出土例がある。

II C04 瓦当径は165mmである。蓮弁は重弁で、照り

起りがみられ、その突出が強いため、弁端がハート型となっている。やや突出する中房には蓮子があると思われるが、はっきりしない。外区の珠文は24個である。中房付近には範の柁目痕が強く認められる。川原井瓦窯跡群に出土例がある。

### (5) 単弁十四葉蓮華文軒丸瓦

II D01 瓦当径は170mmである。蓮弁は重弁で、やや照り起りが認められる。わずかに突出する中房には1+4+8個の蓮子が認められ、外区には25個の珠文が廻る。中房蓮子と外区珠文にはわずかに円座が認められる。尼寺推定地や川原井瓦窯跡群から出土する。II C02とともに尼寺創建瓦と考えられる。

### (6) 複弁八葉蓮華文軒丸瓦

南浦遺跡の差替え瓦と考えられる。いわゆる川原寺式の範疇に含まれる。

II E01 瓦当径は173mmである。外縁は素文の傾斜縁で、中房は63mmであり、蓮子は1+4+8個である。未加工の丸瓦が接合されると思われる。

II E02 瓦当径は173mmである。外縁は素文の傾斜縁で、中房はII E01より大きく、70mmである。中房蓮子は1+4+8個である。

### (7) 複弁十二葉蓮華文軒丸瓦

II F01 瓦当径は180mmと推定される。中房蓮子は1+8+12個で、中房は窪む。外縁は直立縁で、外区の珠文は36個程度と想定される。いわゆる藤原宮式系とされる。僧寺では築地西からの出土例があるほか、天王遺跡・智積廃寺にも同範例がある。

### (8) 単弁十一葉蓮華文軒丸瓦

II G01 瓦当径は168mmである。蓮弁は素文で、間弁は無い。中房蓮子は1+9個、外区珠文は27個と推定される。折曲げ技法による一本作りで成形されている。瓦当面側は概略を成形したのち、ヘラ状工具による切込みを施し、薄い板状粘土を貼り付けて瓦当面を完成させている。表面が平滑な板状粘土の貼付けは、範の打ち込みと文様の作出を容易ならしめるための工夫と考えられる。焼成は極めて悪く、胎土は脆い。修造用の瓦と考えられ、北東院や講堂から出土する。

## 3 軒平瓦 (Plate 5~7)

### (1) 二重郭文軒平瓦

いずれも史跡伊勢国府跡を含む長者屋敷遺跡に由来す

る重圏文系軒平瓦である。破片資料が多いため、型式認定できないものが多い。全て一枚作りと考えられる。

I A01 上弦幅 297mm, 厚さ 32mm である。橙褐色を呈するものが多い。凸面は長軸方向にケズリ調整され、凹面広端付近は短軸方向に調整される。弧深が浅く、顎形態は直線顎である。後述の II A01 と色調・焼成・調整が共通する。

I A02 上弦幅 343mm, 厚さ 46mm である。灰色を呈するもの多く、硬質のものは須恵質である。弧深が深く、顎形態は曲線顎である。長者屋敷遺跡で主体を占める型式である。

I A06 上弦幅 348mm, 厚さ 48mm である。弧深が深く、顎形態は曲線顎である。I A02 の文様がやや崩れたものと考えられ、長者屋敷遺跡では北方官衙の長塚南西地区で多く出土している。

I A04 上弦幅 275mm, 厚さ 32mm である。淡灰色を呈し、硬質のものは須恵質である。弧深が浅く、顎形態は曲線顎であるが、伊勢国府跡では直線顎の個体が認められる。

## (2) 外区に文様のない唐草文軒平瓦

II A01 中心飾りは、三葉形文様と対向する単葉が組み合わさったものである。唐草文は三葉構成で、五回反転する。外区に文様は無く、内区の界線と外縁は近接する。弧深は浅く、顎形態は直線顎である。

I A01・I A02・I A06・I A06 と同様に史跡伊勢国府跡を含む長者屋敷遺跡に由来する唐草文系軒平瓦である。

平城宮跡 6719A と同範であることが確認されているが、胎土・焼成・調整は異なることから範のみが宮都からもたらされたと考えられている。平城宮跡では天平初頭頃から天平 17 (745) 年までの第 II -2 期に位置づけられ、のちに伊勢で範の再利用が行われたと考えられる。

## (3) 外区に珠文を有する唐草文軒平瓦

II B01 下弦幅 295mm, 厚さ 60mm である。中心飾りは、下部が膨らんだ花頭形文様と対向する単葉が組み合わさったものである。唐草文は三葉構成で、4 回と 3 分の 2 回反転する。三葉文の先端は基本的に丸く肥厚する。外区の珠文は 13 + 2 + 2 + 13 個である。ほとんどの個体が左上部に範傷を有する。顎形態は直線顎ないしは緩い曲線顎である。金堂・中門・回廊・南門で多く出土する。

II B02 上弦幅 280mm, 厚さ 65mm である。中心飾りは、上部が開いた花頭文様と対向する単葉が組み合わさった

ものである。唐草文は三葉構成で、3 回と 3 分の 1 回反転する。外区の珠文は 15 + 2 + 2 + 15 個である。顎形態は曲線顎である。講堂・南門・築地南辺付近で多く出土する。

II B03 中心飾り・唐草文・外区珠文の構成は II B02 と同じであるが、中心垂飾り・均整唐草文は細く、外区の外側左右に素文の脇区を有する。顎形態は直線顎である。僧寺では出土例が無く、尼寺推定地周辺や南浦遺跡で出土する。

II B04 上弦幅 280mm ほど、厚さ 65mm である。中心飾りは、縦位に配された 2 個の珠文を U 字形文が囲むものである。唐草文は三葉構成が崩れ、均整を欠きながら反転するものである。外区の珠文は 14 + 2 + 2 + 14 個である。顎形態は曲線顎である。凹面は広端付近のみ短軸方向にケズリ調整されるが、大部分は未調整であるため布目痕がほぼ全面に残る。凸面は長軸方向にケズリ調整される。修造用の瓦と考えられ、講堂や北東院で出土している。

II B06 厚さ 55mm である。中心飾りは、二葉形文様と対向する単葉が組み合わさったものである。唐草文は三葉構成で、5 回と 3 分の 1 回反転する。外区の珠文は均整を欠いており、上下がそれぞれ 21 ~ 25 個、左右がそれぞれ 1 ~ 2 個と思われる。顎形態は緩い曲線顎である。尼寺推定地周辺や八野遺跡で出土する。II B08・II B09 と並んで、尼寺の創建瓦と考えられる。

II B07 中心飾りは、二葉形文様と対向する単葉が組み合わさったものであるが、大きく変容している。唐草文は三葉構成をおおよそ保ちつつ、3 回反転する。外縁は幅が広く、大きく突出する。顎形態は曲線顎である。尼寺推定地周辺で出土する。

II B08 厚さ 65mm である。中心飾りは、二葉形文様と対向する単葉が組み合わさったものである。唐草文は三葉構成で、6 回反転と考えられる。外区の珠文は密接して多数配され、上下がそれぞれ 50 個ほど、左右それぞれ 4 個ほどと考えられる。顎形態は緩い曲線顎である。尼寺推定地付近と八野遺跡で出土する。II B06・II B09 と並んで、尼寺の創建瓦と考えられる。

II B09 上弦幅 290mm ほどと推定され、厚さ 66mm である。中心飾りは、上部が開いた花頭文様と対向する単葉が組み合わさったものである。唐草文は三葉構成で、均整を保ちながらリズムカルに 5 回反転する。外区の珠文は密接して多数配され、上下がそれぞれ 50 個ほどと考えられる。顎形態は緩い曲線顎である。尼寺推定地付近と川原井瓦窯跡群から出土する。II B06・II B08 と並んで、尼寺の創建瓦と考えられる。



Ⅱ B10 下弦幅270mm,厚さ88mmである。中心飾りは、珠文とU字形文様を縦位に配し、対向する変形した単葉文で囲むものである。唐草文は三葉構成が大きく崩れたものである。外区の珠文は13+2+2+13個である。顎形態は曲線顎である。調査による出土例はないが、僧寺の修造用瓦と考えられる。

Ⅱ B11 厚さ40mmである。中心飾りは、二葉形文様と対向する単葉が組み合わさったもので、Ⅱ B06と類似した文様構成であるが、唐草文が輪郭線で表現される。顎形態は緩い曲線顎である。尼寺推定地と川原井瓦窯跡群から出土する。

Ⅱ B12 厚さ72mmほどである。中心飾りは大きく変容しており、二葉形文様が縦位に二組配され、上部の二葉形文様には下位に対向する単葉文が付加される。唐草文も三葉構成が崩れ、規則性が見受けられない。外区珠文は外縁に接する。顎形態は曲線顎である。金堂付近で出土しており、修造用の瓦と考えられる。

Ⅱ B13 下弦幅285mm,厚さ53mmである。中心飾りはⅡ B01と同様で、唐草文はⅡ B01と同じ5回と3分

の2反転の三葉文であるが、両端に忍冬文が付加される。外区珠文は13+2+2+13個で、Ⅱ B01と同様である。顎形態は緩い曲線顎である。尼寺推定地周辺や南浦遺跡で出土している。僧寺では出土せず、尼寺の修造用瓦と考えられる。

Ⅱ B14 厚さ64mmほどである。中心飾りは創建期の文様を留めておらず、円環状である。唐草文は一葉構成で、6回反転する。外区には珠文があるが、不鮮明である。顎形態は緩い曲線顎である。Ⅱ B04がさらに退化した文様構成であると考えられる。

その他 型式認定が困難なものとして重弧文やその他の破片資料がある。三重弧文・四重弧文軒平瓦は南浦遺跡で出土するもので、桶巻作りにより製作されていると思われる。唐草文系の破片資料で中心飾りが不明なものは型式認定していない。

#### 【参考文献】

奈良国立文化財研究所 1991『平城宮発掘調査報告XⅢ(本文)』

## 第3章 文字瓦の型式分類

### 1 はじめに

史跡伊勢国分寺跡から出土する押印文字瓦には、専ら伊勢国分寺に供されたものと、他所から二次的にもたらされ再利用されたものがある。後者は、伊勢国府跡として遺跡の一部が史跡に指定されている長者屋敷遺跡に由来し、それぞれ伊勢国分寺式文字瓦、伊勢国府式文字瓦と称され、両者を併せて伊勢国府・国分寺系文字瓦と総称されている<sup>註1</sup>。

伊勢国府・国分寺系文字瓦の特徴は、施印対象を丸瓦・平瓦に限定すること、同一文字として釈読される場合でも丸瓦と平瓦では別の印類が用いられることが多いこと、出土総数に比して想定される印類の種類が多いこと、同文異印の場合、相互に識別が難しいことである。調査済み資料550点に対し、印類の異同に基づく型式数は69型式で、うち丸瓦・平瓦共通に認められる型式数は5型式である。対象別では、丸瓦31型式、平瓦43型式である<sup>註2</sup>。

施印対象の丸瓦は有段式で、円筒形に成形したのち、半裁したものである。同じく平瓦は、一枚作りにより成形されている。丸瓦・平瓦ともに凸面への施印を基本とするが、まれに凹面に施印するものがある。破片資料が多く、施印位置を特定できる例は少ない。

### 2 型式の概要 (Plate 8, Tab. 2)

伊勢国府・国分寺系文字瓦の型式については、印面の形状により、丸印をⅠ、角印をⅡ、その他をⅢとし、印面の周縁に基づき、普通タイプをA、沈線が廻るものをB、浮線が廻るものをC、無郭のものをDとしている。施印対象により、丸瓦はISR、平瓦はISCの記号を付すことがあるが、ローマ数字以降の記号が型式の異同を示す。型式設定は、施印原体の異同に基づき実施している。対応する釈文は必ずしも明確にされていないが、同一と想定される釈文ごとに整理すれば、以下のとおりである。なお、省画・増画されている場合も想定できるので、釈文と本来の文字とは異なる場合も考えられる。陰陽の別は施印対象の状態に基づき記載しており、したがって印類はそれらの逆となる。

#### (1) 「小」

**ISR I A01** 陽刻状である。第1画はほぼ中央に位置し、第2・3画はほぼ正円形である。第2・3画上部や第1・3画下部に範傷が発達する。概ね灰色に焼成される。

**ISC I A02** 陽刻状である。第1画は印面の中心からずれる。第2・3画はほぼ正円形であるが、径が異なる。

第2画上部に範傷が発達する。全体的に彫りが深い。印面が荒れている場合が多い。押印場所がわかる資料では、長軸方向の中央付近に施印されている。

#### (2) 「前」

**ISR I A03** 陽刻状である。「巴」の鏡文字との解釈もあるが<sup>註3</sup>、「前」の第1・2画に相当する部分があるとして「前」の異体字と判断される。陰影がゆがむ例のあることから、粘土板の段階で押印されたと思われるものがある一方、成形後の曲面に押印されたと思われる例もある。

**ISC I A03** 丸瓦と共通型式である。出土地不明の資料が1例のみ知られる。

**ISC I A21** 陽刻状である。印面は、天地方向にやや長く、隅丸方形に近い。字画の構成はI A03と同じであるが、印面・印文ともにI A03より大きい。長軸方向で中央付近に施印されているものがある。

#### (3) 「人」

**ISR I B02** 陰刻状である。印面は正円形で、印文は天側約3分の2に収まる。印文は最も整っており、楷書体を忠実に表現している。第1画は左に偏り、第2画の右はらいは大きく、力強い。押印位置は、長軸方向でほぼ中央のものや狭端側に寄るものがある。

**ISR I A04** 陽刻状である。印面はほぼ正円形で、印文はほぼ中央に配されるが、第1画は大きく左に偏り、第2画の右はらいは大きく曲線的である。字画の太さは一定である。国分寺跡では出土していない。

**ISR I A05** 陽刻状である。印面は正円形で、印文はわずかに左に偏るものの、ほぼ中央に配される。第2画の起筆位置は高く、字画は全体的に直線的である。長軸方向でほぼ中央に施印されるものや狭端側に寄るものがある。凹面に施印されている例が知られ、この例では、粘土板を内型に巻きつける前に施印している。

**ISC I A06** 陽刻状である。印面は正円形で、印文は印面の天側約3分の2に収まる。第1画は中央からやや左に寄る。ほぼ中央に施印されていることがわかる個体がある。

**ISC I A07** 陽刻状である。印面は正円形で、印文は印面の天側約5分の3に収まる。第1画は左に偏り、第2画の右はらいは大きく屈曲する。砂礫を多く含む。

**ISC I A36** 陽刻状である。印面はほぼ正円形で、印文は中央に配される。第1画は直線的で、第2画の右はらいは小さい。国分寺跡では出土していない。

#### (4)「上」

ISR I A10 陽刻状である。印面はほぼ正円形で、印文は中央に配される。字画は太く、第3画は短い。横位に木目が残る。国分寺跡では出土していない。

ISC I A11 陽刻状である。印面は円形で、やや天地方向に長い。印文は地側にやや偏る。深く押印される例が多い。灰色に焼成される例が多い。

ISC I A18 陽刻状である。印面はややいびつな円形で、印文は左に偏る。第1画は印面の中央からわずかに左に偏る。第3画は左端が長く、やや左下がりである。胎土には砂礫が目立ち、器厚は薄い。ほぼ中央に押印されるものや短軸方向中央やや狭端寄りに施印されるものがある。

ISC I A29 陽刻状である。印面はほぼ正円形で、印文は、天側から5分の3に配し、大きく左に偏る。端軸方向ほぼ中央で、狭端よりに施印されるものが認められる。

ISR I A09 陽刻状で、鏡文字である。印面は正円形で、印文は右に偏る。字画は太く一定で、第2・3画は短い。横位に木目が認められる。長軸方向中程に施印される。

#### (5)「羊」

ISR I A19 陰刻状である。印面はややいびつな円形である。印文は地側に偏り、第6画の末端が印面の周縁に接する。第1画よりも第2画の方が大きい。国分寺跡では出土していない。

ISC I A14 陰刻状である。印面はややいびつな円形である。印文は右よりに配され、天地ともに印文と接しない。第1画より第2画の方が小さい。国分寺跡では出土していない。

#### (6)「大」

ISR I A20 陽刻状である。印面は正円形である。印文は天側に偏る。第3画は第2画の起点から始まる。第2・3画ともに直線的で、払いは小さい。国分寺跡では出土していない。

ISR I A25 陽刻状である。印面はややいびつな円形である。第3画は中央部が太い。第1画右半から第3画起筆付近にかけて縦方向の傷がある。押印位置の分かる個体では長軸方向中程に押印される。国分寺跡では出土していない。

ISR I A32 陽刻状である。印面は天地方向に長い楕円形である。第3画は太い。右下がりに木目が残る。国分寺跡では出土していない。

ISC I A33 陽刻状である。印面は地側が膨れる楕円形である。字画は太く、印文は大きい。国分寺跡では出土

していない。

#### (7)「手」

ISR I A23 陽刻状である。印面はわずかにゆがみのある円形である。印文は地側に偏る。第2画は右下がり、第3画は右上がり、第4画は左払い状である。天地方向に木目が平行する。印上で分割されている例がある。国分寺跡では出土していない。

ISR II A07 陽刻状である。印面は隅丸方形で、II A04より角張る。印文は右に偏り、第2・3画の終筆は印面の右周縁に接する。第1画と印面天側周縁との間隔は狭い。国分寺跡では出土していない。

ISC I A28 陽刻状である。印面はやや角張った天地方向に長い楕円形である。第3画は鋭角の右上がり、第4画は左払いである。国分寺跡では出土していない。

ISC I A34 陽刻状である。印面はやや歪みのある円形である。第1～3画は右上がり、平行する。国分寺跡では出土していない。

ISC II A04 陽刻状である。印面は隅丸方形である。第2・3画は水平で、第4画は左払いである。凸面は縄タタキが弱く、軟質で、淡黄灰色に焼成される。押印位置の分かる個体ではほぼ中央に押印される。国分寺跡では出土していない。

ISC II A07 丸瓦と共通型式である。国分寺跡では出土していない。

ISR I A35 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。片仮名の「キ」状の印文であるが、字画の構成はI A23・II A07・I A28・I A34・II A04・II A07など「手」と認識できるものに類似することからここに含めた。天地方向の木目が観察される。国分寺跡では出土していない。

#### (8)「川」

ISR I A24 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。3画とも収筆は懸針状である。印面には天地方向と直行して木目が残される。押印位置の分かる個体では中央やや広端寄りに施印される。国分寺跡では出土していない。

ISC I A22 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。字画の太さはほぼ一定である。第3画の起筆は第1・2画よりも上にあり、第3画はやや右に傾く。

#### (9)「中」<sup>註4</sup>

ISR I A26 陽刻状である。印面は歪んだ円形である。印文は右に偏り、縦画の起筆と収筆は周縁に接し、直線的である。押印位置の分かる個体では、玉縁寄りや中央

に施印される。

**ISR I A27** 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。縦画の起筆は周縁に接し、右に傾く。押印位置が分かる個体では、玉縁寄りや中央に施印される。

**ISC I A08** 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。印文は天側に偏る。縦画の起筆は周縁に接し、収筆は左に曲がる。

**ISC I A12** 陽刻状である。印面は歪んだ円形である。縦画の起筆は周縁に接し、収筆はやや左に曲がる。凸面狭端から6～9cmの付近に施印される例が多い。

#### (10)「宿」<sup>註5</sup>

**ISR I C02** 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。印文は天側に偏る。通用字体<sup>註6</sup>の第6画を欠き、㇀・イ・白で構成される。第1画は円形である。通用字体における第8画の起筆には、下向きの小さな突起がある。押印位置が分かる個体では、長軸方向中央10cmほどの範囲に施印されるものが多い。国分寺跡では出土していない。

**ISR I C08** 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。印文は天側4分の3に配され、字体は天地方向に縮む。通用字体の第6画を欠き、㇀・イ・白で構成される。第3画は中央が太い。押印位置が分かる個体では、長軸方向中央や玉縁寄りに施印される。国分寺跡では出土していない。

**ISR I C09** 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。印文は左に偏る。通用字体の第7画を欠き、㇀・イ・一・日で構成される。通用字体における第3・6画の収筆と同じく第9画の転折部分が接する。国分寺跡では出土していない。

**ISR I C10** 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。通用字体の第6画を欠き、㇀・イ・白で構成される。印文は天側に大きく偏る。長軸方向で中央やや広端寄りに施印されている個体がある。

**ISC I C01** 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。印文は右に偏り、圏線と接する。通用字体の第6画を欠き、㇀・イ・白で構成される。同文と考えられるものの中では、印面・印文ともに最大である。ほぼ中央に施印される例がある。

**ISC I C14** 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。第1画は圏線に接し、第3画と離れる。字画は全体に太いが、第6画のみ細い。国分寺跡では出土していない。

**ISC I C15** 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。通用字体の第6画を欠き、㇀・イ・白で構成される。第4・5画の「イ」は「人」形である。通用字体の第7画に相当する筆画は左に突き出る。国分寺跡では出土していない。

**ISC I C22** 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。通用字体の第6画を欠くが、同じく第10画以降に1画加わるため、㇀・イ・白で構成されている。第1画は圏線に接し、通用字体の第7画に相当する筆画は第3画と接する。国分寺跡では出土していない。

**ISC I C03** 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。「㇀」に従うと考えられるが、積文ははっきりしない。長軸方向の中ほどに施印される例がある。

**ISR I C04** 陽刻状である。印面はやや潰れた円形である。「㇀」に従うと考えられるが、積文ははっきりしない。玉縁寄りに施印される例がある。国分寺跡では出土していない。

**ISC I C04** 丸瓦と共通型式である。

**ISC I C18** 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。「㇀」に従うと考えられるが、積文ははっきりしない。施印は浅く、未調整のまま施印される例が多いため、印面は不鮮明である。狭端寄りに施印される例がある。

#### (11)「水」

**ISR I C11** 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。第1画のはねが右を向くので、鏡文字であると考えられる。圏線は左側が太い。第2画の起筆及び収筆と第3画の起筆、第4画の収筆は圏線に接する。第2画の転折はやや鋭角である。国分寺跡では出土していない。

**ISC I C05** 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。圏線は地側から左にかけて太い。字画は全体的に太い。第2画及び第3画の起筆は圏線に接する。第1・3・4画は接する。第3画と第4画の角度は鋭角である。国分寺跡では出土していない。

**ISC I C07** 陽刻状である。印面は天地方向に潰れる。字画は全体的に太い。第1画のはねが右を向くため、鏡文字であると考えられる。第3画の起筆は圏線に接する。第1・3・2画は接する。ほぼ中央に施印されていると考えられる資料が複数ある。国分寺跡では出土していない。

**ISC I C21** 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。圏線は右が太い。字画は天側に偏り、全体的に細い。第1画のはねが右を向くため、鏡文字であると考えられる。第1画の起筆と収筆のはねは大きく右に伸び、第1画のはねと第2画のはねは接する。ほぼ中央や狭端寄りに施印されるものがある。国分寺跡では出土していない。

#### (12)「□□□□」<sup>註7</sup>

**ISR I C12** 陽刻状である。印面は円形であるが、歪んでいるものが多い。粘土板を内型に巻きつける前に施印

している可能性がある。押印位置は、玉縁側の筒部縁辺から5cmのもの、中程のもの、広端側縁辺から12cmのものなどがあり、多様である。

(13)「□□□」

ISR I C16 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。圏線は右側が太い。3文字印と考えられ、左側2文字はI C12と同文の可能性があり、縄タタキ部分に施印されている例が多く、判読が難しい。ほぼ中央に施印される例がある。国分寺跡では出土していない。

ISR I C17 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。圏線は右側から地側にかけて太く、字画も全体的に太い。3文字印と考えられ、左側2文字はI C12と同文の可能性があり、右側の1文字はI C12の右上に類似する。国分寺跡では出土していない。

ISC I C17 丸瓦と共通型式である。狭端寄りに施印されている。

(14)「首」

ISR I C13 陽刻状である。印面はややいびつな円形である。圏線は天地側が細い。第1・2画の起筆、第5画の収筆、9画の起筆は圏線に接する。押印位置が分かる個体では中央より広端寄りに押印されている。凹面広端は横方向に調整される。

ISC I C19 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。常用字体の第4画を欠く。印文・印面ともに大きい。国分寺跡では出土していない。

ISC I C20 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。常用字体の第4画を欠く。国分寺跡では出土していない。

(15)「百」<sup>註8</sup>

ISR I A13 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。第1画は右上がりである。印面には、同心円状に木目が残る。長軸方向の中央やや玉縁寄りに施印される。国分寺跡では出土していない。

ISC I A30 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。「石」に近いが、第2画が短く、「百」の常用字体の第5画を欠くものと見ることができる。天地方向に木目が残る。狭端から9cmほどに施印される例がある。

(16)「守」

ISR II A02 陽刻状である。印面は天地方向に長い方形である。「守」の鏡文字と考えられる。第1画は丸く大きい。灰色に焼成されているものが多い。左上から右下方向の斜めの長軸方向中央から少し広端寄りに施印されている

例がある。国分寺跡では出土していない。

ISR II A05 陽刻状である。印面は歪んだ逆台形である。「守」の鏡文字と考えられる。第1画と第3画の間が広く空き、第2画の起筆と第3画の起筆が接触しない。「ㇿ」と「寸」の間が広い。天地方向に木目が残る。

(17)「天」

ISR II A06 陽刻状である。印面はやや歪んだ方形である。字画の起筆及び収筆は周縁に接する。右上がり斜め方向に木目が残る。長軸方向で広端から6cmほどに施印される。国分寺跡では出土していない。

ISC II A06 丸瓦と共通型式である。国分寺跡では出土していない。

(18)「乙」<sup>註9</sup>

ISC I A15 陽刻状である。印面は不正円形である。積読が難しく、「丁」と解されることが多かったが、「乙」の鏡文字である可能性がある。中程に施印されている例がある。

ISC I A16 陽刻状である。印面は楕円形である。印文以外の部分には布目圧痕が観察できるが、いずれの資料でも同様のパターンを示しており、印類に由来する転写であると考えられる。したがって、印類は陶質ないしは瓦質である可能性が高い<sup>註10</sup>。

(19)「申」

ISC I A17 陽刻状である。印面はほぼ正円形である。印文はやや右に偏る。第5画は第1～4画の「日」の部分の左寄りに配される。第5画の起筆及び収筆は周縁に接し、収筆はわずかに左に曲がる。

ISC I A31 陽刻状である。印面はやや歪みのある円形である。I A17よりも印面の径が小さい。印文は印面の中央に配される。第5画の起筆及び収筆は周縁に接し、収筆はわずかに左に曲がる。国分寺跡では出土していない。

(20)「領」

ISC I B01 陰刻状である。印面はほぼ正円形である。印文は印面の右寄りに配される。第1画の左はらいは長い。国分寺跡では出土していないが、尼寺推定地に近い国分西遺跡や国分尼寺所用瓦の瓦屋と考えられる川原井瓦窯跡群で出土しており、国分尼寺に関連が深い資料である。

(21) 「三」

ISC I C06 陽刻状である。印面は天地方向に長い楕円形である。字画及び圏線は太い。第1画は起筆が、第2・3画は収筆が圏線に接する。長軸方向で中程に施印されている例がある。国分寺跡では出土していない。

(22) 「勾」

ISC II A01 陽刻状である。印面はほぼ正方形である。「勺」のみで「ム」の表現は認められないが、II A03との類似から釈文は「勾」と推定される。凹面は狭端に沿って短軸方向に調整される他は未調整で、全面に布目圧痕が残る。凸面は長軸に平行して密に縄目タタキが施され、側縁は2面構成である。凹面狭端付近の中央に正位に施印される。国府跡では全く出土せず、国分寺専用の瓦に施印されたと考えられる。

ISC II A03 陽刻状である。印面はほぼ正方形であるが、II A01よりも大きい。「勺」や「句」の可能性はあるものの、所在郡名との兼ね合いから「勾」と解される。施印対象となる瓦や施印の特徴はII A01と共通し、II A01同様、国分寺専用の瓦に施印されたと考えられる。

(23) 「十」

ISC II A08 陽刻状である。印面はほぼ正方形である。単なる記号である可能性も考えられるが、「十」とした。字画の端部は周縁に接する。瓦や施印の特徴はII A01やII A03と同様であると考えられる。小院出土の1点のみが知られる。

(24) 「工」

ISR III D01 陰刻状である。印類は字画のみで構成される。単なる記号である可能性も考えられるが、「工」とした。講堂出土の1点のみが知られる。

### 3 伊勢国分寺跡出土の文字瓦

本書掲載の施印対象に基づく出土総数は68個体あり、複数施印されるものが2点あるので、施印数は70点である。本書掲載以外の資料を含めると、伊勢国分寺跡出土の施印数は92点となる。大半は、伊勢国府から二次的にもたらされた再利用品であるが、II A01、II A03、II A08、III D01は国分寺専用のものであると思われる。

国分寺跡での出土は、北東院で36点(施印数38点)、講堂で9点、小院で8点、僧坊で6点、その他で6点である。

#### 【註】

- 1 鈴鹿市考古博物館 2004・3頁。
- 2 主に鈴鹿市考古博物館所蔵のものを調査した結果に基づき、他機関所蔵で、未調査のものは含めていない。
- 3 村山 1992・25頁。
- 4 「中」の他、「内」とされてきたものも同文とした。
- 5 「ㄣ」を構成要素とする不明文字もここに含めた。
- 6 常用漢字表(平成22年11月30日内閣告示)による。
- 7 判読不可能であるが、左下は「印」の省画の可能性はある。
- 8 「石」とされてきたものもここに含めた。
- 9 「丁」とされてきたが、ここでは「乙」の鏡文字とした。
- 10 鈴鹿市教育委員会 2002・3頁。

#### 【参考文献】

- 鈴鹿市教育委員会 2002『伊勢国府跡4』  
鈴鹿市考古博物館 2004『企画展文字瓦を考える』  
村山邦彦 1992「鈴鹿市広瀬長者屋敷遺跡の研究」『古代学研究』第128号  
常用漢字表(平成22年11月30日内閣告示)



## 第4章 出土遺物

### 1 南門の瓦

軒丸瓦 (Plate9-1～13) 1・5・9はⅡ A04, 2・4・6・7・10はⅡ A03で, 8・11～13は蓮華文であるが形式不明である。うち, 11・13はⅡ A02の可能性もある。いずれも横置型一本作りによる。

1は丸瓦部まで残存するほぼ完形の資料であるが, 1以外は瓦当面のほぼ全体, あるいは一部が残存する。1・5は丸瓦部が曲線的で, 1は瓦当部がやや厚めである。

1・12は南門北の溝SD0143, 2は南門北の溝SD0142, 5・11は南門北の土坑SK0148, 13は南門西の土坑SK0156上面から出土した。

軒平瓦 (Plate10-14～19, Plate11-20～22, Plate12-23～28) 14～20はⅡ B02, 21～27はⅡ B01で, 28は唐草文であるが, 型式は不明である。いずれも一部ないしは大部分を欠き, 瓦当面を完存するものはない。いずれも緩い曲線顎で, 一枚作りである。

14の凸面広端側に赤色顔料が付着し, 軒先の出は12cmと推定される。16は右側が斜めに切り取られたように成形された隅軒平瓦で, 凸面は長軸方向にケズリ調整される。23・25は左上部に範傷が認められる。

14・18・20・22は南門北の溝SD0143, 21・23は南門北の土坑SK0148から出土し, その他は攪乱層から出土した。

鬼瓦 (Plate13-29～32) 鬼面文鬼瓦である。29は上歯・上牙部分, 30は左下部, 31は眉部分, 32は左上部の破片である。

29・30は南門北の土坑SK0148, 31は南門北の溝SD0143出土で, 32は第18次調査で南門付近から出土したとされる資料である。

丸瓦 (Plate13-33) 有段式・分割式で, 側縁の端面及び凹面は未調整である。南門西の溝SD0151から出土した。

### 2 中門の瓦

軒丸瓦 (Plate14-34～44) 34～41はⅡ A03, 42・43はⅡ A04, 44はⅠ A09である。34・43・44は丸瓦部が曲線的であるが, 他は直線的である。すべて横置型一本作りによる。

34はほぼ完形で, 瓦当部は極めて厚い。44は重圏文系軒丸瓦で, 丸瓦部は瓦当部の高い位置に取り付く。瓦当部は薄手で, その断面は凸レンズ状である。

すべて中門周囲の瓦溜から出土したもので, 34・43・44は中門南のSD0131上層, 37～40はSK0132上層, 35・36は同じく西のSD0103上層から, 41・42は同じく東のSD0115上層から出土した。

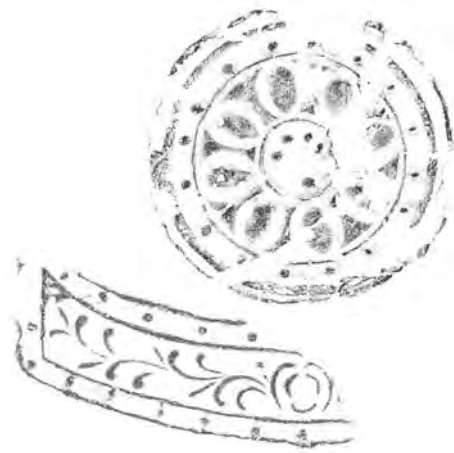


Fig. 2 南門の軒瓦 IRE Ⅱ A03・ICE Ⅱ B01



Fig. 3 中門の軒瓦1 IRE Ⅱ A03・ICE Ⅱ B01



Fig. 4 中門の軒瓦2 IRE Ⅰ A09



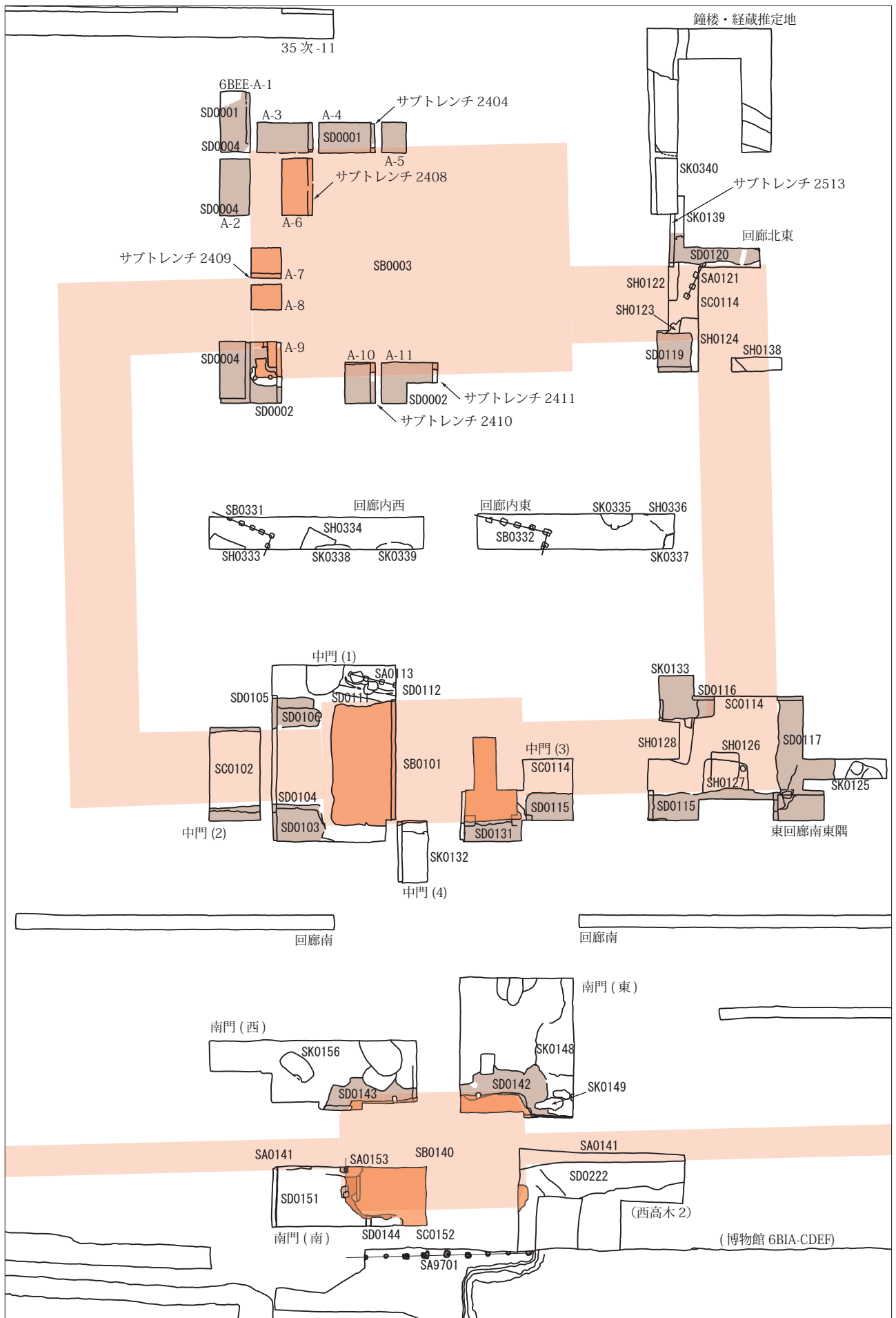


Fig. 5 南門・中門・金堂付近調査区および主要遺構配置図 (1/500)

軒平瓦 (Plate15-45 ~ 48, Plate16-49 ~ 55) すべて II B01 である。顎形態は緩い曲線顎で、一本作りである。45 は瓦当面完形で、平瓦部も多く残存する。中門南の瓦溜から出土した。45 ~ 54 は SK0132 上層, 55 は SD0131 上層からの出土である。

鬼瓦 (Plate16-56) 56 は鬼面文鬼瓦の眉部分の破片で、25 次調査で出土した。

埴 (Plate16-57) 57 は板状の埴 (A 類) の破片である。中門南の瓦溜 SK0132 上層から出土した。

### 3 回廊の瓦埴

軒丸瓦 (Plate17-58 ~ 62, Plate18-63 ~ 67) 58・59・63・64・66・67 は II A04, 60・62 は II A03, 61 は II A02, 65 は型式不明の蓮華文である。すべて横置型一本作りである。

58 ~ 60・66・67 の丸瓦部は曲線的である。58・59 は狭端部を除いてほぼ完形である。

58・59・63 は回廊南東の SK0115 瓦溜から、60 ~ 62・65 は表土、64・66 は回廊北東の SD0119 瓦溜から出土した。

軒平瓦 (Plate18-68・69, Plate19-70 ~ 81, Plate20-82 ~ 89, Plate21-90 ~ 100) 68 ~ 80・82 ~ 92・94 ~ 98 は II B01, 81 は重圏文系の I A06, 93・99・100 は II B02 である。すべて一枚作りである。

68・82 は瓦当部と平瓦部の多くを留める。すべて緩い曲線顎である。82 は凹面の調整が少なく、糸切り痕が多く残る。70 は範の打ち込みが浅い。92 は瓦当面左上の範傷が発達していない。

68・74 ~ 75・79・80・83 ~ 86・88 は回廊南東の SD0115 瓦溜から、77・82・87・89 は SD0117 瓦溜から、69 ~ 72・76 は SD0103 瓦溜から、81 は回廊南東のピットから、73 は回廊南西の SD0106 瓦溜、78 は回廊北東の SD0119 瓦溜から、90 ~ 100 は表土ないしは埋立土の出土である。

鬼瓦 (Plate21-101) 鬼面文鬼瓦で、左半の多くを留める。上牙・下牙の表現が認められる。表土から出土した。

埴 (Plate21-102) 回廊南東の SK0125 から出土した。板状 (A 類) の破片である。

平瓦 (Plate22-103 ~ 105) いずれも一枚作りによる。

103・104 は側縁部が 3 面構成で、凸面には長軸方向に縄タタキ痕が認められる。いずれも回廊南東隅からの出土である。

105 は文字瓦である。I A17 で、「申」と釈読される。中門南東の瓦溜からの出土である。



Fig. 6 回廊の軒瓦 1 IRE II A04・ICE II B01



Fig. 7 回廊の軒瓦 2 ICE I A06



Fig. 8 金堂の軒瓦 1 IRE II A03・ICE II B01

#### 4 金堂の瓦埴

軒丸瓦 (Plate23-106 ~ 108・119) 106・119はⅡ A 02, 107・108はⅡ A03である。すべて横置型一本作りである。

106・119は瓦当面中央の範傷が顕著である。

106・119は金堂南SD0002から, 107・108は金堂西SD0004から出土した。

軒平瓦 (Plate23-109, Plate24-110 ~ 112) 109・110・112はⅡ B01, 111はⅡ B12である。いずれも顎形態は緩い曲線顎である。すべて一枚作りである。

109・110は瓦当面左上の範傷が発達していない。109はほぼ完形で, 凸面広端側には赤色顔料が付着し, 軒先の出は12cmと推定される。111は同型式で唯一の出土例である。

109・110は金堂南のSD0002から, 111は金堂西SD0004から, 112は金堂北SD0001から出土した。

埴 (Plate24-113・114) 113は角柱状 (B類), 114は板状 (A類) で, 114はほぼ完形である。114の表面には板ナデが認められる。113は金堂南からSD0002から, 114は金堂西SD0004から出土した。

平瓦 (Plate25-115・116) いずれも一枚作りによる。

115・116ともに側縁は3面構成であるが, 116は器壁が極めて薄い。金堂北の溝SD0001から出土している。

#### 5 講堂の瓦埴

軒丸瓦 (Plate26-117・118・120・121・204, Plate 27-122・123, Plate28-124 ~ 136)

117・118・120 ~ 124・127・128・130 ~ 132・134 ~ 136・204はⅡ A02, その他はⅡ G01である。いずれも横置型一本作りである。

Ⅱ A02の多くの個体において瓦当面中央に直線的に発達する範傷が117・118には認められず, 比較的初期に生産されたものと考えられる。117・118・122・123は丸瓦部を多く留め, 丸瓦部は曲線的で, 瓦当部は薄い。

125・126は瓦当面を多く留めるⅡ G01の好例で, 瓦当部は厚手であり, 軟質である。

講堂北の表土から出土した204以外は, 講堂周囲の溝状遺構から出土したもので, 117・118・121 ~ 123・128は講堂北のSD9913から, 120は講堂西のSD9902から, 124・127・131・133・135・136は講堂南のSD9912から, 125・126・129・130・132・134は講堂東のSD9905から出土した。うち117・118・121 ~ 123は, 軒下へ落下した状態を留めて出土した。

軒平瓦 (Plate29-137 ~ 140, Plate30-141 ~ 142, Plate31-143, Plate32-144・145, Plate33-146 ~ 148,



Fig. 9 金堂の軒瓦2 ICE II B12

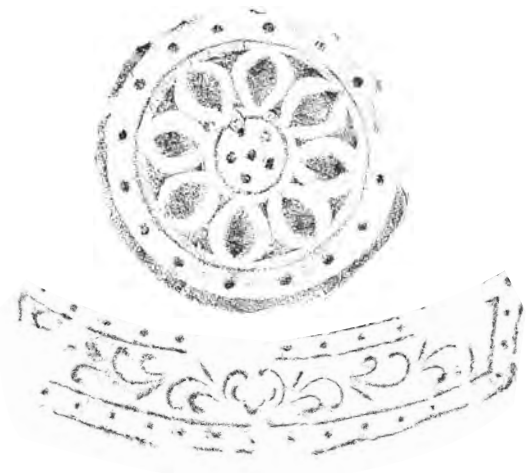


Fig. 10 講堂の軒瓦1 IRE II A02・ICE II B02



Fig. 11 講堂の軒瓦2 IRE II G01・ICE II B14

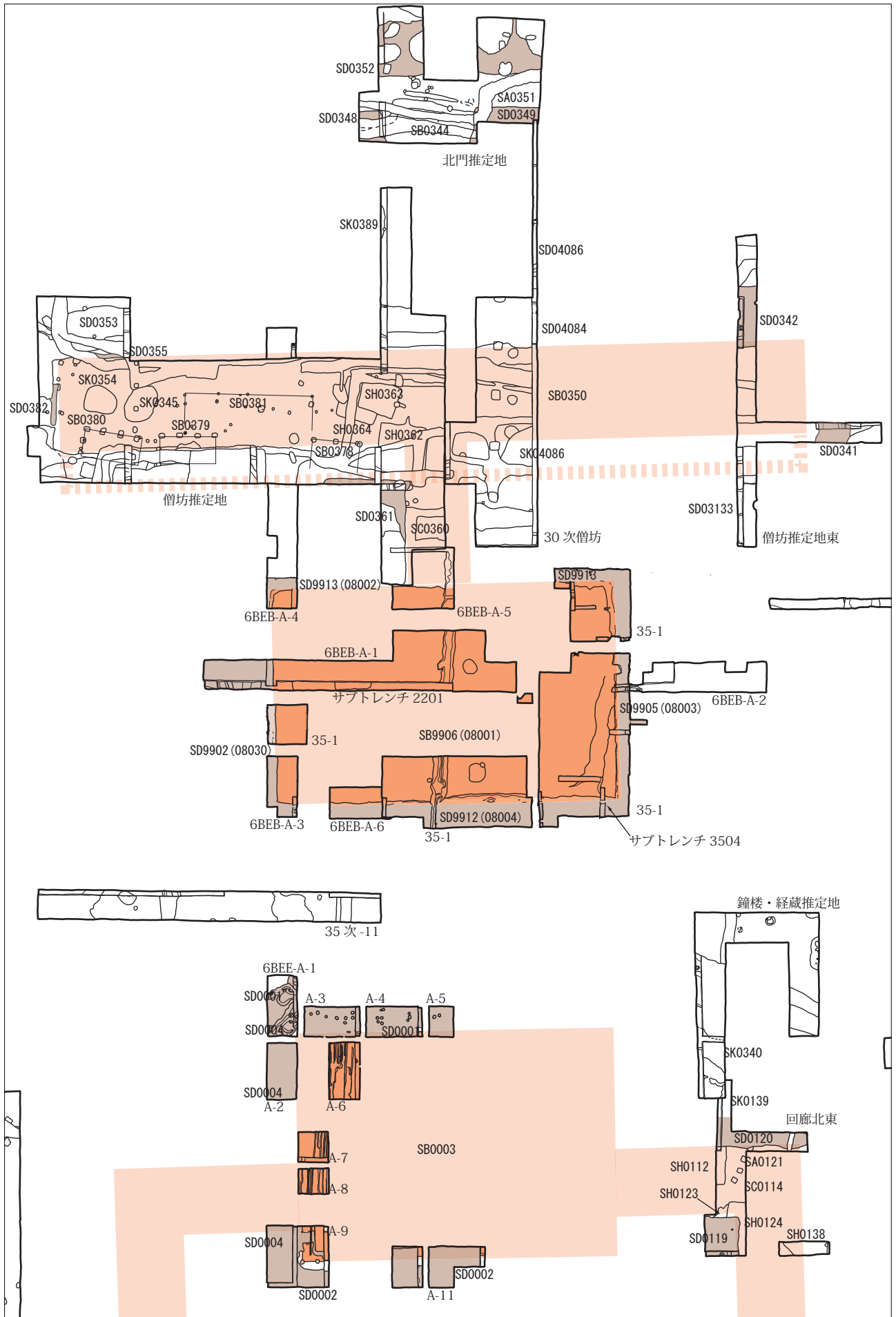


Fig. 12 講堂・僧坊付近調査区および主要遺構配置図 (1/500)

Plate34-149～153, Plate35-154～159, Plate36-160～171, Plate37-172～177, Plate38-178～184)  
137・139～143・145～149・152・155・160～171・178はⅡB02, 138・144・150・153・154・179～184はⅡB01, 156・157・172はⅡB04, 173・174はⅠA04, 151・158・159・175～177は型式不明の唐草文である。すべて一枚作りである。

141～143・145・146・149は平瓦部を多く留め、凸面は長軸方向にケズリ調整され、凹面は広端付近や側縁を中心に調整される他は布目痕や糸切痕が残る。基本的にすべて緩い曲線顎である。143は凸面広端側に赤色顔料が付着し、軒先の出は12cmと推定される。

137・141～143・149・157～159・161は講堂北のSD9913から, 138・140・144～148・153は講堂西のSD9902から, 139は講堂東から, 154・156・160・162・163・172・176・179・182・183は講堂東のSD9915から, 150～152・155・164・166～170・174・175・178・180・181は講堂南のSD9912から, 184は講堂南から出土した。140・144・147・148は瓦埴積基壇の部材として使用されていたもので, 137・141～143・146・149は軒下へ落下した状態を留めて出土した。139・165・171・173・177・184は表土等からの出土である。

**埴** (Plate39-185) 断面台形の埴(C類)で, ほぼ完形である。端部に, 焼成後の打ち欠き加工が認められる。講堂西の溝状遺構SD9902から出土した。

**丸瓦** (Plate39-186～191・506, Plate40-323・392)

すべて有段式・分割式である。188～191・323・392・506は押印文字瓦である。188はⅠA26で, 「中」と釈読される。189・190はⅡA05で, 「守」の鏡文字と考えられる。191はⅢD01で「工」と釈読される。392はⅠA05で, 「人」と釈読される。506はⅠA27で, 「中」と釈読される。323は型式不明である。

186・187はほぼ完形の資料である。186は, 2分割後, 側縁部に調整が加えられ, 凹面広端縁に接して調整される。187の端部は未調整である。188は押印部付近に粘土板の接合部分が認められる。

186～191・323・392は講堂周囲の溝状遺構から出土し, 506は表土から出土した。186～187・506は講堂北のSD9913から, 188～190・323・392は講堂南のSD9912から, 191は講堂東のSD9915から出土した。うち186・187は, 軒下へ落下した状態を留めて出土した。**平瓦** (Plate40-192～196, Plate41-197～201・507)

すべて一枚作りである。199～201・507は押印文字瓦である。199・507はⅠA12で, 「中」と釈読される。

200はⅠA18で, 「上」と釈読される。201はⅠC03である。

194・195は, 側縁が2面構成で, 凹面には布目が残る, 194では凹面の布目が狭端面に, 同じく195では側縁にも連続して残る。192・193, 197・198は側縁が3面構成となるものである。192はやや器壁が薄い。196には凸面広端付近に成形台に由来すると思われる記号状の圧痕が認められる。198は凸面全面に糸切痕が残る。

192～198・200・201・507は講堂周囲の溝状遺構から, 199・507は表土から出土した。192・193・197・198・507は講堂北のSD9913から, 194・201は講堂東のSD9915から, 195・196・199・200は講堂南のSD9912から出土した。うち192・193・197・198は, 軒下へ落下した状態を留めて出土した。

## 6 僧坊の瓦埴

**軒丸瓦** (Plate42-202・203・205～207) 202・203はⅡA02, 205・206はⅡA08, 207は重圈文である。いずれも横置型一本作りによる。

202・203は瓦当部が薄く, 203は範傷が発達する。205・206は瓦当部が厚手で, 205はとりわけ分厚い。

202・203は僧坊西半の溝SK0353から, 207は僧坊西半の土坑SK0389から, 205・206は僧坊東半の溝SD03133から出土した。

**軒平瓦** (Plate42-208～216) 208・209はⅡB01, 210～216はⅡB02である。すべて緩い曲線顎で, 一枚作りである。

208・210・213・215・216は僧坊東半の溝SD03133から, 214は同じくSD0342から, 209・211・212は僧坊西半の表土から出土した。

**埴** (Plate43-217) 断面台形(C類)の埴である。僧坊東半の土坑SK04086から出土した。

**丸瓦** (Plate43-218・219) いずれも有段式・分割式である。218は完形で, 側縁端部は未調整である。219は押印文字瓦のⅠA26で, 「中」と釈読される。いずれも僧坊東半の溝SD04084から出土した。

**平瓦** (Plate43-220～224) いずれも一枚作りと考えられる。

220はⅠA22, 221はⅠA11で「上」と釈読される。222・223はⅠC03で, 「宀」に従う文字と考えられる。224は型式不明である。220・224は僧坊西半の表土などから, 221～223は僧坊東半の溝SD0342から出土した。



Fig. 13 僧坊の軒瓦 2 IRE II A08・ICE II B02



Fig. 14 北東院の軒瓦 IRE II G01

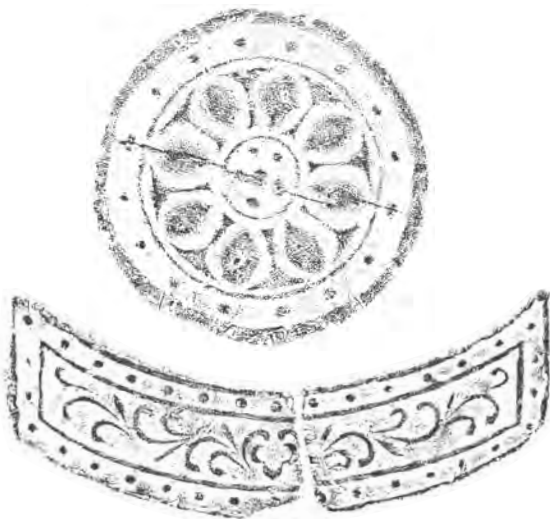


Fig. 15 南東門の軒瓦 IRE II A02・ICE II B02

## 7 小院の瓦埴

軒丸瓦 (Plate44-225～230) 225～227・230はⅡ A02, 228はⅡ A04, 229はⅡ A03である。すべて横置型一本作りである。

225～227・230は瓦当部が薄く, 225・227は范傷がよく発達する。229の瓦当部は, 積み上げ技法により, 表層には別の粘土板が張り付けられる。

225・227は小院築地東辺の内溝SD0244, 226は小院築地東辺の内溝を切る土坑SK05014, 228は小院築地南辺の内溝SD05002-2, 229・230は小院築地東辺のサブトレンチ3516から出土した。

軒平瓦 (Plate44-231～235, Plate45-236) 231は型式不明の重圈文系, 232はⅠ A02, 233はⅡ A01, 234・236はⅠ A04, 235はⅠ A01である。すべて伊勢国府跡(長者屋敷遺跡)に由来すると考えられるもので, 一枚作りによる。

233・234が直線顎であるほかは, 緩い曲線顎である。236はほぼ完形資料である。

231は小院築地南辺の内溝SD05002-1, 232は小院築地東辺の内溝を切る土坑SK05014, 233は小院築地東辺の内溝SD0244, 234は小院築地東辺のサブトレンチ3516, 235は小院築地西辺のサブトレンチ3506, 236は小院西辺の土坑SK08015から出土した。

鬼瓦 (Plate45-237, Plate46-240) 237・240は鬼面文鬼瓦で, 237は左下の破片, 240は上半部である。

いずれも, 伊勢国府跡の北方官衙に由来するものと考えられる。240は眉間に焼成前穿孔の釘孔がある。

237は小院築地西辺の内溝SD05001, 240は小院築地東辺の内溝SD0244から出土した。

埴 (Plate45-238・239) 板状(A類)の埴である。238は小院南西の小溝SD05040の上面から, 239は小院南辺内溝東半部分SD05002-2の上面から出土した。

丸瓦 (Plate46-241・243・244) いずれも有段式と思われ, 分割式である。241・243の側縁は未調整で, 241には粘土板の接合痕が認められる。いずれも凸面に施印された押印文字瓦である。

241はⅠ A 26で, 「中」と釈読され, 243はⅠ C 12で, 釈文不明の4文字印であり, 244は型式不明である。241は小院西辺の土坑SK08015から, 243は小院東の瓦溜SX08010から, 244は小院東辺内溝SD0244から出土した。

平瓦 (Plate46-242・245・246・247・249) いずれも一枚作りと考えられ, 完形の249を除いてはいずれも小片である。

242・246・247・249は押印文字瓦で, 248は成形

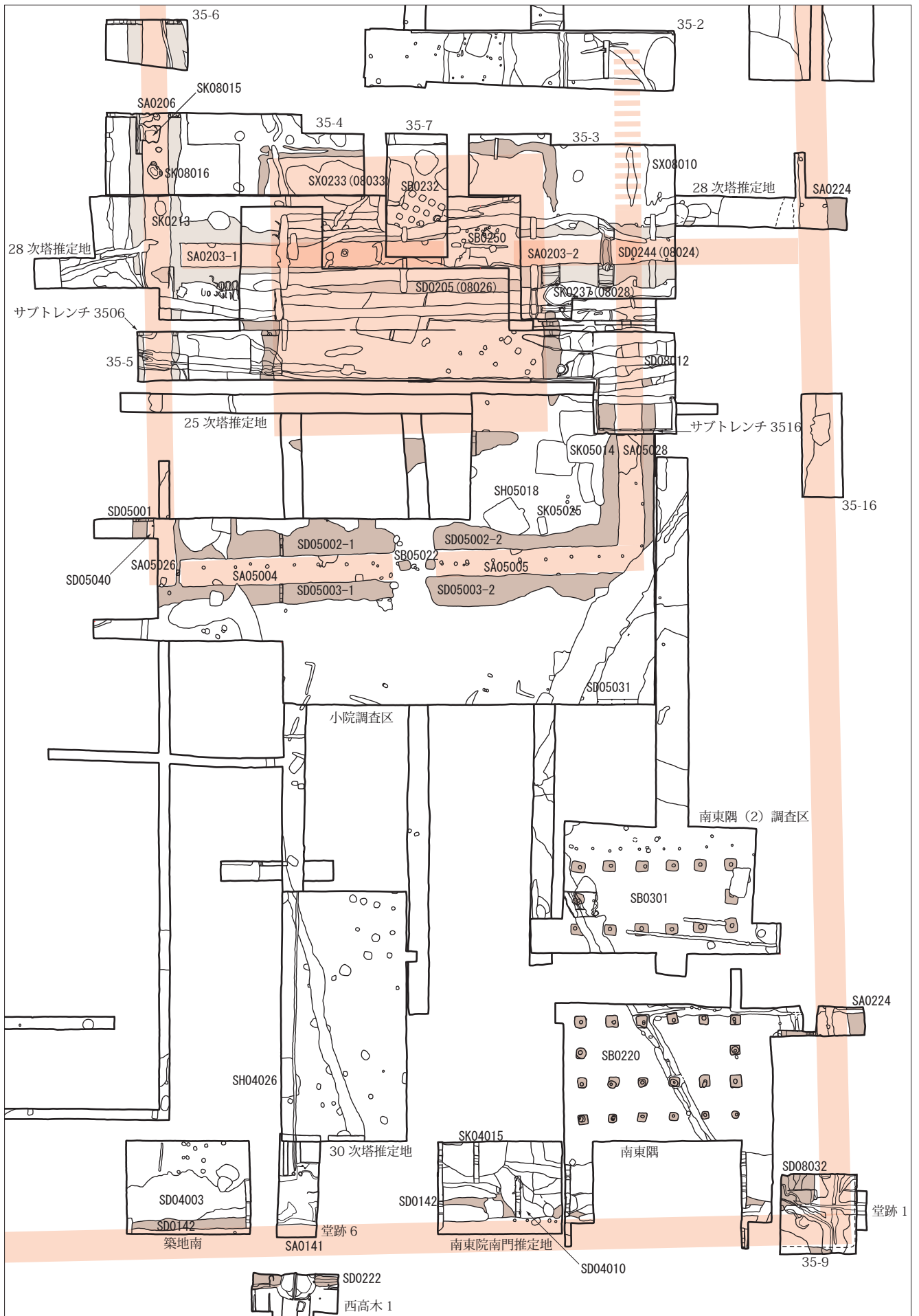


Fig. 16 小院付近調査区および主要遺構配置図 (1/500)





台に由来する記号状の圧痕を有する。242はⅠA 16で「乙」、245・249はⅠA 18で「上」、246はⅡA 08で「十」、247はⅡA 03で「勾」と釈読される。246・247は側縁の調整が2面構成で、凹面狭端寄り中央に押印され、縁辺部を除いて凹面は未調整で、布目が全面に残る。249は曲率が大きく、凸面には粗い縄タタキが、凹面には糸切り痕が残る。242・245も249に類似すると思われる。

242は小院東から、245は小院東辺内溝SD0244から、246は小院西辺のSK05014から、247は小院西辺内溝SD05001から、249は小院北のSK0233から出土した。

## 8 北東院の瓦

軒丸瓦 (Plate48-250～258, Plate49-259～281)

250・258・260・265・266・269・270はⅡA03, 251・252・257・261～264はⅡA02, 253・254・268・271・273は型式不明の蓮華文, 255はⅡA06, 256はⅡA08, 259・267はⅡA04, 274はⅠA02, 275～281はⅡG01である。255は接合式で、他はすべて横置型一本作りであると考えられる。

250は瓦当面の大部分を留め、瓦当の積み上げ痕が残る。257は瓦当面水平方向に範傷が発達する。274は重圏文系である。

250は北東院南辺外溝SD0205から、251～256は北東院西辺のさらに西に位置する南北方向の溝SD0303から、257・260・265・269・278は北東院南辺に位置する近世の道路遺構SC0204から、258・276は北東院南辺東半の内溝を切る土坑SK0239から、262・267・270～271は北東院南辺西半の内溝SD0209上面から、272は北東院南辺の耕作溝と思われる新しい溝SD0211から、その他は表土または攪乱層等から出土した。

軒平瓦 (Plate50-282・293, Plate51-294～304, Plate52-305～316) 282～285・305・306はⅡB01, 286・287はⅡB04, 288～291・293・308・312・313は型式不明の唐草文, 292はⅡB13, 294はⅠA01, 295・296・316はⅠA02, 297～301・310・314・315はⅠA04, 302・303は重圏文系, 304はⅠA06, 307はⅡB02, 311はⅡA01である。

すべて一枚作りで、ⅠA01・ⅠA04・ⅡB01は直線顎、その他は緩い曲線顎である。282は左上部に範傷が発達する。

282は北東院南辺東半の内溝を切る土坑SK0239から、283・284・291～294は北東院南辺に位置する近世道路遺構SC0204から、297～299は北東院南辺西半の内溝SD0209から、300は北東院南辺の耕作溝と思われる

新しい溝SD0211から、305・308・312は北東院西辺のさらに西に位置する南北方向の溝SD0303から、307は同じくその上面付近から、306は北東院内の食堂南東の土坑SK0309から、309は北東院内の食堂南の土坑SK0376から、310は北東院内の食堂東の土坑SK0310から、313は北東院内の食堂北西の土坑SK0307から、314は北東院内南辺寄りの土坑SK0233から、315は北東院南辺外溝SD0205から、その他は表土及び攪乱層等から出土した。

鬼瓦 (Plate52-317, Plate53-318～321) いずれも鬼面文鬼瓦の小片ないしは細片で、型作りによるものと考えられる。317は右上牙付近で、硬く焼成されている。318は鼻付近で、鼻腔が認められる。319は右下部付近で、巻き毛の表現が見られる。320は眼部分である。321は右辺の一部と考えられる。

317は北東院西辺の溝SD0212から、318は北東院内の食堂南の土坑SK0376から、その他は攪乱層から出土した。

丸瓦 (Plate53-322・324～327, Plate54-328～335)

いずれも有段式と思われ、分割式で、側縁を留めるものはすべて分割後、未調整である。327以外は押印を伴う。

322・325・332は型式不明, 324・326・330・333はⅠA27で「中」と釈読され, 328はⅠB02で「人」と釈読され, 331は同じくⅠB02と考えられ, 329はⅠA01で「小」と釈読され, 334はⅠA03で「前」と釈読され, 335はⅠA09で「上」と釈読される。328は、分割部分付近に分割前に押印され、2箇所認められる。

325・335は北東院西辺内溝SD0210から、326は北東院内の食堂北西の土坑SK0307から、327は北東院南辺西半の内溝SD0209から、328・330は北東院西辺の土坑SK08014から、329は北東院南辺東半の内溝を切る土坑SK0239から、331は北東院西辺の土坑SK08015から、333は北東院南辺外溝SD0205から、334は北東院南辺付近の土坑SK0242から、その他は攪乱層等から出土した。

平瓦 (Plate55-336・337, Plate56-338～350, Plate57-351～361) すべて一枚作りと考えられ、336・337以外には押印を伴う。336・337は側縁に三面構成の調整が認められ、曲率が大きい。文字瓦は全て凸面に押印される。

338・346・350はⅠC04で、「宿」と釈読され, 339はⅠA07で、「人」と釈読され, 340・345はⅠC18で、「宿」と釈読され, 347はⅠC01で「宿」と釈読され, 348・351・358はⅠC03で、「宿」と釈読され, 352・353・359はⅠA06で、「人」と釈読され, 354・356・

361はI A08で、「中」と釈読され、357はI A12で、「中」と釈読され、360はI A18で、「上」と釈読され、その他は型式不明である。360は2箇所押印される。

336は北東院南辺西半の内溝SD0209から、337は東院西辺の土坑SK08016から、338・341・342は北東院内の食堂北西の土坑SK0307から、343は北東院南辺外溝SD0205から、347・359・353は北東院南辺に位置する近世道路遺構SC0204から、350・352は北東院南辺西半の内溝SD0209から、351は北東院西辺内溝SD0210から、360・361は北東院西辺の溝SD0212からの出土である。

## 9 その他の瓦

### (1) 北門

軒丸瓦(Plate59-366・367・370) 366・367はII A02で、370はII A08である。370は瓦当面完形で、厚く、水平方向に複数の範傷がある。

いずれも北門付近の表土から出土した。

軒平瓦(Plate59-375・378) 375・378はII B01である。

いずれも小片である。375の左上には範傷が発達する。

375は推定北門に接続する築地塀の内溝SD0348から、378は北門付近の表土から出土した。

### (2) 築地塀

軒丸瓦(Plate59-369・371・372) 371はII G01、372はII A03である。

いずれも瓦当面の一部を留める。371に瓦当を成形した際の単位が認められる。

371は伽藍地南東隅SD08032から、372は伽藍地南西隅サブトレンチ3521から出土した。

軒平瓦(Plate59-376・380, Plate62-390, Plate63-508) 376はII B01、380はI A04、390はII B04、508はII B02である。

376は瓦当面左上に範傷が残る。508は同型式例が緩い曲線顎であることが多いのに対し、直線顎に近い。

376・380は伽藍地西辺付近、390は伽藍地南東隅、508は伽藍地東辺サブトレンチ3001から出土した。

平瓦(Plate63-395・397) いずれも文字押印瓦である。395はII A03で、「勾」と釈読される。397はI A18で、「人」と釈読される。

395は凹面の狭端側中央に押印され、凹面は縁辺部を除いて未調整である。

395は伽藍地南東隅から、397は伽藍地東辺から出土した。

### (3) 鐘楼・経蔵推定地

軒平瓦(Plate59-373・374・377・379・381, Plate62-391) 373・374・377・391はII B01、379はII B02、381は型式未設定の唐草文である。

373・374・377・379は推定地東の土坑SK0340から、381は推定地東の表土から、391は推定地西の包含層から出土した。

丸瓦(Plate63-393) 393は文字押印瓦で、型式不明である。

推定地東の土坑SK0340から出土した。

平瓦(Plate63-394) 394は文字押印瓦で、型式不明である。

推定地東の土坑SK0340から出土した。

### (4) 南東脇門

軒丸瓦(Plate58-362～365, Plate59-368) 362～365・368はII A02である。

362・363はほぼ完形資料で、364・365は瓦当面のみ完形であり、横置型一本作りである。368は瓦当下部のみ残存する。いずれも瓦当中央に水平方向の範傷が発達する。362・363と364・365・368とでは瓦当面の向きが180度異なる。

すべて推定される南東脇門東側の溝SD04010から出土した。

軒平瓦(Plate60-382・383, Plate61-384・385, Plate62-386～389, Plate63-509・510) 382～388・509はII B02、389は型式不明の唐草文、510はII B01である。382～386は瓦当面完形である。510は瓦当面左上に範傷が発達する。

382～386は南東脇門東側の溝SD04010から、387は土坑SK04015の瓦溜から、389は南面築地内側の新しい溝SD04003からの出土である。

平瓦(Plate63-396・511) いずれも押印文字瓦である。396はII A03で「勾」と釈読され、511はI A11で「上」と釈読される。

396は南面築地内側の新しい溝SD04003から、511は南東脇門東側の瓦溜から出土である。

## 10 土器その他

### (1) 土師器

皿(Plate64-398・410・411) 398はやや小型の皿で、口縁部は丸みを帯び、端部は内傾する面となる。410は大型品の破片と考えられ、口縁部は内湾し、端部は内傾する面を持つ。411は口縁部がわずかに外反しながらに立ち上がる。

398は僧坊東の溝SD0342から、410は北東院西辺の土坑SK0213から、411は小院西の土坑SK08016から出土した。

坏 (Plate64-399～407・409) 399は一部を欠き、その他は残りが悪い。399～404は小型品で、399以外は斜めに角度をもって口縁部が立ち上がる。405～407は中型品である。406は口縁部が丸みを帯びて立ち上がり、口端部は面をなす。409は大型品である。407・409は口縁内部に段がある。

399は僧坊東の溝SK0342から、400・404は北東院西の南北溝SD0303から、401は北東院西の南北溝SD0305から、403は食堂南東の土坑SK0309から、405は北東院南辺築地東半内溝SD0216から、406・407は北東院西辺の土坑SK0213から、409は食堂南の土坑SK0376から出土した。

甕 (Plate64-412～417・419～421) 412・413は小型品、414～417・419～421は中・大型品である。419は底部のみ残存し、420は把手を有する。412～417は口端部が上方に引き上げられる。

412は北東院西の南北溝SD0305から、413・414・421は北東院南辺築地東半内溝SD0216から、415～417は僧坊西半の土坑SK0345から、419は東回廊付近の土坑SK0215から、420は北東院西の土坑SK08016から出土した。

壺 (Plate64-418) 広口壺で、口縁部は直立する。418は小院の内溝に切られる竪穴建物SH05018上面から出土した。

(2) 製塩土器 (Plate64-423～430) 423・424・427～430は志摩式製塩土器の口縁部で、425・426は底部付近の胴部である。428～430は口縁部が大きく肥厚する。

すべて食堂北西の土坑SK0307から出土した。

### (3) 須恵器

坏 (Plate65-431～434・464～473・475・476) 431～434はいわゆる坏Hで、国分寺建立以前のものである。464～468は無台坏、469～473・475・476は有台坏である。431・433・434は口縁部がやや強く内傾し、431・433は体部が深い。432は、口縁部の立ち上がりが長く、体部は丸みを帯びる。465～467は底部と体部の境に明確な稜を有する。469・470・476は底部外寄りに高台が付く。

431は講堂基壇直下サブトレンチ2201から出土しており、本来は竪穴建物に伴うものと考えられる。432

は小院東の土坑SK0237と溝SD08029から出土したものが接合したものである。433・434は僧坊西の土坑SK0345から、464は僧坊東の溝SD0342から、465・476は食堂南の土坑SK0375から、466は食堂南東の土坑SK0309から、467は小院南の表土から、468・473は僧坊東の溝から、469は食堂南方の土坑SK0376から、470は北東院の表土から、471は僧坊西半の溝SD0353から、472・475は東回廊東の土坑SK0215から出土した。短頸壺 (Plate65-435・436) 435は丸みを帯びた体部に短い口縁部が斜め外方に取り付く。436は底部片で、底部から体部にかけて大きく屈曲する。

すべて僧坊西の土坑SK0345から出土した。

蓋 (Plate65-437～463) 437はいわゆる坏Hに対応する蓋で、国分寺建立以前のものである。461は壺の蓋で、462は笠形的大型品、その他は坏蓋と考えられる。439～462はつまみを有するか、もしくはつまみを有すると考えられるもので、463はつまみをもたない。439・443・444・447は口縁部があまり屈曲しないが、440～442・445・446・448～458は口縁部が屈曲する。

437は小院南の竪穴建物SH05018上面から、438は食堂東の土坑SK0310から、439は北東院南辺築地内溝SD0209西半から、440～442は北東院西辺の土坑SK0213から、443は小院南辺築地内溝SD05002-1から、444は北東院西辺の土坑SK08015から、445・450は食堂東の土坑SK0327から、446・452は食堂南東の土坑SK0309から、447は北東院西辺サブトレンチ3512から、448は金堂の表土から、449は北東院西辺外側の南北溝SD0353から、451は僧坊東の表土から、453は食堂南方の土坑SK0376から、454・460は小院東の瓦溜SX08010から、455は北東院西の土坑SK08015から、456は講堂南辺の溝SD9912から、457は小院南東の古墳周溝SD05031から、458は僧坊西半の表土から、459は僧坊東の溝SD0342から、461は北東院西辺の土坑SK08016から、462は中門南のSK0312S瓦溜から、463は僧坊東の溝SD04096から出土した。

鉢 (Plate65-474) 大型の鉢である。口端部はわずかに上方に摘み上げられる。

食堂南方の土坑SK0376から出土した。

その他 (Plate65-477・478) 477は底部片で、器種は不明である。478は瓶または壺と考えられる。

477は金堂北サブトレンチ2408から、478は東回廊東の土坑SK0125から出土した。

### (4) 灰釉陶器

皿 (Plate66-479・490・491・495～497) 479は矩

形の高台を有し、外端で接地する。491は段皿で、高台は内端が接地する。495は段皿で、内湾ぎみの高台を有する。496は段皿で、高台は外端が接地する。497は外端が接地する高台を有する。

479は中門南の瓦溜SK0312から、490は講堂東の溝SD9915から、491は金堂南の溝SD0002から、495は北門付近の表土から、496は北東院西外側の南北溝SD0303から、497は僧坊東の溝SD04096から出土した。**碗** (Plate66-480・482・485・487～489・493・494) 480は、矩形の高台を有する。482はハの字に開く丸みを帯びた高台を有する。485は内湾ぎみの高い高台を有する。487は外端が接地する低い高台を有する。488は直立ぎみの高台を有し、口縁端部は小さく外反する。489は底部を欠き、口縁端部は外反する。493は外に開く低い高台を有する。494は大型品で、細長い高台を有し、口縁端部の外反は弱い。

480・481は講堂基壇上面から、482は講堂南の溝SD9902から、485・494は北東院南辺築地内溝SD0209の上面から、487は小院東の瓦溜SX08010から、488は北門付近から、489は北東院西辺外側の南北溝SD0303から、493は講堂東の溝SD9915から出土した。

**その他** (Plate66-483・484・486・492・499・500) 483・484・486・492は底部のみ残存し、器種不明である。483は低い高台を有する。484は内湾ぎみの高台を有する。486は小型品で、外反気味の高台を有する。492はやや丸みを帯びた高台を有する。499は浄瓶の頸部である。500は薬壺の肩部分と考えられる。

483・484は講堂東の溝SD9915から、486は講堂西の溝SD9902から、492は講堂南の溝SD9912から、499は北門付近から、500は北東院西辺外側の南北溝SD0303から出土した。

(5) **緑釉陶器** (Plate66-501・512) 501は唾壺の破片である。512は皿もしくは碗の底部である。

501は北門付近の外溝SD0352から 512は伽藍地南東付近サブレンチ3001から出土した。

(6) **山皿** (Plate66-498) 完形で、断面三角形の高台を有する。小院南の土坑SK05025上面から出土した。

(7) **常滑焼陶器** (Plate66-502) 肩部・口縁部を欠く。骨蔵器として用いられており、内部に火葬骨が含まれていた。

北東院内のピット状の埋納遺構SX03101から出土した。

(8) **鉄製品** (Plate64-422, Plate66-503) 422は釘で、ほぼ完形である。503は刀子で、木質が付着する。

422は講堂南の溝SD9912から、503は回廊内南東部の竪穴建物SH0127から出土した。

(9) **石器** (Plate66-504・505) 504は磨製石斧で、505は黒曜石製の石鏃である。

504は回廊南東部分の表土から、505は伽藍地南東の掘立柱建物SB0301付近から出土した。

Tab. 3 軒丸瓦観察表

No	Plate No.		概報No	名称	型式名	法量 mm			残存度	胎土	焼成	色調	次数	出土位置			備考	
	表測図	写真				瓦当径	瓦当厚	全長						グリッド	遺構名			
1	9	67	3- 1	軒丸瓦	Ⅱ A04	175	57	329	瓦当一部欠	並	並	灰色	28		SD0143	南門	北	
2	9	67	3- 2	軒丸瓦	Ⅱ A03	161	-	-	瓦当一部欠	粗	並	暗灰色	28		SD0142	南門	北	
3	9	67	3- 3	軒丸瓦	Ⅱ A03	-	-	-	瓦当一部欠	並	軟	暗灰色	28		表土または攪乱層	南門		
4	9	67	3- 4	軒丸瓦	Ⅱ A03	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	暗灰色	28		表土または攪乱層	南門		
5	9	67	3- 5	軒丸瓦	Ⅱ A04	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	灰褐色	28		SK0148	南門	北	
6	9	67	3- 6	軒丸瓦	Ⅱ A03	169	-	-	瓦当一部残	粗	並	淡灰褐色	28		表土または攪乱層	南門		
7	9	67	3- 7	軒丸瓦	Ⅱ A03	-	54	-	瓦当一部残	粗	並	淡灰色	28		表土または攪乱層	南門		
8	9	67	3- 8	軒丸瓦	蓮華文	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰色	28		表土または攪乱層	南門		
9	9	68	3- 9	軒丸瓦	Ⅱ A04	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	灰褐色	28		表土または攪乱層	南門		
10	9	68	3- 10	軒丸瓦	Ⅱ A03	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡灰褐色	28		表土または攪乱層	南門		
11	9	68	3- 11	軒丸瓦	蓮華文	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	淡灰色	28		SK0148	南門	北	
12	9	68	3- 12	軒丸瓦	蓮華文	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰褐色	28		SD0143	南門	北	
13	9	68	3- 13	軒丸瓦	蓮華文	-	-	-	瓦当一部残	精	並	淡灰色	28		SK0156 上面	南門	西	
34	14	71	2- 13	軒丸瓦	Ⅱ A03	147	70	356	ほぼ完形	粗	硬	にぶい黄橙色	25	G-2	瓦溜 (SD0131)	中門	南	
35	14	71	2- 1	軒丸瓦	Ⅱ A03	-	62	-	瓦当一部残	精	軟	浅黄橙色	25	D-2	瓦溜 (SD0103)	中門	西	
36	14	71	2- 2	軒丸瓦	Ⅱ A03	-	41	-	瓦当一部残	精	硬	淡黄色	25	D-2	瓦溜 (SD0103)	中門	西	
37	14	71	2- 4	軒丸瓦	Ⅱ A03	-	53	-	瓦当一部残	精	硬	浅黄橙色	25	F-3	瓦溜 (SK0132)	中門	南	
38	14	71	2- 5	軒丸瓦	Ⅱ A03	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	灰白色	25	F-3	瓦溜 (SK0132)	中門	南	
39	14	71	2- 3	軒丸瓦	Ⅱ A03	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	にぶい橙色	25	F-3	瓦溜 (SK0132)	中門	南	
40	14	71	2- 6	軒丸瓦	Ⅱ A03	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	にぶい橙色	25	F-3	瓦溜 (SK0132)	中門	南	
41	14	72	2- 7	軒丸瓦	Ⅱ A03	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	浅黄橙色	25	H-2	瓦溜 (SD0115)	中門	東	
42	14	72	2- 8	軒丸瓦	Ⅱ A04	-	40	-	瓦当一部残	精	硬	灰白色	25	H-2	瓦溜 (SD0115)	中門	東	
43	14	72	2- 9	軒丸瓦	Ⅱ A04	175	57	-	瓦当のみ残	精	硬	やや淡い灰色	25	G-2	瓦溜 (SD0131)	中門	南	
44	14	72	2- 10	軒丸瓦	Ⅰ A09	159	40	-	瓦当のみ残	精	硬	灰色	25	G-2	瓦溜 (SD0131)	中門	南	
58	17	74	2- 11	軒丸瓦	Ⅱ A04	167	64	-	丸瓦部一部欠	精	硬	灰色	25	H-2	瓦溜 (SD0115)	回廊	南東	
59	17	74	2- 12	軒丸瓦	Ⅱ A04	181	55	-	瓦当・丸瓦部一部欠	精	硬	暗灰色	25	H-2	瓦溜 (SD0115)	回廊	南東	
60	17	74	4- 10	軒丸瓦	Ⅱ A03	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	灰色	29		表土	回廊		
61	17	74	4- 5	軒丸瓦	Ⅱ A02	-	28	-	瓦当一部残	やや粗	軟	暗灰色	29		表土	回廊		
62	17	74	4- 14	軒丸瓦	Ⅱ A03	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰褐色	29		表土	回廊		
63	18	74	2- 14	軒丸瓦	Ⅱ A04	-	42	-	瓦当のみ残	精	硬	暗灰色	25	K-2	瓦溜 (SD0115)	回廊	南東	
64	18	75	2- 15	軒丸瓦	Ⅱ A04	-	28	-	瓦当一部残	精	硬	浅黄橙色	25	J-260	サブトレンチ 2513 (SD0019)	回廊	北東	
65	18	75	4- 16	軒丸瓦	蓮華文	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰褐色	29		表土	回廊		
66	18	75	2- 16	軒丸瓦	Ⅱ A04	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	黄灰色	25	J-266	瓦溜 (SD0119)	回廊	北東	
67	18	75	2- 17	軒丸瓦	Ⅱ A04	-	55	-	瓦当一部残	精	硬	灰色	25	J-269	金堂東回廊南溝	回廊	北東	
106	23	81	1- 14	軒丸瓦	Ⅱ A02	-	29	-	瓦当一部残	並	並	灰色	24	272・ 772	サブトレンチ 2410	金堂	南	范傷顕著
107	23	81	1- 15	軒丸瓦	Ⅱ A03	-	-	-	瓦当一部残	並	やや軟	暗灰色	24	254・ 760	(SD0004)	金堂	西	圏線なし
108	23	81	1- 16	軒丸瓦	Ⅱ A03	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	やや軟	淡灰色	24	260・ 763	サブトレンチ 2409	金堂	西	圏線あり
117	26	81	1- 11	軒丸瓦	Ⅱ A02	157	30	351	ほぼ完形	精	やや軟	淡灰色	24	207・ 760	SD9913	講堂	北	落下瓦
118	26	83	1- 12	軒丸瓦	Ⅱ A02	166	30	377	ほぼ完形	並	やや軟	淡灰色	24	207・ 760	SD9913	講堂	北	落下瓦
119	26	83	1- 8	軒丸瓦	Ⅱ A02	169	43	-	瓦当一部残	並	並	灰色	24	269・ 778	SD0002	金堂	南	
120	26	83	1- 7	軒丸瓦	Ⅱ A02	-	-	-	瓦当一部残	並	やや軟	暗灰色	22	215・ 754	SD9902	講堂	西	
121	26	83	1- 9	軒丸瓦	Ⅱ A02	174	38	-	瓦当一部残	並	やや軟	淡黄灰色	24	207・ 760	SD9913	講堂	北	落下瓦
122	27	83	1- 13	軒丸瓦	Ⅱ A02	-	-	371	瓦当一部残	精	並	暗会食	24	207・ 760	SD9913	講堂	北	落下瓦
123	27	84	1- 10	軒丸瓦	Ⅱ A02	165	27	341	ほぼ完形	精	並	淡灰色	24	207・ 760	SD9913	講堂	北	落下瓦
124	28	83	7- 21	軒丸瓦	Ⅱ A02	171	39	-	瓦当のみ残	やや粗	軟	にぶい淡黄灰色	35	-	SD9912 [SD08004]	講堂	南	范傷顕著
125	28	84	7- 23	軒丸瓦	Ⅱ G01	168	53	-	瓦当のみ残	粗	非常に軟	淡黄灰色	35	-	SD9905 [SD08003]	講堂	東	
126	28	84	7- 59	軒丸瓦	Ⅱ G02	166	62	-	瓦当一部残	粗	軟	淡橙褐色	35	210・ 792	SD9905 [SD08003]	講堂	東	概報未報告
127	28	84	7- 64	軒丸瓦	Ⅱ A02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	暗灰色	35	228・ 780	SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告
128	28	84	7- 58	軒丸瓦	Ⅱ A02	-	-	-	瓦当一部残	粗	硬	淡灰色	35	204・ 789	SD9913 [SD08002]	講堂	北	概報未報告
129	28	84	7- 57	軒丸瓦	Ⅱ G01	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡橙褐色	35	210・ 792	SD9905 [SD08003]	講堂	東	概報未報告
130	28	84	7- 63	軒丸瓦	Ⅱ A02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰色	35	222・ 792	SD9905 [SD08003]	講堂	東	概報未報告
131	28	85	7- 65	軒丸瓦	Ⅱ A02	169	25	-	瓦当一部残	並	軟	灰色	35	228・ 774	SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告
132	28	85	7- 66	軒丸瓦	Ⅱ A02	-	-	-	瓦当一部残	並	並	暗灰色	35	207・ 792	SD9905 [SD08003]	講堂	東	概報未報告

No.	Plate No.		概報 No.	名称	型式名	法量			残存度	胎土	焼成	色調	次数	出土位置			備考	
	実測図	写真				瓦当径	瓦当厚	全長						グリッド	遺構名			
133	28	85	7- 62	軒丸瓦	II G02	164	36	-	瓦当一部残	粗	軟	淡橙褐色	35	228・774	SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告
134	28	85	7- 67	軒丸瓦	II A02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	灰色	35	210・792	SD9905 [SD08003]	講堂	東	概報未報告
135	28	85	7- 69	軒丸瓦	II A02	-	43	-	瓦当一部残	精	軟	暗灰色	35	228・780	SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告
136	28	85	7- 68	軒丸瓦	II A02	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	灰色	35		SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告
202	42	95	4- 4	軒丸瓦	II A02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰褐色	29		SD0353	僧坊	西	
203	42	95	4- 7	軒丸瓦	II A02	-	32	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰褐色	29		SD0353	僧坊	西	
204	42	96	5- 15	軒丸瓦	II A02	166	30	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰色	30		表土	講堂	北	
205	42	96	4- 17	軒丸瓦	II A08	169	62	-	瓦当ほぼ完形	並	やや軟	灰色	29		SD03133	僧坊	東	
206	42	96	4- 19	軒丸瓦	II A08	163	54	-	瓦当ほぼ完形	やや粗	並	淡灰褐色	29		SD03133	僧坊	東	
207	42	96	4- 22	軒丸瓦	重圏文	-	-	-	瓦当一部残	精	軟	灰白色	29		SK0389	僧坊	西	
225	44	99	7- 54	軒丸瓦	II A02	162	30	-	瓦当ほぼ完形	粗	軟	暗灰色	35	249・873	SD0244 [SD08024]	小院	東	范傷顕著 概報未報告
226	44	99	6- 3	軒丸瓦	II A02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰褐色	31		SK05014 上面	小院	東	
227	44	99	7- 56	軒丸瓦	II A02	168	38	-	瓦当ほぼ完形	精	軟	淡黄褐色	35	249・873	SD0244 [SD08024]	小院	東	概報未報告
228	44	99	6- 2	軒丸瓦	II A04	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	やや軟	淡灰色	31		SD05002-2 上面	小院	南	
229	44	99	7- 60	軒丸瓦	II A03	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	橙褐色	35		サブトレンチ 3516	小院	東	圏線なし 概報未報告
230	44	99	7- 61	軒丸瓦	II A02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰色	35		サブトレンチ 3516	小院	東	概報未報告
250	48	104	7- 22	軒丸瓦	II A03	-	46	-	瓦当一部残	やや粗	軟	淡灰～灰白色	35		SD0205 [SD08026]	北東院	南	
251	48	104	4- 9	軒丸瓦	II A02	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰褐色	29		SD0303	北東院		
252	48	104	4- 15	軒丸瓦	II A02	-	-	-	瓦当一部残	並	やや軟	淡灰色	29		SD0303	北東院		
253	48	104	4- 12	軒丸瓦	蓮華文	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	軟	淡灰褐色	29		SD0303	北東院		
254	48	105	4- 11	軒丸瓦	蓮華文	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰褐色	29		SD0303	北東院		
255	48	105	4- 21	軒丸瓦	II A06	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰褐色	29		SD0303	北東院		
256	48	105	4- 20	軒丸瓦	II A08	175	51	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰褐色	29		SD0303	北東院		
257	48	105	3- 40	軒丸瓦	II A02	175	28	-	瓦当ほぼ完形	並	並	淡灰色	28		SC0204	北東院	南	范傷顕著
258	48	105	3- 39	軒丸瓦	II A03	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰色	28		SK0239	北東院	南	
259	49	105	3- 45	軒丸瓦	II A04	178	50	-	瓦当ほぼ完形	並	並	淡灰色	28		表土または攪乱層	北東院	南	
260	49	105	3- 50	軒丸瓦	II A03	142	43	-	瓦当一部残	精	軟	淡橙灰色	28		SC0204	北東院	南	
261	49	105	3- 43	軒丸瓦	II A02	-	-	-	瓦当一部残	並	並	暗灰色	28		表土または攪乱層	北東院	南	
262	49	106	3- 44	軒丸瓦	II A02	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	淡灰色	28		SD0209 上面	北東院	南	
263	49	106	3- 41	軒丸瓦	II A02	-	-	-	瓦当一部残	並	並	暗灰色	28		不詳	北東院	南	
264	49	106	3- 42	軒丸瓦	II A02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰色	28		不詳	北東院	南	
265	49	106	3- 51	軒丸瓦	II A03	-	36	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰色	28		SC0204	北東院	南	
266	49	106	3- 52・55	軒丸瓦	II A03	-	-	-	瓦当一部残	精	並	灰白色	28		表土または攪乱層	北東院	南	
267	49	106	3- 46	軒丸瓦	II A04	-	-	-	瓦当一部残	並	並	暗灰色	28		SD0209 上面	北東院	南	
268	49	106	3- 47	軒丸瓦	蓮華文	-	62	-	瓦当一部残	並	並	暗灰色	28		表土または攪乱層	北東院	南	
269	49	106	3- 48	軒丸瓦	II A03	-	-	-	瓦当一部残	精	並	淡灰色	28		SC0204	北東院	南	
270	49	107	3- 49	軒丸瓦	II A03	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰色	28		SD0209 上面	北東院	南	
271	49	107	3- 53	軒丸瓦	蓮華文	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡灰色	28		SD0209 上面	北東院	南	
272	49	107	3- 54	軒丸瓦	蓮華文	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	灰白色	28		SD0211 上面	北東院	南	
273	49	107	3- 56	軒丸瓦	蓮華文	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	灰白色	28		表土または攪乱層	北東院	南	
274	49	107	3- 57	軒丸瓦	I A02	161	36	-	瓦当一部残	並	軟	灰白色	28		表土または攪乱層	北東院	南	
275	49	107	3- 59	軒丸瓦	II G01	-	35	-	瓦当一部残	粗	並	灰白色	28		表土または攪乱層	北東院	南	
276	49	107	3- 58	軒丸瓦	II G01	164	27	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰褐色	28		SK0239	北東院	南	
277	49	107	3- 60	軒丸瓦	II G01	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡褐色	28		表土または攪乱層	北東院	南	
278	49	108	3- 61	軒丸瓦	II G01	-	-	-	瓦当一部残	精	軟	暗褐色	28		SC0204	北東院	南	
279	49	108	3- 63	軒丸瓦	II G01	-	-	-	瓦当一部残	並	並	灰色	28		表土または攪乱層	北東院	南	
280	49	108	3- 64	軒丸瓦	II G01	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡褐色	28		表土または攪乱層	北東院	南	
281	49	108	3- 65	軒丸瓦	II G01	-	-	-	瓦当一部残	並	硬	淡灰色	28		表土または攪乱層	北東院	南	
362	58	123	5- 1	軒丸瓦	II A02	175	26	370	完形	粗	軟	淡灰褐色	30		SD04010	南東門		范傷顕著
363	58	123	5- 2	軒丸瓦	II A02	175	31	358	ほぼ完形	並	軟	淡灰褐色	30		SD04010	南東門		范傷顕著
364	58	124	5- 3	軒丸瓦	II A02	178	29	-	瓦当のみ残	やや粗	軟	淡灰褐色	30		SD04010 上面	南東門		范傷顕著
365	58	124	5- 5	軒丸瓦	II A02	175	42	-	瓦当一部残	やや粗	並	暗灰色	30		SD04010	南東門		范傷顕著
366	59	124	4- 6	軒丸瓦	II A02	-	29	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰褐色	29		表土	北門		
367	59	124	4- 8	軒丸瓦	II A02	-	42	-	瓦当一部残	やや粗	やや軟	暗灰褐色	29		表土	北門		
368	59	124	5- 4	軒丸瓦	II A02	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	暗灰色	30		SD04010	南東協門		范傷顕著
369	59	124	4- 13	軒丸瓦	II A03	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	橙褐色	29		SK03137	築地	西	
370	59	124	4- 18	軒丸瓦	II A08	173	59	-	瓦当ほぼ完形	並	並	淡灰褐色	29		表土	北門		
371	59	125	7- 53	軒丸瓦	II G01	-	38	-	瓦当一部残	並	軟	淡橙褐色	35		SD08032	築地	南東	概報未報告
372	59	125	7- 55	軒丸瓦	II A03	-	44	-	瓦当一部残	並	軟	灰白色	35		サブトレンチ 3521	築地	南西	圏線あり 概報未報告

Tab. 4 軒平瓦観察表

No	Plate No.		概報No	名称	型式名	法量 (mm)			残存度	胎土	焼成	色調	次数	出土位置			備考	
	実測図	写真				瓦当横	瓦当高	全長						グリッド	遺構名			
14	10	68	3- 14	軒平瓦	II B02	-	64	-	瓦当一部残	粗	並	暗灰色	28		SD0143	南門	北	
15	10	68	3- 15	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	並	暗灰色	28		攪乱層	南門		
16	10	69	3- 16	軒平瓦	II B02	-	64	-	瓦当一部残	並	並	暗灰色	28		攪乱層	南門		隅軒平瓦
17	10	68	3- 17	軒平瓦	II B02	-	60	-	瓦当一部残	精	並	淡灰色	28		攪乱層	南門		
18	10	69	3- 18	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰褐色	28		SD0143	南門	北	
19	10	69	3- 19	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡橙灰色	28		攪乱層	南門		
20	11	69	3- 20	軒平瓦	II B02	-	64	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰色	28		SD0143	南門	北	
21	11	69	3- 21	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	並	淡灰色	28		SK0148	南門	北	
22	11	69	3- 22	軒平瓦	II B01	-	67	-	瓦当一部残	精	軟	淡橙色	28		SD0143	南門	北	
23	12	69	3- 23	軒平瓦	II B01	-	60	-	瓦当一部残	粗	並	灰色	28		SK0148	南門	北	
24	12	70	3- 24	軒平瓦	II B01	-	64	-	瓦当一部残	並	並	灰色	28		攪乱層	南門		
25	12	70	3- 25	軒平瓦	II B01	-	68	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰色	28		攪乱層	南門		
26	12	70	3- 26	軒平瓦	II B01	-	63	-	瓦当一部残	粗	軟	淡橙色	28		攪乱層	南門		
27	12	70	3- 27	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	軟	淡橙色	28		攪乱層	南門		
28	12	70	3- 28	軒平瓦	唐草文	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	暗灰色	28		攪乱層	南門		
45	15	72	2- 18	軒平瓦	II B01	-	60	326	ほぼ完形	精	硬	黄褐色	25	F-3	瓦溜 (SK0132)	中門	南	
46	15	72	2- 29	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	灰白色	25	F-3	瓦溜 (SK0132)	中門	南	
47	15	72	2- 30	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	灰色	25	F-2	瓦溜 (SK0132)	中門	南	
48	15	72	2- 31	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	やや軟	浅黄色	25	F-2	瓦溜 (SK0132)	中門	南	
49	16	73	2- 32	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	浅黄褐色	25	F-2	瓦溜 (SK0132)	中門	南	
50	16	73	2- 33	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	灰白色	25	F-2	瓦溜 (SK0132)	中門	南	
51	16	73	2- 34	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	浅黄褐色	25	F-3	瓦溜 (SK0132)	中門	南	
52	16	73	2- 35	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	灰色	25	F-3	瓦溜 (SK0132)	中門	南	
53	16	73	2- 36	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	硬	黄褐色	25	F-3	瓦溜 (SK0132)	中門	南	
54	16	73	2- 37	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	硬	にふい 黄褐色	25	F-3	瓦溜 (SK0132)	中門	南	
55	16	73	2- 40	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	灰色	25	G-2	瓦溜 (SD0131)	中門	南	
68	18	75	2- 20	軒平瓦	II B01	-	61	-	一部欠	やや粗	硬	暗灰色	25	J-2	瓦溜 (SD0115)	回廊	南東	
69	18	75	2- 25	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	並	淡灰色	25	D-2	瓦溜 (SD0103)	回廊	南西	
70	19	75	2- 24	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	浅黄褐色	25	D-2	瓦溜 (SD0103)	回廊	南西	
71	19	75	2- 27	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	硬	灰色	25	D-2	表土 (SD0103)	回廊	南西	
72	19	76	2- 26	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	灰色	25	D-2	表土 (SD0103)	回廊	南西	
73	19	76	2- 28	軒平瓦	II B01	-	61	-	瓦当一部残	精	硬	暗灰色	25	D-0	瓦溜 (SD0106)	回廊	南西	
74	19	76	2- 38	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	灰色	25	H-2	瓦溜 (SD0115)	回廊	南西	
75	19	76	2- 39	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	軟	淡黄色	25	H-2	瓦溜 (SD0115)	回廊	南西	
76	19	76	2- 41	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	灰黄褐色	25	D-2	瓦溜 (SD0106)	回廊	南西	
77	19	76	2- 47	軒平瓦	II B01	-	61	-	瓦当一部残	精	硬	浅黄褐色	25	L-2	瓦溜 (SD0117)	回廊	南東	
78	19	76	2- 53	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	暗青灰色	25	J-260	サブレンチ 2513 (SD0119)	回廊	北東	
79	19	76	2- 48	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	暗灰色	25	J-2	瓦溜 (SD0115)	回廊	南東	
80	19	77	2- 51	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	暗灰色	25	J-2	瓦溜 (SD0115)	回廊	南東	
81	19	77	2- 52	軒平瓦	I A06	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	灰白色	25	K-1	Pit	回廊	南東	
82	20	77	2- 22	軒平瓦	II B01	-	-	-	一部欠	精	硬	灰色	25	L-0	瓦溜 (SD0117)	回廊	南東	片面糸切痕 あり
83	20	77	2- 42	軒平瓦	II B01	-	64	-	瓦当一部残	並	硬	黄褐色	25	H-2	瓦溜 (SD0115)	回廊	南西	
84	20	77	2- 43	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	並	硬	灰色	25	K-2	瓦溜 (SD0115)	回廊	南西	
85	20	77	2- 50	軒平瓦	II B01	-	62	-	瓦当一部残	精	硬	黄褐色	25	J-2	瓦溜 (SD0115)	回廊	南東	
86	20	77	2- 44	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	硬	灰色	25	K-2	瓦溜 (SD0115)	回廊	南西	
87	20	77	2- 49	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	暗灰色	25	L-0	瓦溜 (SD0117)	回廊	南東	
88	20	78	2- 46	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	灰色	25	J-2	瓦溜 (SD0115)	回廊	南東	
89	20	78	2- 45	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	硬	灰色	25	L-1	瓦溜 (SD0117)	回廊	南東	
90	21	78	4- 26	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰褐色	29		表土	回廊		
91	21	78	4- 29	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	灰色	29	291・ 795	表土	回廊		
92	21	78	4- 30	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや精	軟	淡灰褐色	29		表土	回廊		
93	21	78	4- 31	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	暗灰色	29	291・ 795	埋立土	回廊		未報告 概報は29 と同一
94	21	78	4- 33	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	軟	淡灰色	29		表土	回廊		
95	21	78	4- 34	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	軟	暗灰色	29		表土	回廊		
96	21	79	4- 35	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰褐色	29	291・ 795	表土	回廊		
97	21	79	4- 36	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	軟	淡灰色	29		表土	回廊		
98	21	79	4- 37	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰色	29		表土	回廊		
99	21	79	4- 44	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	粗	やや硬	淡灰色	29		表土	回廊		
100	21	79	4- 45	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	灰色	29		表土	回廊		
109	23	81	1- 27	軒平瓦	II B01	290	60	347	ほぼ完形	並	並	淡灰色	24	272・ 772	SD0002	金堂	南	
110	24	82	1- 33	軒平瓦	II B01	288	60	-	瓦当一部残	並	やや軟	淡灰色	24	272・ 772	SD0002	金堂	南	
111	24	82	1- 34	軒平瓦	II B12	-	-	-	瓦当一部残	粗	やや軟	淡灰褐色	24	248・ 769	(SD0004)	金堂	西	
112	24	81	1- 35	軒平瓦	II B01	-	60	-	瓦当一部残	やや精	並	淡灰色	24	245・ 760	(SD0001)	金堂	北	
137	29	85	1- 28	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	やや軟	暗灰色	24	207・ 760	SD9913	講堂	北	落下瓦

№	Plate No.		概報No	名称	型式名	法量 (mm)			残存度	胎土	焼成	色調	次数	出土位置			備考	
	実測図	写真				瓦当横	瓦当高	全長						グリッド	遺構名			
138	29	86	1- 29	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	軟	淡黄灰色	24	224・760	SD9902	講堂	西	
139	29	85	1- 0	軒平瓦	II B02	-	66	-	瓦当一部残	並	やや軟	淡灰色	22	215・793		講堂	東	概報未報告
140	29	86	1- 17	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰褐色	22	215・760	(SD9902)	講堂	西	瓦埴積基壇部材
141	30	86	1- 24	軒平瓦	II B02	275	66	-	一部欠	粗	並	淡灰褐色	24	207・760	SD9913	講堂	北	落下瓦
142	30	86	1- 23	軒平瓦	II B02	277	68	344	ほぼ完形	並	やや軟	淡黄灰色	24	207・760	SD9913	講堂	北	落下瓦
143	31	87	1- 25	軒平瓦	II B02	-	71	346	一部欠	粗	並	淡橙褐色	24	207・760	SD9913	講堂	北	落下瓦
144	32	86	1- 21	軒平瓦	II B01	-	59	-	瓦当一部残	精	並	淡橙灰色	22	215・760	(SD9902)	講堂	西	瓦埴積基壇部材
145	32	86	1- 20	軒平瓦	II B02	-	-	335	瓦当一部欠	並	軟	灰白色	22	215・760	サブトレンチ 2201 (SD9902)	講堂	西	
146	33	86	1- 26	軒平瓦	II B02	-	65	346	一部欠	並	やや軟	淡灰褐色	24	224・760	SD9902	講堂	西	落下瓦
147	33	87	1- 18	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡灰色	22	215・760	(SD9902)	講堂	西	瓦埴積基壇部材
148	33	87	1- 19	軒平瓦	II B02	-	68	-	瓦当一部残	並	やや軟	淡灰色	22	215・760	(SD9902)	講堂	西	瓦埴積基壇部材
149	34	88	1- 22	軒平瓦	II B02	272	68	340	一部欠	並	軟	淡黄灰色	24	207・760	SD9913	講堂	北	落下瓦
150	34	87	7- 24	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	精	やや軟	淡灰褐色	35	228・780	SD9912 [SD08004]	講堂	南	
151	34	87	1- 30	軒平瓦	唐草文	-	-	-	瓦当一部残	並	並	暗灰色	24	227・766	SD9912	講堂	南	
152	34	87	1- 31	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	やや軟	淡黄灰色	24	227・760	SD9912	講堂	南	
153	34	87	1- 32	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	並	やや軟	淡灰色	24	227・766	SD9902	講堂	西	
154	35	88	7- 25	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	軟	淡灰色	35	207・792	SD9915 [SD08003]	講堂	東	
155	35	88	7- 27	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	精	並	淡灰色	35	228・774	SD9912 [SD08004]	講堂	南	
156	35	88	7- 28	軒平瓦	II B04	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	淡灰色	35	207・792	SD9915 [SD08003]	講堂	東	
157	35	88	7- 29	軒平瓦	II B04	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	軟	暗灰色	35	204・792	SD9913 [SD08002]	講堂	北	
158	35	88	7- 31	軒平瓦	唐草文	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	淡橙褐色	35	204・789	SD9913 [SD08002]	講堂	北	
159	35	88	7- 32	軒平瓦	II B14	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰色	35	204・789	SD9913 [SD08002]	講堂	北	
160	36	88	7- 81	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡灰色	35	210・792	SD9915 [SD08003]	講堂	東	概報未報告
161	36	88	7- 82	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡灰褐色	35	204・792	SD9913 [SD08002]	講堂	北	概報未報告
162	36	89	7- 83	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰色	35	219・792	SD9915 [SD08003]	講堂	東	概報未報告
163	36	89	7- 86	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	灰白色	35	225・792	SD9915 [SD08003]	講堂	東	概報未報告
164	36	89	7- 84	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	暗灰色	35		サブトレンチ 3504 (SD9912)	講堂	南	概報未報告
165	36	89	7- 85	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	精	並	灰白色	35		SB08001	講堂		概報未報告
166	36	89	7- 87	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡灰褐色	35		SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告
167	36	89	7- 88	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰色	35	228・786	SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告
168	36	89	7- 89	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡黄灰色	35	228・783	SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告
169	36	89	7- 90	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	並	暗灰色	35		SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告
170	36	89	7- 91	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	並	にふい淡黄灰色	35	228・774	SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告
171	36	89	7- 92	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	精	軟	暗灰色	35	228・777	SB08001	講堂		概報未報告
172	37	89	7- 76	軒平瓦	II B04	-	-	358	瓦当一部残	粗	軟	淡灰色	35	207・792	SD9915 [SD08003]	講堂	東	概報未報告
173	37	89	7- 74	軒平瓦	I A04	-	33	-	瓦当一部残	精	硬	淡灰色	35		表土	講堂		概報未報告
174	37	90	7- 75	軒平瓦	I A04	-	33	-	瓦当一部残	精	硬	灰色	35	228・783	SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告



No.	Plate No.		概報No.	名称	型式名	法量 (mm)			残存度	胎土	焼成	色調	次数	出土位置			備考	
	実測図	写真				瓦当横	瓦当高	全長						グリッド		遺構名		
175	37	90	7- 78	軒平瓦	唐草文	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	淡橙褐色	35	228・780	SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告
176	37	90	7- 79	軒平瓦	唐草文	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	暗灰色	35	210・792	SD9915 [SD08003]	講堂	東	概報未報告
177	37	90	7- 80	軒平瓦	唐草文	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	暗灰色	35		SB08001	講堂		概報未報告
178	38	90	7- 93	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡灰色	35		SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告
179	38	90	7- 95	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	灰白色	35	225・792	SD9915 [SD08003]	講堂	東	概報未報告
180	38	90	7- 97	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	淡灰褐色	35	228・774	SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告
181	38	90	7- 94	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	灰白色	35	228・774	SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告
182	38	90	7- 98	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	灰褐色	35		SD9915 [SD08003]	講堂	東	概報未報告
183	38	90	7- 99	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡灰色	35	210・792	SD9915 [SD08003]	講堂	東	概報未報告
184	38	91	7- 26	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	やや軟	淡灰褐色	35	-		講堂	南	
208	42	96	4- 23	軒平瓦	II B01	-	64	-	瓦当一部残	やや粗	軟	淡灰褐色	29		SD03133	僧坊	東	
209	42	96	4- 40	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰褐色	29		表土	僧坊	西	
210	42	96	4- 42	軒平瓦	II B02	-	66	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰褐色	29		SD03133	僧坊	東	
211	42	96	4- 46	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	やや硬	灰色	29	186・755	表土	僧坊	西	
212	42	97	4- 47	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	淡橙褐色	29		表土	僧坊	西	
213	42	97	4- 52	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡灰褐色	29		SD03133	僧坊	東	
214	42	97	4- 48	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰褐色	29		SD0342	僧坊	東	
215	42	97	4- 49	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡灰色	29		SD03133	僧坊	東	
216	42	97	4- 51	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡灰褐色	29		SD03133	僧坊	東	
231	44	100	6- 4	軒平瓦	重廓文	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	暗灰色	31		SD05002-2	小院	南	
232	44	100	6- 5	軒平瓦	I A02	-	49	-	瓦当一部残	やや精	やや軟	暗灰色	31		SK05014	小院	東	
233	44	100	7- 30	軒平瓦	II A01	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡橙褐色	35	261・870	SD08012	小院	東	
234	44	100	7- 70	軒平瓦	I A04	-	31	-	瓦当一部残	並	軟	暗灰色	35	35-5	サブトレンチ 3516	小院	東	直線顎 概報未報告
235	44	100	7- 33	軒平瓦	I A01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	並	淡橙褐色	35	35-5	サブトレンチ 3506	小院	東	
236	45	100	7- 34	軒平瓦	I A04	268	33	370	瓦当一部残	精	軟	淡灰～灰白色	35	237・828	SK08015	小院	西	
282	50	108	3- 69	軒平瓦	II B01	-	62	-	瓦当一部残	並	並	淡灰色	28		SK0239	北東院	南	
283	50	108	3- 70	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	粗	硬	灰白色	28		SC0204	北東院	南	
284	50	108	3- 71	軒平瓦	II B01	-	63	-	瓦当一部残	並	並	灰色	28		SC0204	北東院	南	
285	50	108	3- 72	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	灰白色	28		表土及び攪乱層	北東院	南	
286	50	109	3- 73	軒平瓦	II B04	-	69	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰色	28		SD0210	北東院	南	
287	50	109	3- 74	軒平瓦	II B04	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡灰色	28		SK0242	北東院	南	
288	50	109	3- 75	軒平瓦	唐草文	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰色	28		表土及び攪乱層	北東院	南	
289	50	109	3- 76	軒平瓦	唐草文	-	-	-	瓦当一部残	並	硬	灰色	28		表土及び攪乱層	北東院	南	
290	50	109	3- 77	軒平瓦	唐草文	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	淡橙褐色	28		表土及び攪乱層	北東院	南	
291	50	109	3- 78	軒平瓦	唐草文	-	-	-	瓦当一部残	並	並	灰白色	28		SC0204	北東院	南	
292	50	109	3- 80	軒平瓦	II B13	-	60	-	瓦当一部残	粗	並	灰白色	28		SC0204	北東院	南	
293	50	109	3- 79	軒平瓦	唐草文	-	-	-	瓦当一部残	精	軟	淡灰色	28		SC0204	北東院	南	
294	51	110	3- 81	軒平瓦	I A01	-	31	-	瓦当一部残	並	並	橙灰色	28		SC0204	北東院	南	
295	51	110	3- 82	軒平瓦	I A02	-	46	-	瓦当一部残	並	硬	灰白色	28		表土及び攪乱層	北東院	南	
296	51	110	3- 83	軒平瓦	I A02	-	46	-	瓦当一部残	精	軟	灰白色	28		表土及び攪乱層	北東院	南	
297	51	110	3- 85	軒平瓦	I A04	-	35	-	瓦当一部残	精	並	灰白色	28		SD0209	北東院	南	
298	51	110	3- 84・86	軒平瓦	I A04	-	32	-	瓦当一部残	精	硬	灰色	28		SD0209	北東院	南	
299	51	110	3- 87	軒平瓦	I A04	-	35	-	瓦当一部残	精	並	灰白色	28		SD0209	北東院	南	
300	51	110	3- 88	軒平瓦	I A04	-	32	-	瓦当一部残	精	硬	灰色	28		SD0211 上面	北東院	南	
301	51	110	3- 89	軒平瓦	I A04	-	35	-	瓦当一部残	精	並	灰白色	28		表土及び攪乱層	北東院	南	
302	51	111	3- 91	軒平瓦	重廓文	-	33	-	瓦当一部残	精	硬	灰色	28		表土及び攪乱層	北東院	南	
303	51	111	3- 90	軒平瓦	重廓文	-	33	-	瓦当一部残	精	並	灰白色	28		表土及び攪乱層	北東院	南	
304	51	111	3- 92	軒平瓦	I A06	-	43	-	瓦当一部残	並	軟	灰白色	28		表土及び攪乱層	北東院	南	
305	52	111	4- 32	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	軟	淡灰褐色	29		SD0303	北東院		
306	52	111	4- 41	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰褐色	29		SK0309	北東院		
No.	Plate No.		概報No.	名称	型式名	法量 (mm)			残存度	胎土	焼成	色調	次数	出土位置			備考	
	実測図	写真				瓦当横	瓦当高	全長						グリッド		遺構名		
307	52	111	4- 50	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	並	灰褐色	29		SD0303・SD0305 上面	北東院		
308	52	111	4- 53	軒平瓦	唐草文?	-	-	-	瓦当一部残	並	並	暗灰色	29		SD0303	北東院		
309	52	111	4- 55	軒平瓦	I A01	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	灰白色	29		SK0376	北東院		

310	52	112	4- 56	軒平瓦	I A04	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	灰白色	29		SK0310	北東院		
311	52	112	4- 57	軒平瓦	II A01	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡橙褐色	29	207・870	表土	北東院		
312	52	111	4- 59	軒平瓦	唐草文	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰褐色	29		SK0303	北東院		
313	52	112	4- 60	軒平瓦	唐草文	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	暗灰色	29		SK0307	北東院		
314	52	112	7- 72	軒平瓦	I A04	-	27	-	瓦当一部残	精	硬	淡灰色	35	241・849	SK0233 [SX08033]	北東院		概報未報告
315	52	112	7- 73	軒平瓦	I A04	-	33	-	瓦当一部残	精	軟	灰白色	35	252・867	SD0205 [SD08026]	北東院	南	概報未報告
316	52	112	7- 71	軒平瓦	I A02	-	46	-	瓦当一部残	精	軟	灰白色	35		包含層	北東院	西	概報未報告
373	59	125	4- 24	軒平瓦	II B01	-	56	-	瓦当一部残	並	軟	灰色	29		SK0340	鐘楼・ 経蔵	東	
374	59	125	4- 25	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰色	29		SK0340	鐘楼・ 経蔵	東	
375	59	125	4- 27	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	軟	淡灰色	29	251・801	SD0348	北門	南	
376	59	125	4- 28	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	並	淡灰色	29	270・723	表土	築地	西	
377	59	125	4- 38	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰色	29	242・801	SK0340	鐘楼・ 経蔵	東	
378	59	125	4- 39	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰褐色	29		表土	北門		
379	59	125	4- 43	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	淡灰褐色	29		SK0340	鐘楼・ 経蔵	東	
380	59	125	4- 54	軒平瓦	I A04	-	-	-	瓦当一部残	粗	硬	淡灰色	29		攪乱層	築地	西	
381	59	125	4- 58	軒平瓦	唐草文	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	淡灰褐色	29		表土	鐘楼・ 経蔵	東	
382	60	126	5- 6	軒平瓦	II B02	-	67	-	瓦当一部残	粗	粗	暗灰色	30		SD04010	南東脇門		
383	60	126	5- 7	軒平瓦	II B02	-	65	-	瓦当一部欠	粗	粗	淡灰色	30		SD04010	南東脇門		
384	61	126	5- 8	軒平瓦	II B02	280	71	-	瓦当のみ完	やや粗	やや硬	淡灰色	30		SD04010	南東脇門		
385	61	126	5- 9	軒平瓦	II B02	285	61	-	瓦当のみ完	並	並	灰色	30		SD04010	南東脇門		
386	62	126	5- 10	軒平瓦	II B02	290	66	-	瓦当のみ完	粗	並	淡灰褐色	30		SD04010	南東脇門		
387	62	127	5- 11	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	やや軟	淡灰褐色	30		SK04015 上面	南東脇門		
388	62	127	5- 12	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	並	軟	暗灰色	30		表土	南東脇門		
389	62	127	5- 13	軒平瓦	唐草文	-	-	-	瓦当一部残	並	並	淡灰褐色	30		SD04003	南東脇門		
390	62	127	7- 77	軒平瓦	II B04	-	-	-	瓦当一部残	粗	硬	灰色	35		包含層	築地	南東	概報未報告
391	62	127	7- 96	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	粗	軟	にぶい淡 黄灰色	35		包含層	鐘楼・ 経蔵	西	概報未報告
508	63	127	5- 25	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	粗	並	淡灰褐色	30	219・891	サブトレンチ 3001	築地	東	概報未報告
509	63	127	5- 26	軒平瓦	II B02	-	-	-	瓦当一部残	やや粗	並	淡灰色	30	336・870	SK04015	南東脇門		概報未報告
510	63	127	5- 27	軒平瓦	II B01	-	-	-	瓦当一部残	粗	やや軟	淡灰褐色	30	339・870		南東脇門		概報未報告

Tab. 5 鬼瓦・塼観察表

No.	Plate No.		概報No.	名称	法量 (mm)			残存度	胎土	焼成	色調	次数	出土位置			備考	
	実測図	写真			幅	全長	厚さ						グリッド	遺構名			
29	13	70	3- 29	鬼瓦	-	-	-	一部残	粗	軟	淡灰褐色	28		SK0148	南門	北	
30	13	70	3- 30	鬼瓦	-	-	43	一部残	並	並	橙褐色	28		SK0148	南門	北	
31	13	70	3- 31	鬼瓦	-	-	-	一部残	精	並	橙褐色	28		SD0143 他	南門		
32	13	-	3- 32	鬼瓦	-	-	-	-	-	-	-	-			南門		18次?
56	16	-	3- 33	鬼瓦	-	-	-	-	-	-	-	25			中門		25次
57	16	73	2- 23	塼	-	-	68	一部残	精	硬	灰白色	25	F-2	瓦溜 (SK0132)	中門	南	A類 (板状)
101	21	79	4- 1	鬼瓦	-	-	60	一部残	粗	硬	灰色	29		表土	回廊		
102	21	79	2- 21	塼	-	-	68	一部残	やや粗	硬	灰白色	25	M-1	SK0125 上面瓦溜	回廊	南東	A類 (板状)
113	24	81	1- 45	塼	229	-	119	一部残	並	軟	灰白色	24	272・778	サブトレンチ 2411	金堂	南	B類 (角柱状)
114	24	82	1- 41	塼	191	245	73	ほぼ完形	並	軟	灰色	24	260・763	サブトレンチ 2409	金堂	西	A類 (板状)
185	39	90	1- 46	塼	122	373	94	ほぼ完形	やや粗	軟	灰褐色	24	215・760	SD9902	講堂	西	C類 (断面台形)
217	43	97	5- 18	塼	113	-	74	一部残	やや粗	軟	淡灰褐色	30		SK04086	僧坊	東	C類 (断面台形)
237	45	100	6- 1	鬼瓦	-	-	20	一部残	並	やや硬	淡灰色	31		SD05001 上面	小院	西	
238	45	102	6- 7	塼	-	-	75	一部残	粗	並	暗灰色	31		SD05040 上面	小院	南	A類 (板状)
239	45	102	6- 6	塼	-	-	72	一部残	並	軟	淡灰色	31		SD05002-2 上面	小院	南	A類 (板状)
240	46	101	7- 52	鬼瓦	-	-	71	一部残	精	やや軟	灰白色	35	249・873	SD0244 [SD08024]	小院	東	
317	52	112	4- 2	鬼瓦	-	-	40	一部残	並	硬	淡灰色	29		SD0212 上面	北東院		
318	53	112	4- 3	鬼瓦	-	-	40	一部残	並	軟	灰白色	29		SK0376 上面	北東院		
319	53	113	3- 66	鬼瓦	-	-	41	一部残	精	軟	灰白色	28		攪乱層	北東院	南	
320	53	113	3- 68	鬼瓦	-	-	-	一部残	並	軟	淡灰褐色	28		攪乱層	北東院	南	
321	53	113	3- 67	鬼瓦	-	-	30	一部残	精	軟	灰白色	28		攪乱層	北東院	南	

Tab.6 丸瓦・平瓦観察表

No	Plate No.	概報No	名称	型式名	法量 (mm)		残存度	胎土	焼成	色調	次数	出土位置			備考	
					幅	全長						グリッド	遺構名			
33	13	-	3- 34	丸瓦	-	158 335	-	-	-	-	28		SD0151	南門	西	
103	22	80	2- 54	平瓦	-	326	一部欠	精	硬	淡黄色	25	K-1		回廊	南東	
104	22	80	2- 61	平瓦	-	349	一部欠	並	硬	淡黄色	25	K-1		回廊	南東	
105	22	80	2- 19	平瓦	I A17	-	一部残	やや粗	硬	橙色	25	H-1	瓦溜	回廊	南東	文字瓦
115	25	82	1- 43	平瓦	-	249 328	完形	並	やや硬	灰色	24	248・772	サブトレンチ 2404	金堂	北	
116	25	82	1- 44	平瓦	-	355	ほぼ完形	粗	軟	淡橙灰色	24	245・760	SD0001	金堂	北	
186	39	91	1- 36	丸瓦	-	179 342	ほぼ完形	精	硬	灰色	24	207・760	SD9913	講堂	北	落下瓦
187	39	91	1- 37	丸瓦	-	356	一部欠	粗	軟	淡黄灰色	24	207・760	SD9913	講堂	北	落下瓦
188	39	91	7- 102	丸瓦	I A26	-	一部残	並	軟	淡橙褐色	35	228・777	SD9912 [SD08004]	講堂	南	文字瓦 概報未報告
189	39	92	7- 38	丸瓦	II A05	-	一部残	精	軟	にぶい淡黄灰色	35	228・789	SD9912 [SD08004]	講堂	南	文字瓦
190	39	92	7- 39	丸瓦	II A05	-	一部残	並	やや軟	淡灰褐色	35	228・789	SD9912 [SD08004]	講堂	南	文字瓦
191	39	92	7- 43	丸瓦	III D01	-	一部残	粗	軟	淡灰褐色	35	213・792	SD9915 [SD08003]	講堂	東	文字瓦
192	40	91	1- 38	平瓦	-	-	一部残	やや粗	やや軟	暗灰色	24	207・760	SD9913	講堂	北	落下瓦
193	40	93	1- 39	平瓦	-	287 375	一部欠	やや粗	軟	淡灰色	24	207・760	SD9913	講堂	北	落下瓦
194	40	94	7- 113	平瓦	-	-	一部残	並	並	灰色	35	213・792	SD9915 [SD08003]	講堂	東	概報未報告
195	40	95	7- 114	平瓦	-	-	一部残	粗	硬	灰白色	35	228・777	SD9912 [SD08004]	講堂	南	概報未報告
196	40	93	7- 51	平瓦	-	-	一部残	精	並	灰色	35	-	-	講堂	南	成形台記号状圧痕
197	41	94	1- 40	平瓦	-	-	一部欠	粗	軟	淡黄灰色	24	207・760	SD9913	講堂	北	落下瓦
198	41	94	1- 42	平瓦	-	352	一部欠	並	やや軟	淡灰色	24	207・760	SD9913	講堂	北	落下瓦
199	41	94	7- 46	平瓦	I A12	-	一部残	粗	並	暗灰色	35	35-1	表土	講堂	南	文字瓦
200	41	95	7- 47	平瓦	I A18	-	一部残	粗	並	淡灰色	35	228・780	SD9912 [SD08004]	講堂	南	文字瓦
201	41	95	7- 48	平瓦	I C03	-	一部残	粗	並	淡灰色	35	-	SD9915 [SD08003]	講堂	東	文字瓦
218	43	97	5- 16	丸瓦	-	150 400	一部欠	並	並	灰褐色	30	-	SD04084	僧坊	東	
219	43	97	5- 17	丸瓦	I A26	-	一部残	粗	並	灰褐色	30	-	SD04084	僧坊	東	文字瓦
220	43	98	4- 63	平瓦	I A22	-	一部残	粗	軟	淡灰褐色	29	186・379	-	僧坊	西	文字瓦
221	43	98	4- 69	平瓦	I A11	-	一部残	並	並	淡灰色	29	-	SD0342	僧坊	東	文字瓦
222	43	98	4- 66	平瓦	I C03	-	一部残	並	軟	灰白色	29	-	SD0342	僧坊	東	文字瓦
223	43	98	4- 67	平瓦	I C03	-	一部残	並	軟	淡灰褐色	29	-	SD0342	僧坊	東	文字瓦
224	43	99	4- 72	平瓦	不明	-	一部残	並	並	灰色	29	-	表土	僧坊	西	文字瓦
241	46	102	7- 36	丸瓦	I A26	-	一部残	やや精	並	淡灰色	35	237・828	SK08015	小院	西	文字瓦
242	46	103	7- 110	平瓦	I A16	-	一部残	粗	軟	灰褐色	35	249・873	-	小院	東	文字瓦, 概報未報告
243	46	102	7- 37	丸瓦	I C12	-	一部残	やや精	軟	淡灰色	35	240・878	SX08010	小院	東	文字瓦
244	46	102	7- 104	丸瓦	-	-	一部残	並	並	淡灰色	35	249・873	SD0244 [SD08024]	小院	東	文字瓦, 概報未報告
245	46	103	7- 106	平瓦	I A18	-	一部残	粗	並	灰色	35	249・873	SD0244 [SD08024]	小院	東	文字瓦, 概報未報告
246	47	103	6- 9	平瓦	II A08	-	一部残	やや粗	やや硬	灰白色	31	-	SK05014 上面	小院	東	文字瓦
247	47	103	6- 8	平瓦	II A03	-	一部残	並	やや硬	淡灰色	31	-	SD05001 上面	小院	西	文字瓦
248	47	104	7- 50	平瓦	-	-	一部残	精	軟	淡灰色	35	-	-	小院		成形台記号状圧痕
249	47	104	7- 44	平瓦	I A18	317 375	完形	粗。砂礫 多い		淡黄灰色	35	241・846	SK0233 [SX08033]	小院	北	文字瓦
322	53	113	7- 40	丸瓦	不明	-	一部残	やや粗	やや軟	淡灰褐色	35	35-3	-	北東院	南	文字瓦
323	40	93	7- 41	丸瓦	不明	-	一部残	並	軟	淡灰褐色	35	228・771	SD9912 [SD08004]	講堂	南	文字瓦
324	53	113	3- 106	丸瓦	I A27	-	一部残	粗	軟	淡橙色	28	-	攪乱層	北東院	南	文字瓦
325	53	113	7- 42	丸瓦	不明	-	一部残	精	軟	にぶい淡黄色	35	-	SD0210 [SD08008]	北東院	西	文字瓦
326	53	114	4- 61	丸瓦	I A27	-	一部残	粗	軟	淡灰褐色	29	-	SK0307	北東院		文字瓦
327	53	116	3- 114	丸瓦	-	159 382	一部欠	粗	軟	淡灰色	28	-	SD0209 上面	北東院	南	
328	54	114	7- 100	丸瓦	I B02	167 369	一部欠	粗	軟	橙褐色	35	237・828	SK08014	北東院	西	文字瓦 (2箇所), 概報未報告
329	54	114	3- 108	丸瓦	I A01	-	一部残	粗	軟	灰色	28	-	SK0239	北東院	南	文字瓦
330	54	115	7- 103	丸瓦	I A27	-	一部残	粗	並	淡灰色	35	237・828	SK08014	北東院	西	文字瓦, 概報未報告
331	54	115	7- 101	丸瓦	I B02?	186	一部残	精	やや軟	灰色	35	237・828	SK08015	北東院	西	文字瓦, 概報未報告
332	54	115	3- 110	丸瓦	不明	-	一部残	粗	硬	灰色	28	-	攪乱層	北東院	南	文字瓦
333	54	115	3- 111	丸瓦	I A27	-	一部残	精	軟	灰褐色	28	-	SD0205	北東院	南	文字瓦
334	54	116	3- 112	丸瓦	I A03	-	一部残	並	並	橙褐色	28	-	SK0242	北東院	南	文字瓦
335	54	116	3- 109	丸瓦	I A09	-	一部残	精	軟	淡灰褐色	28	-	SD0210 上面	北東院	南	文字瓦
336	55	117	3- 113	平瓦	-	328	ほぼ完形	精	硬	灰色	28	-	SD0209 上面	北東院	南	
337	55	117	7- 112	平瓦	-	375	一部欠	精	硬	灰色	35	-	SK08016	北東院	西	概報未報告
338	56	117	4- 68	平瓦	I C04	-	一部残	並	並	淡灰褐色	29	-	SK0307	北東院		文字瓦
339	56	118	4- 62	平瓦	I A07	-	一部残	粗	軟	淡灰色	29	207・831	表土	北東院		文字瓦
340	56	118	4- 70	平瓦	I C18	-	一部残	並	並	淡橙褐色	29	222・867	表土	北東院		文字瓦
341	56	118	4- 71	平瓦	I A72	-	一部残	粗	並	灰褐色	29	-	SK0307	北東院		文字瓦

No	Plate No.		概報No	名称	型式名	法量 (mm)		残存度	胎土	焼成	色調	次数	出土位置			備考	
	実測図	写真				幅	全長						グリッド	遺構名			
342	56	118	4- 73	平瓦	I A06	-	-	一部残	並	軟	淡灰褐色	29		SK0307	北東院		文字瓦
343	56	119	7- 105	平瓦	I A16	-	-	一部残	粗	並	灰褐色	35	252・873	SD0205 (SD08026)	北東院	南	文字瓦 概報未報告
344	56	119	7- 107	平瓦	I A07	-	-	一部残	粗	硬	淡灰色	35			北東院		文字瓦 概報未報告
345	56	119	7- 109	平瓦	I C18	-	-	一部残	並	並	灰白色	35	252・852		北東院	南	文字瓦 概報未報告
346	56	119	7- 111	平瓦	I C04	-	-	一部残	精	軟	淡橙褐色	35	237・831		北東院	西	文字瓦 概報未報告
347	56	120	3- 103	平瓦	I C01	-	-	一部残	精	軟	灰色	28		SC0204	北東院	南	文字瓦
348	56	120	3- 104	平瓦	I C03	-	-	一部残	並	並	灰白色	28		攪乱層	北東院	南	文字瓦
349	56	120	3- 105	平瓦	不明	-	-	一部残	並	軟	灰白色	28		攪乱層	北東院	南	文字瓦
350	56	120	3- 107	平瓦	I C04	-	-	一部残	精	軟	淡灰色	28		SD0209 上面	北東院	南	文字瓦
351	57	121	3- 93	平瓦	I C03	-	353	一部欠	並	並	灰白色	28		SD0210 上面	北東院	南	文字瓦
352	57	121	3- 94	平瓦	I A06	-	-	一部残	粗	並	淡橙灰色	28		SD0209 上面	北東院	南	文字瓦
353	57	121	3- 95	平瓦	I A06	-	-	一部残	粗	並	灰白色	28		SC0204	北東院	南	文字瓦
354	57	121	3- 96	平瓦	I A08	-	-	一部残	並	軟	橙褐色	28		攪乱層	北東院	南	文字瓦
355	57	122	3- 97	平瓦	I A12	-	-	一部残	精	並	灰色	28		攪乱層	北東院	南	文字瓦
356	57	122	3- 98	平瓦	I A08	-	-	一部残	並	並	灰色	28		攪乱層	北東院	南	文字瓦
357	57	122	3- 99	平瓦	I A12	-	-	一部残	粗	並	灰白色	28		攪乱層	北東院	南	文字瓦
358	57	122	3- 101	平瓦	I C03	-	-	一部残	粗	並	淡灰色	28		攪乱層	北東院	南	文字瓦
359	57	123	3- 100	平瓦	I A06	-	-	一部残	粗	並	淡灰色	28		SC0204	北東院	南	文字瓦
360	57	116	3- 102	平瓦	I A18	-	-	一部残	粗	軟	黒色	28		SD0212 上面	北東院	南	文字瓦 (2箇所)
361	57	123	7- 45	平瓦	I A08	-	-	一部残	やや精	軟	淡黄灰色	35	243・828	SD212 (SD08009)	北東院	西	文字瓦
392	40	93	7- 35	丸瓦	I A05	-	-	一部残	並	並	淡橙褐色	35	228・789	SD9912 (SD08004)	講堂	南	文字瓦
393	63	128	4- 64	丸瓦	不明	-	-	一部残	並	並	淡橙褐色	29		SK0340	鐘樓・ 経蔵	東	文字瓦
394	63	128	4- 65	平瓦	不明	-	-	一部残	並	軟	淡灰褐色	29		SK0340	鐘樓・ 経蔵	東	文字瓦
395	63	128	7- 49	平瓦	II A03	-	-	一部残	やや粗	硬	淡灰色	35	-	-	築地	南東	文字瓦
396	63	128	5- 14	平瓦	II A03	-	-	一部残	並	硬	淡灰色	30		SD04003	南東脇門		文字瓦
397	63	129	7- 108	平瓦	I A18	-	-	一部残	粗	並	橙褐色	35			築地	東	文字瓦, 概報未報告
506	39	92	5- 23	丸瓦	I A27	-	-	一部残	やや粗	並	淡灰色	30	192・786		講堂	北	概報未報告
507	41	95	5- 24	平瓦	I A12	-	-	一部残	並	硬	淡灰褐色	30	192・786		講堂	北	概報未報告
511	63	129	5- 28	平瓦	I A11	-	-	一部残	やや粗	並	淡橙褐色	30	324・855	瓦溜	南東脇門		概報未報告

Tab. 7 土器観察表

No	Plate No.		概報No	名称	法量 (mm)			残存度 %	胎土	焼成	色調	次数	出土位置			備考	
	実測図	写真			器高	口径	底径						グリッド	遺構名			
398	64	129	4- 107	土師器	皿	23	(129)	-	口縁一部欠	並	並	淡褐色	29		SD0342	僧坊	東
399	64	129	4- 108	土師器	坏	34	128	-	一部欠	粗	軟	淡橙褐色	29		SD0342	僧坊	東
400	64	-	4- 109	土師器	坏	-	-	-	-	-	-	29		SD0303	北東院		
401	64	-	4- 111	土師器	坏	-	-	-	-	-	-	29		SD0305	北東院		
402	64	-	4- 113	土師器	坏	-	-	-	-	-	-	29					
403	64	-	4- 110	土師器	坏	-	-	-	-	-	-	29		SK0309	北東院		
404	64	-	4- 112	土師器	坏	-	-	-	-	-	-	29		SD0303	北東院		
405	64	-	3- 125	土師器	坏	-	(142)	-	-	-	-	28		SD0216	北東院		
406	64	-	3- 119	土師器	坏	-	(159)	-	-	-	-	28		SK0213	北東院		
407	64	-	3- 120	土師器	坏	-	(160)	-	口縁一部残	精	並	淡褐色	28		SK0213	北東院	
408	64	-	6- 14	土師器	坏	-	(166)	-	口縁 30	並	並	淡橙褐色	31		SD05031 上面	小院	南
409	64	-	4- 114	土師器	坏	-	-	-	-	-	-	29		SK0376	北東院		
410	64	-	3- 118	土師器	坏	-	(198)	-	-	-	-	28		SK0213	北東院		
411	64	-	7- 1	土師器	皿	26	(206)	-	口縁 13	精	軟	淡褐色	35	-	SK08016	小院	西
412	64	129	4- 106	土師器	甗	-	(124)	-	口縁一部残	精	軟	褐色	29		SD0305	北東院	
413	64	129	3- 124	土師器	甗	95	(151)	-	口縁 30	並	並	暗灰色	28		SD0216	北東院	
414	64	-	3- 126	土師器	甗	-	(256)	-	口縁一部残	粗	並	淡褐色	28		SD0216	北東院	
415	64	129	4- 78	土師器	甗	-	(193)	-	口縁 25	粗	並	淡橙褐色	29		SK0345	僧坊	西
416	64	130	4- 79	土師器	甗	-	(172)	-	口縁一部残	粗	やや軟	淡褐色	29		SK0345	僧坊	西
417	64	-	4- 80	土師器	甗	-	(209)	-	口縁一部残	粗	並	淡赤褐色	29		SK0345	僧坊	西
418	64	130	6- 15	土師器	広口壺	-	(210)	-	口縁一部	やや粗	並	淡橙褐色	31		SH05018 上面	小院	南
419	64	130	2- 60	土師器	甗	-	-	-	底のみ残	並	並	淡褐色	25	M-1	SK0125	回廊	東
420	64	130	7- 2	土師器	甗	159	(217)	-	口縁 33	やや粗	軟	淡黄褐色	35	-	SK08016	小院	西
421	64	-	3- 127	土師器	甗	-	(235)	-	口縁一部残	並	軟	淡褐色	28		SD0216	北東院	
423	64	130	4- 116	製塩土器		-	-	-	口縁一部	粗	軟	橙褐色	29		SK0307	北東院	志摩式
424	64	130	4- 117	製塩土器		-	-	-	口縁一部	粗	軟	橙褐色	29		SK0307	北東院	志摩式
425	64	130	4- 118	製塩土器		-	-	-	底一部	粗	軟	橙褐色	29		SK0307	北東院	志摩式
426	64	130	4- 119	製塩土器		-	-	-	底一部	粗	軟	橙褐色	29		SK0307	北東院	志摩式
427	64	130	4- 120	製塩土器		-	-	-	口縁一部	粗	軟	橙褐色	29		SK0307	北東院	志摩式
428	64	130	4- 121	製塩土器		-	-	-	口縁一部	粗	軟	橙褐色	29		SK0307	北東院	志摩式
429	64	130	4- 122	製塩土器		-	-	-	口縁一部	粗	軟	橙褐色	29		SK0307	北東院	志摩式
430	64	130	4- 123	製塩土器		-	-	-	口縁一部	粗	軟	橙褐色	29		SK0307	北東院	志摩式
431	65	130	1- 1	須恵器	坏	47	(104)	-	口縁 20	並	硬	灰色	22	215・760	サブトレンチ 2201	講堂	坏H

No.	Plate No.		概報No.	名称		法量 (mm)			残存度 (%)	胎土	焼成	色調	次数	出土位			備考	
	実測図	写真				器高	口径	底径						グリッド	遺構名			
432	65	130	7- 3	須恵器	環	-	(116)	-	口縁 75	精	並	灰色	35	-	SK0237 [SK08028]	小院	東	混入
433	65	130	4- 74	須恵器	環	47	(107)	-	口縁 25	並	並	灰色	29	-	SK0345	僧坊	西	環H
434	65	130	4- 75	須恵器	環	-	(106)	-	口縁一部残	並	並	灰色	29	-	SK0345	僧坊	西	環H
435	65	131	4- 76	須恵器	短頸壺	-	(112)	-	口縁 30	並	硬	濃灰色	29	-	SK0345	僧坊	西	
436	65	130	4- 77	須恵器	短頸壺	-	-	-	底一部	精	硬	灰色	29	-	SK0345	僧坊	西	
437	65	131	6- 10	須恵器	環蓋	-	(131)	-	天井一部	硬	硬	暗灰色	31	-	SH05018 上面	小院	南	環H
438	65	131	4- 81	須恵器	環蓋	32	(137)	-	口縁 30	並	並	濃灰色	29	-	SK0310	北東院		
439	65	131	3- 121	須恵器	蓋	-	(108)	-	口縁一部残	精	硬	淡灰色	28	-	SD0209 上面	北東院		
440	65	131	3- 115	須恵器	環蓋	24	(139)	-	口縁 30	精	硬	淡灰色	28	-	SK0213	北東院		
441	65	131	3- 116	須恵器	環蓋	-	(149)	-	口縁一部残	精	硬	灰色	28	-	SK0213	北東院		
442	65	131	3- 117	須恵器	環蓋	-	(137)	-	口縁一部残	精	硬	灰色	28	-	SK0213	北東院		
443	65	131	6- 11	須恵器	環蓋	26	135	-	口縁 30	並	並	灰色	31	-	SD05002-1 上面	小院	南	
444	65	131	7- 5	須恵器	蓋	-	123	-	口縁 40	やや粗	硬	灰色	35	-	SK08015	小院	西	環B
445	65	131	4- 83	須恵器	環蓋	-	(147)	-	口縁一部残	並	並	灰色	29	-	SK0327	北東院		
446	65	131	4- 82	須恵器	環蓋	-	(148)	-	一部欠	並	並	灰色	29	-	SK0309	北東院		
447	65	131	7- 4	須恵器	蓋	-	(134)	-	口縁 16	やや粗	硬	灰色	35	-	サブトレンチ 3512	北東院	西	環B
448	65	131	1- 3	須恵器	蓋	-	(143)	-	口縁 17	並	並	灰色	24	272・772	表土	金堂	南	環H
449	65	131	4- 87	須恵器	環蓋	-	(163)	-	口縁一部残	並	軟	淡褐色	29	-	SD0353	僧坊	西	
450	65	131	4- 84	須恵器	環蓋	-	(174)	-	口縁一部残	並	並	淡灰色	29	-	SK0327	北東院		
451	65	132	4- 90	須恵器	蓋	-	(115)	-	口縁一部残	精	硬	淡灰色	29	186・739	表土	僧坊	東	
452	65	-	4- 88	須恵器	環蓋	-	-	-	-	-	-	-	29	-	SK0309	北東院		
453	65	-	4- 86	須恵器	環蓋	-	-	-	-	-	-	-	29	-	SK0376	北東院		
454	65	132	7- 7	須恵器	蓋	-	(181)	-	口縁 13	精	硬	灰～橙褐色	35	-	SX08010	小院	東	環B
455	65	132	7- 8	須恵器	蓋	-	146	-	口縁 16	精	硬	灰～灰褐色	35	-	SK08015	小院	西	環B
456	65	132	7- 9	須恵器	蓋	-	144	-	口縁 13	並	硬	灰色	35	-	SD9912 [SD08004]	講堂	南	環B
457	65	132	6- 12	須恵器	環蓋	-	(141)	-	口縁一部	やや硬	やや硬	灰色	31	-	SD05031 上面	小院	南	
458	65	132	4- 85	須恵器	環蓋	-	-	-	天井一部残	並	並	灰色	29	186・739	表土	僧坊	西	
459	65	132	4- 89	須恵器	環蓋	-	-	-	天井のみ残	軟	硬	灰色	29	-	SD0342	僧坊	東	
460	65	132	7- 6	須恵器	蓋	-	-	-	-	精	やや硬	橙褐色	35	-	SX08010	小院	東	環B
461	65	132	7- 10	須恵器	蓋	43	123	-	口縁 75	やや粗	硬	淡灰～灰色	35	-	SK08016	小院	西	薬壺
462	65	132	2- 56	須恵器	蓋	-	(224)	-	口縁一部残	並	硬	淡灰色	25	F-2	瓦溜上面 (SK0312)	中門	南	
463	65	132	5- 19	須恵器	蓋	31	140	-	口縁 50	並	硬	灰色	30	-	SD04096	僧坊	東	
464	65	132	4- 97	須恵器	環	37	124	-	口縁 30	並	軟	淡橙褐色	29	-	SD0342	僧坊	東	
465	65	-	4- 94	須恵器	環	-	-	-	-	-	-	-	29	-	SK0375	北東院		
466	65	132	4- 92	須恵器	環身	-	(184)	(121)	一部残	精	軟	淡灰色	29	-	SK0309	北東院		
467	65	132	7- 11	須恵器	環	-	(130)	(110)	口縁 16	精	硬～やや硬	灰色	35	-	表土	小院	南	環A
468	65	132	5- 21	須恵器	環身	38	(140)	(110)	底一部	精	並	灰色	30	-	SD04096	僧坊	東	
469	65	132	4- 91	須恵器	環身	37	(114)	(80)	一部残	精	並	淡灰色	29	-	SK0376	北東院		
470	65	133	4- 95	須恵器	環身	-	-	(115)	底 25	並	並	灰色	29	-	表土	北東院		
471	65	133	4- 93	須恵器	環	-	(174)	-	口縁一部残	並	硬	灰色	29	-	SD0353	僧坊	西	
472	65	133	2- 57	須恵器	環	-	-	112	底 60	並	硬	灰色	25	M-1	SK0125	回廊	東	
473	65	133	5- 20	須恵器	環身	-	(131)	-	底 25	並	並	灰色	30	-	SD04096	僧坊	東	
474	65	133	4- 98	須恵器	鉢	-	(170)	-	口縁一部残	精	やや軟	淡灰色	29	-	SK0376	北東院		
475	65	133	2- 58	須恵器	環	-	-	(108)	底 25	やや粗	やや軟	灰色	25	M-1	SK0125	回廊	東	
476	65	-	4- 96	須恵器	環身	-	-	-	-	-	-	-	29	-	SK0375	北東院		
477	65	133	1- 2	須恵器	-	-	-	(65)	底 50	粗	硬	暗灰色	24	254・766	サブトレンチ 2408	金堂	北	
478	65	133	2- 55	須恵器	-	-	-	-	底のみ残	並	硬	灰色	25	M-1	SK0125	回廊	東	瓶または壺
479	66	133	2- 59	灰釉陶器	皿	-	-	(77)	底 50	並	硬	灰色	25	F-3	瓦溜上面 (SK0312)	中門	南	
480	66	133	7- 19	灰釉陶器	碗	-	-	(66)	底部 25	精	硬	灰色	35	-	SB08001	講堂		
481	66	133	7- 14	陶器	碗	-	-	(70)	底部 25	並	やや硬	橙褐色	35	-	SB08001	講堂		
482	66	133	7- 17	灰釉陶器	碗	-	-	77	底部 100	並	硬	灰色	35	-	SD9912 [SD08004]	講堂	南	
483	66	133	7- 13	灰釉陶器	-	-	-	86	底部 13	並	並	淡灰色	35	207・792	SD9915 [SD08003]	講堂	東	
484	66	133	1- 5	灰釉陶器	-	-	-	(68)	底一部残	並	並	淡灰色	22	215・793	SD9905	講堂	東	
485	66	133	3- 123	灰釉陶器	碗	-	-	(83)	底一部残	精	硬	灰白色	28	-	SD0209 上面	北東院		
486	66	133	1- 4	灰釉陶器	-	-	-	54	底のみ残	精	硬	灰白色	24	224・760	SD9902	講堂	西	
487	66	133	7- 12	灰釉陶器	碗	-	-	89	底部 50	やや精	硬	淡灰色	35	-	SX08010	小院	東	
488	66	134	4- 100	灰釉陶器	碗	47	148	59	底 100	精	硬	淡灰色	29	-		北門		
489	66	134	4- 101	灰釉陶器	碗	-	(126)	-	口縁一部残	精	並	淡灰色	29	-	SD0303	北東院		
490	66	134	7- 15	灰釉陶器	皿	-	-	(98)	底部 16	精	やや硬	灰白色	35	207・792	SD9915 [SD08003]	講堂	東	
491	66	134	1- 6	灰釉陶器	段皿	-	-	80	底のみ残	並	並	淡灰色	24	272・778	表土	金堂	南	
492	66	134	7- 16	灰釉陶器	-	-	-	72	底部 75	並	硬	灰白色	35	228・786	SD9912 [SD08004]	講堂	南	
493	66	134	7- 18	灰釉陶器	碗	-	-	(76)	底部 25	精	軟	淡黄灰色	35	219・792	SD9915 [SD08003]	講堂	東	
494	66	-	3- 122	灰釉陶器	碗	71	(182)	(82)	口縁一部残	並	並	灰白色	28	-	SD0209 上面	北東院		
495	66	134	4- 102	灰釉陶器	段皿	32	184	(73)	口縁・底一部残	精	並	淡灰色	29	-	表土	北門		

No	Plate No.		概報No	名称	法量 (mm)			残存度 (%)	胎土	焼成	色調	次数	出土位置			備考		
	実測図	写真			器高	口径	底径						グリッド	遺構名				
496	66	134	4-103	灰釉陶器	段皿	-	-	(75)	底25	精	並	淡灰色	29		SD0303	北東院		
497	66	134	5-22	灰釉陶器	皿	-	-	(67)	底一部	やや硬	やや硬	淡灰色	30		SD04096	僧坊	東	
498	66	134	6-13	山皿		30	95	41	完形	粗	硬	淡灰色	31		SK05025 上面	小院	南	
499	66	134	4-99	灰釉陶器	浄瓶	-	-	-	頸部のみ	精	硬	淡灰色	29				北門	
500	66	134	4-104	灰釉陶器	薬壺	-	-	-	肩一部残	精	並	灰褐色	29		SD0303		北東院	
501	66	134	4-105	緑釉陶器	唾壺	-	-	-	一部残	精	硬	淡緑色	29		SD0352		北門	
502	66	134	4-115	常滑焼陶器	壺	-	-	112	口縁部欠	粗	硬	灰色	29		SX03101		北東院	
512	66	134	5-29	緑釉陶器		-	-	(73)	底一部残	精	硬	淡緑色	30	219・891	サブトレンチ 3001	築地	東	概報未報告

Tab. 8 その他観察表

No.	Plate No.		概報No	名称	法量 (mm)			次数	出土位置			備考		
	実測図	写真			器長	器幅	器厚		グリッド	遺構名				
422	64	134	7-20	鉄製品	釘	160	11	-	35		SD9912 (SD08004)	講堂	南	
503	66	134	2-62	鉄製品	刀子	66	39	2	25	K-1	SH0127	回廊	南東	木質付着
504	66	134	2-63	石器	磨製石斧	(332)	(47.4)	(11.7)	25		表土	回廊	南東	
505	66	4-	124	石器	石鏃	23.2	17	3.9	29	318・879	SB0301 上面	南東地区		黒曜石

## 第5章 出土遺物から見た伊勢国分寺の変遷

### 1 はじめに

伊勢国分寺跡は昭和20年代はじめに農地改良が行われ、大きく地形の改変が行われている。考古学的な発掘調査が開始された昭和60年代において、基壇の痕跡と思われる地上遺構をとどめていたのは、後に講堂跡であることがわかる部分のみであった。

発掘調査では瓦類を中心に多くの遺物が出土しており、その大半は溝や土坑からの出土である。最も遺構の保存状態が良かった部分は講堂で、軒から直下に瓦が落下し、そのまま保存されたような部分が基壇北西部分で見つかった。加えて、基壇基底部における塼列の状況が良好に残っていたのも講堂であった。講堂の調査成果は、伊勢国分寺の変遷を考える上で最も基準となる成果であったと考えられる。

一方、小院関連遺構を切って設けられた北東院の存在も、伊勢国分寺における創建や修造の過程を考察する上で参考となる。

その他の遺構では、金堂や中門の一部で基礎地業が確認されているものの、基壇周辺の溝状遺構が残存するのみで、遺構の変遷が捉えにくい。出土している瓦と対応する建物の関係は必ずしも明確にはなっていないが、建物直近から出土した軒瓦などの遺物を元に個々の変遷を考察することになる。

### 2 伽藍ごとの概要

南門では、IRE II A03・II A04, ICE II B01・II B02 がまとまって出土しており、これらが創建瓦と考えられる。最も初期に導入されたと考えられるIRE II A02は認められない。時期が異なる瓦は確認されておらず、南門の変遷は明らかにできない。

ちなみに南門では、伊勢国分寺唯一の隅軒平瓦が出土しており、切妻屋根であれば、螭羽瓦にも瓦当文様を有していた可能性がある。

中門においては、軒丸瓦ではIRE II A03がまとまって出土し、II A04が少量加わる。軒平瓦ではICE II B01がまとまって出土しており、さらに重圏文系であるIRE I A09が出土している。軒瓦の組み合わせとしては、IRE II A03・ICE II B01が基本であろう。IRE I A09は伊勢国府所用瓦であり、他の地点と同様に国分寺では差替瓦として二次的に使用された可能性がある。したがって、中門では国府所用瓦を転用した改修の段階が想定できる。

回廊においては、軒丸瓦ではIRE II A04がまとまっ

て出土するほか、II A03, II A02が少量出土する。軒平瓦ではICE II B01がまとまって出土し、重圏文系のI A06が1点のみ出土している。軒瓦の組み合わせとしては、IRE II A04・ICE II B01が基本と思われる。ICE I A06は国府由来なので、中門と同様に国府所用瓦の転用による修造が考えられる。

金堂では、IRE II A02・II A03, ICE II B01が出土するほか、時期が下ると考えられるICE II B12が1点出土している。IRE II A02は範傷が発達するもので、ICE II B01は範傷が未発達なものである。出土総数が少ないため明確にはできないが、IRE II A03・ICE II B01が基本的な軒瓦の組み合わせであろう。ICE II B12は修造期のものと考えられる。遺構の切り合い関係から少なくとも2時期の変遷が想定されるが、遺物との関係は明確にしたい。

講堂の落下瓦は、IRE II A02, ICE II B02からなるのが特徴的である。IRE II A02は、瓦当中央に水平方向の範傷が発達する個体が多く、瓦生産の比較的早い段階で範傷が発生していたことが考えられるものである。落下瓦中には範傷が発生していない個体が2点含まれており、IRE II A02・ICE II B02の組み合わせが講堂の創建期のものであると考えられる。IRE II A02は他の型式に比べ瓦当部が薄く、伊勢国分寺所用瓦の中でも初期のものと考えられ、ICE II B02もI B01に比べ、文様構成がより原初的であることから、伊勢国分寺では最初期の瓦であると考えられる。

その他講堂では、IRE II G01やICE II B01・II B04・II B14・I A04が出土している。ICE I A04は重圏文系であり、国府に由来するものであろう。IRE II G01は後出的なもので、大規模な修造に際し、導入された差し替え瓦であると考えられる。修造期の軒平瓦としてはII B04やII B14がある。IRE II G01に焼成が近いのはII B14である。

一方、遺構の上では、基壇化粧に台形塼が用いられる段階と瓦塼積基壇となる段階があり、南面の階段基底部においても整然と台形塼が並ぶ創建期の段階と破損品で補われ、国府系文字瓦が埋められる修造期の段階が想定される。

以上を総合すれば講堂では、IRE II A02・ICE II B02が使用され、基壇に台形塼が多用される創建期の段階がまず想定できる、次に、瓦塼積基壇となり、IRE II G01・ICE II B14が補完される段階、さらにIRE II G01が瓦塼積基壇に取り込まれる段階に大別される。IRE II G01の導入時期は、北東院における国府系瓦との共伴状況

から国府系瓦が国分寺に流入する国衙衰退期と考えられ、8世紀末から9世紀初頭と想定される。

僧坊においては、軒丸瓦はIRE II B08が2点と重圏文系瓦が出土し、軒平瓦はICE II B02が主体で、II B01が少量加わる。僧坊では基壇周囲の溝状遺構が不明確であり、所用瓦の特定は困難であるが、IRE II B08・ICE II B02の組み合わせを想定したい。

小院においては、軒丸瓦は、II A02が主体を占め、II A03・II A04が加わる。軒平瓦はI A01・I A02・I A04・II A01など国府系瓦のみである。国府系瓦は北東院整備段階に埋没したものと考えられ、本来的な軒平瓦は不明である。建物に伴う溝状遺構は残りが悪いものの、遺物を含まず、反復的に掘削された形跡は認められないため、建物が存在したとしても短命であった可能性が考えられる。

北東院は、伊勢国分寺の中では後発の施設であることが明らかなものであり、出土している瓦は多様である。また創建期から存在したと思われる食堂関係の遺物も混在していると考えられる。軒丸瓦では、II G01が一定量あり、重圏文系も認められる。軒平瓦では重圏文系が多く、国府系の文字瓦は極めて多い。国府系の瓦類の存在から8世紀末から9世紀初頭にかけての大規模な修造に伴い、北東院が設けられたと考えられる。

食堂や小院と中軸を揃えて存在したと考えられる南東門周辺においても軒瓦類が特徴的に認められる。軒丸瓦ではII A02が、軒平瓦ではII B02が出土している。この組み合わせは講堂創建期と同様であるが、IRE II A02はいずれも范傷がよく発達しており、造営順序を反映したものと考えられる。

### 3 総括

伊勢国分寺における伽藍の変遷を考える上で基本となるのは、最も遺構の残りが良かった講堂のあり方である。講堂で認められる3期の変遷をI・II・III期としたとき、出土瓦から想定した創建期の瓦はI期に相当し、修造期の瓦はII期以降と考えられる。その他の建物において想定される基本的な軒瓦の組み合わせは講堂のI期に相当するもので、同様に差替え瓦はII期以降にあたると考えられる。細かな変遷の解明は遺構の保存状態から限界があるが、全体的には北東院が設けられた8世紀末ないし9世紀初頭に大きな画期があったことは疑いない。北東院が敷設される以前は、南門・中門・金堂・僧坊・北門を結ぶ中軸線とともに南東門・小院・食堂を結ぶ中軸線を有する伽藍構成が認められ、

これらがすなわち創建期の姿を示すものと考えられる。

一方、創建の時期や廃絶の時期については、根拠となる材料が無いか、あるいは極めて乏しい。国分寺に先行する遺構として古墳や竪穴建物などが検出されているが、7世紀以前のものであり、創建直前のもは把握されていない。創建時期に関わるものとしては創建瓦と考えられる一群があり、軒丸瓦については横置型一本作りによる<sup>註1</sup>。同技法は、平城京で天平初年頃に導入され、地方への波及は国分寺の建立を契機とするものであったとされる。同技法には積み上げ技法と折り曲げ技法があり、後者の初出は神護景雲年間と考えられている<sup>註2</sup>。講堂創建瓦であるIRE II A02は積み上げ技法によるものとみられ、伊勢国分寺におけるあり方もこうした瓦生産技術の伝播と軌を一にするものと考えられるが、その時期をさらに限定することは難しい。

国分寺の創建については一般的に天平13(741)年の勅を契機とし<sup>註3</sup>、天平19(747)年の造営督促<sup>註4</sup>が国分寺造営の進捗を反映したものと解されている。伊勢国分寺に限れば、天平21年4月<sup>註5</sup>において伊勢大鹿首が「治め賜ふべき人」とされていることが、国分寺造営に対して功があったことに基づくものとの説がある<sup>註6</sup>。この仮定どおりであるなら、勅から10年足らずで、堂宇が整っていた可能性が考えられる。

また、伊勢国分寺の伽藍の状況を示唆するものとして、宝亀6年8月の伊勢・尾張・美濃における異常風雨報告<sup>註7</sup>があり、「国分并せて諸寺の塔十九を壊つ」には伊勢国分寺の塔を含む可能性がある。このとき、壊れた塔があったとすれば、その場所としては小院が整合的である。

さらに時代が下る延暦14(795)年の講師読師制<sup>註8</sup>や大同4(809)年の志摩国分二寺僧尼の伊勢国安置<sup>註9</sup>は北東院の造営をはじめとする大規模な修造に関わる可能性がある。先述のとおり、この修造に対応する瓦が、国府系の転用瓦やIRE II G01と想定される。

伊勢国分寺の廃絶については、基壇周囲に形成された溝状遺構の最終的な埋没年代が示唆するものと思われる。講堂周囲の溝状遺構では上層のみ調査しているが、出土した灰釉陶器は建物や基壇の改修時に埋没したものである。したがってこれらの灰釉陶器が示す最新年代が、最後の大規模な改修工事の時期と考えられ、以後は小破修繕により維持されたことが想像できる。それらの灰釉陶器とは、概ね折戸53号窯式段階に相当すると考えられることから、最後の大規模な改修工事



は10世紀前半代<sup>註10</sup>か、それを大きく下らない時期と考えられる。北東院内で検出されている常滑焼の骨蔵器は火葬墓に関連するもので、国分寺の荒廃が進んでから形成されたと見られる。

「皇太神宮建久已下古文書」では、「山邊御園」が永承年中（1046～1052）設置で、承安元（1171）年に宣旨を受け、当御園内の大鹿村が国分寺領として院宣を受けたことが知られる<sup>註11</sup>。さらに時期が下る乾元2（1303）年から徳治3（1308）年の記録として「京都御所東山御文庫記録」に伊勢国分寺が法勝寺領であったことが記される<sup>註12</sup>。これら古代末から中世にかけての文献記録は、国分寺荒廃後の状況を背景としたものであろう。

#### 【註】

- 1 梶原義実 2005。
- 2 毛利光俊彦 1991・274頁。
- 3 天平13年2月14日太政官符（黒板勝美編輯 2000・107～108頁）。
- 4 『続日本紀』天平19年11月己卯条（青木和夫他 1992・48～51頁）。
- 5 『続日本紀』天平勝宝元年4月甲午朔条（青木和夫他 1992・70～71頁）。
- 6 岡田登 1999b・5～6頁。
- 7 『続日本紀』宝亀6年8月癸未条（青木和夫他 1995・456～457）。
- 8 延暦14年8月13日太政官符（黒板勝美編輯 2000・125頁）。
- 9 『日本後紀』大同4年閏2月辛丑条（黒板伸夫・森田悌編集 2003・472～473頁）。
- 10 齊藤孝正 2000・95～96頁により、折戸53号窯

式は900～950年頃とされる。

11 『神宮雑書』（神宮古典籍影印叢刊編集委員会 1983・116～117頁）。

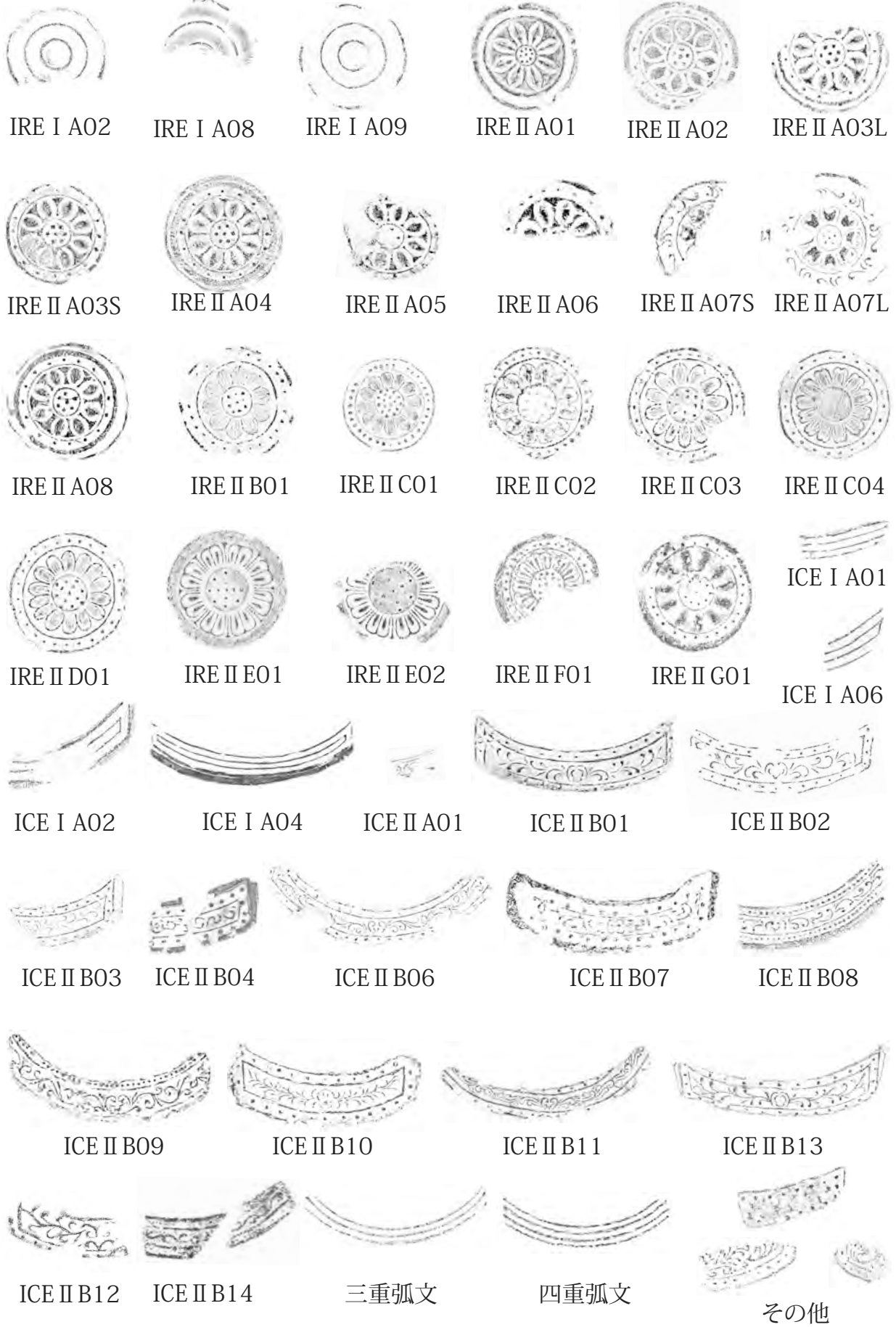
12 奥野高廣 1956・147頁、阿部猛 1986・5頁。

#### 【参考文献】

- 青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸校注 1992 『続日本紀3』（新日本古典文学大系14）岩波書店
- 青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸校注 1995 『続日本紀4』（新日本古典文学大系15）岩波書店
- 阿部猛 1986 「六勝寺考」『帝京史学』第2号
- 岡田登 1999a 「伊勢大鹿氏について（上）」『史料』第135号 皇學館大學史料編纂所
- 岡田登 1999b 「伊勢大鹿氏について（下）」『史料』第136号 皇學館大學史料編纂所
- 奥野高廣 1956 「六勝寺領について」『國學院雑誌』第57巻第7号
- 梶原義実 2005 「古代伊勢における官営瓦工房」『名古屋大学文学部研究論集（史学）』vol.52
- 梶原義実 2008 「横置型一本作り軒丸瓦の諸技法とその年代」『名古屋大学文学部研究論集（史学）』vol.54
- 黒板勝美編輯 2000 『新訂増補国史大系第25巻類聚三代格弘仁格抄』吉川弘文館
- 黒板伸夫・森田悌編集 2003 『訳注日本史料日本後紀』集英社
- 齊藤孝正 2000 『日本の美術』No.409 越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器 至文堂
- 神宮古典籍影印叢刊編集委員会 1983 『神宮神領紀』八木書店
- 毛利光俊彦 1991 「第Ⅵ章考察」『平城宮跡発掘調査報告ⅩⅢ』奈良国立文化財

## 图 版





0 30cm  
伊勢国分寺跡軒瓦型式一覧

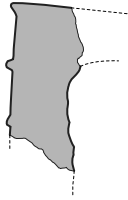
Plate 2



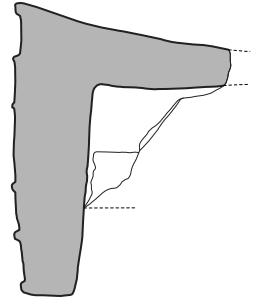
IRE I A02



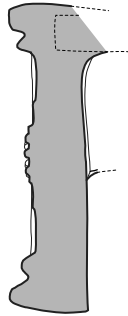
IRE I A08



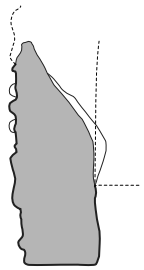
IRE I A09



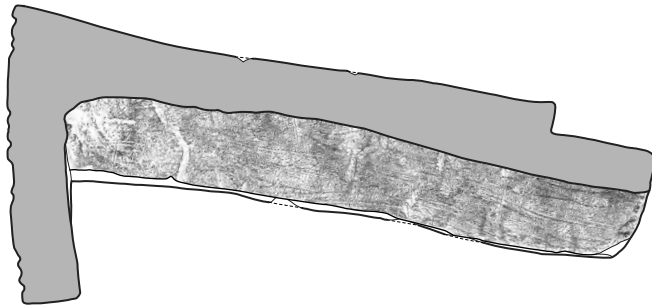
IRE II A01



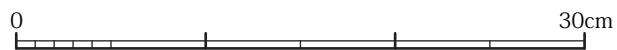
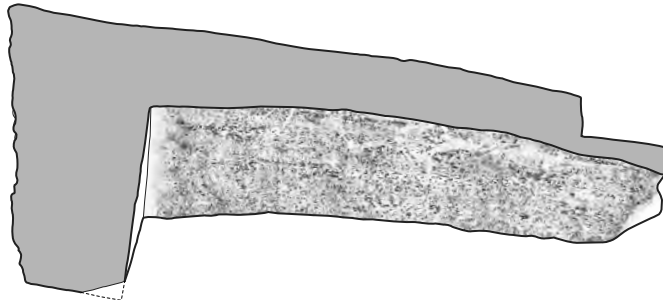
IRE II A03L



IRE II A02



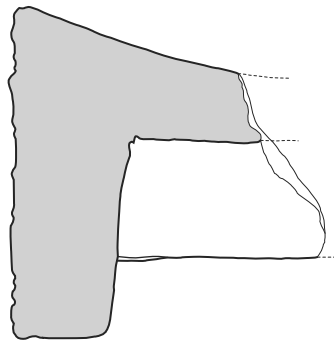
IRE II A03S



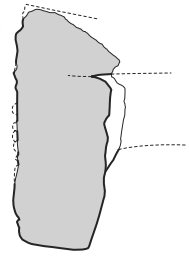
伊勢国分寺跡軒丸瓦型式 (1)



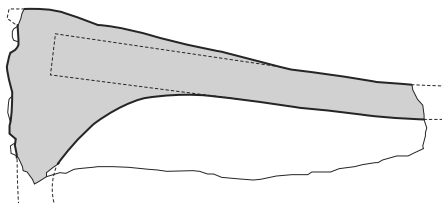
IRE II A04



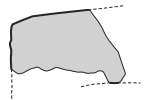
IRE II A05



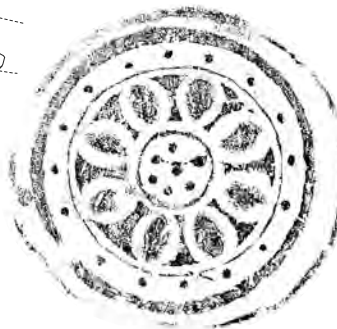
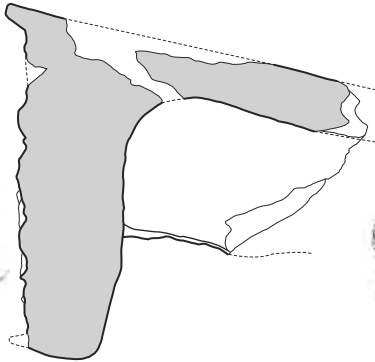
IRE II A06



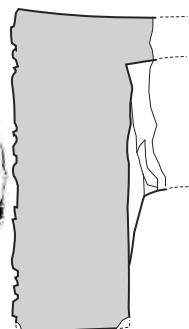
IRE II A07S



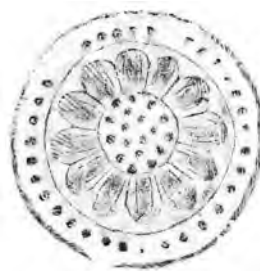
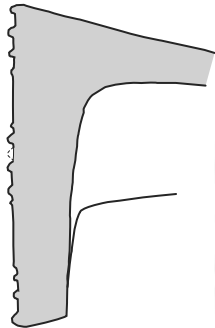
IRE II A07L



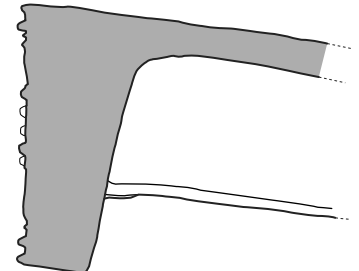
IRE II A08



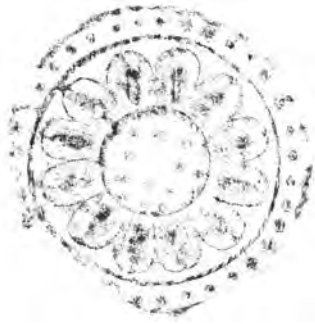
IRE II B01



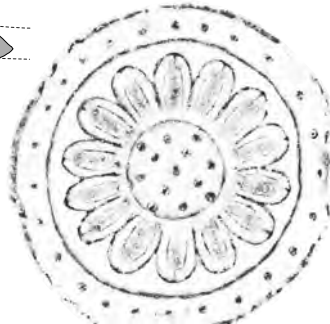
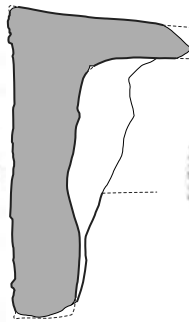
IRE II C01



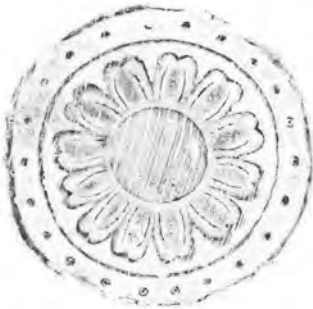
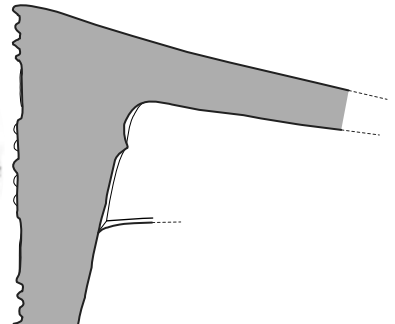
伊勢国分寺跡軒丸瓦型式 (2)



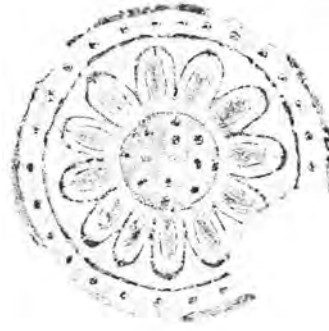
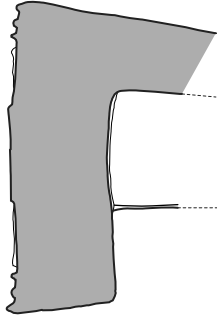
IRE II C02



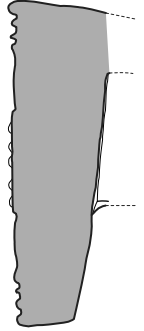
IRE II D01



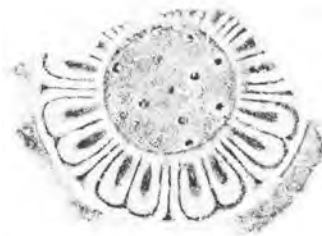
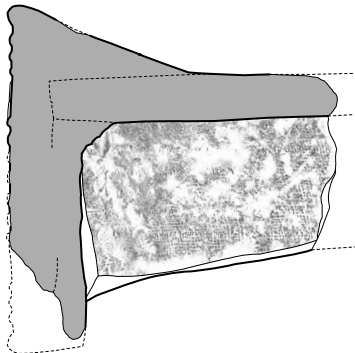
IRE II C04



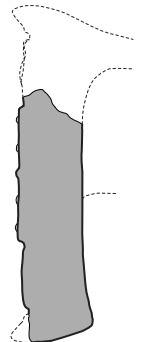
IRE II C03



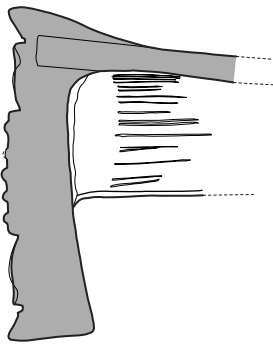
IRE II F01



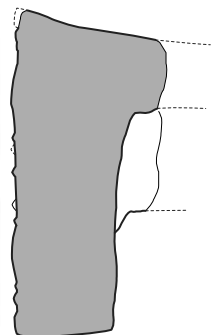
IRE II E02



IRE II E01



IRE II G01



伊勢国分寺跡軒丸瓦型式 (3)



ICE I A01



ICE I A02



ICE I A06



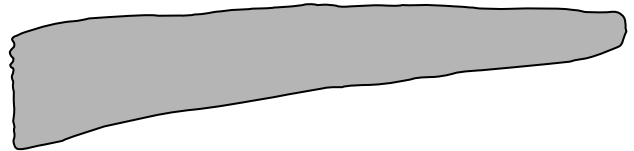
ICE II A01



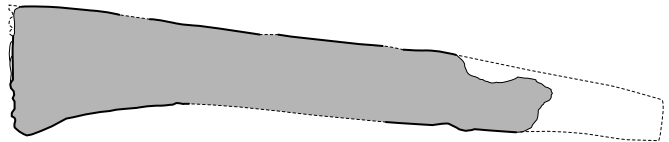
ICE I A04



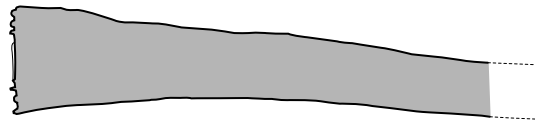
ICE II B01



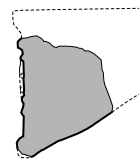
ICE II B02



ICE II B03



ICE II B04



伊勢国分寺跡軒平瓦型式(1)



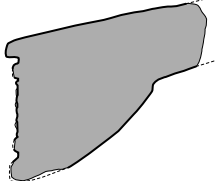
Plate 6



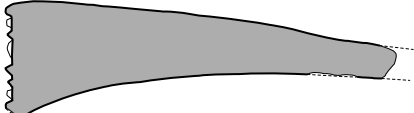
ICE II B06



ICE II B07



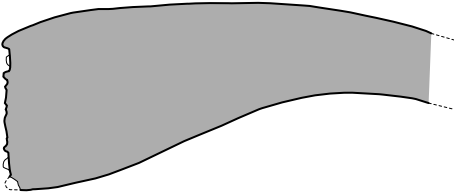
ICE II B08



ICE II B09



ICE II B10

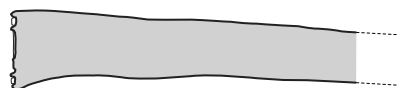


0 30cm

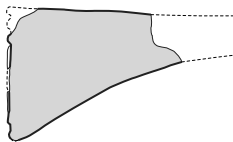
伊勢国分寺跡軒平瓦型式 (2)



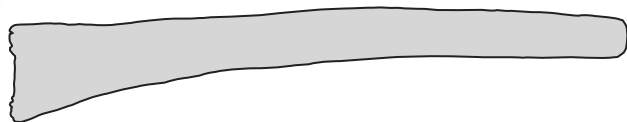
ICE II B11



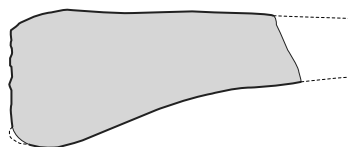
ICE II B12



ICE II B13



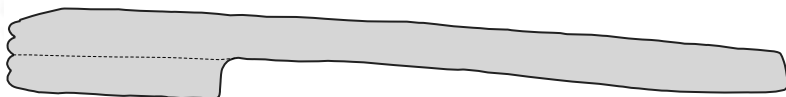
ICE II B14



三重弧文



四重弧文

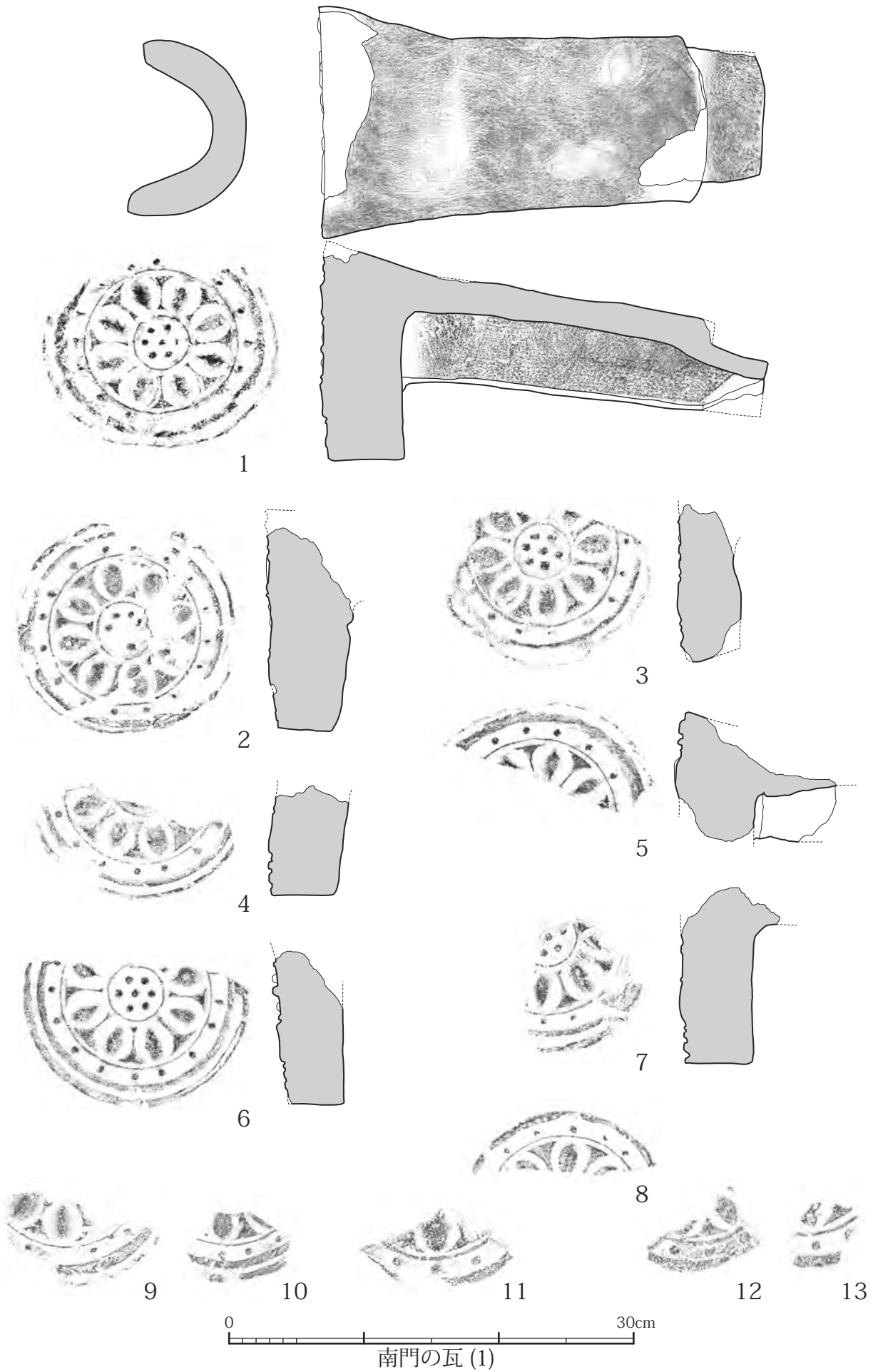


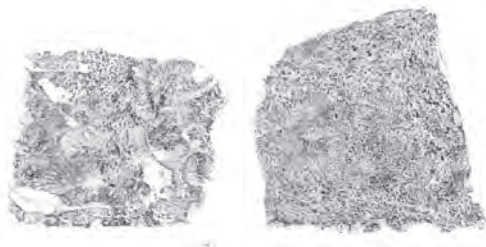
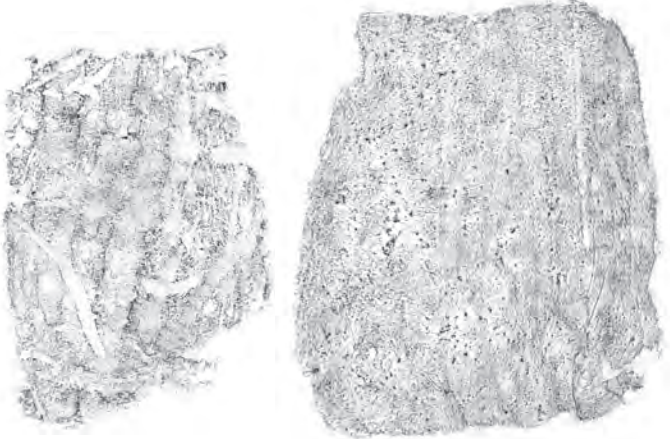
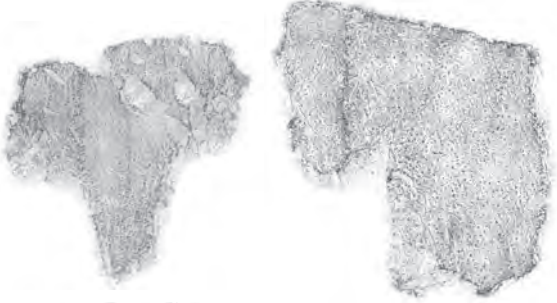
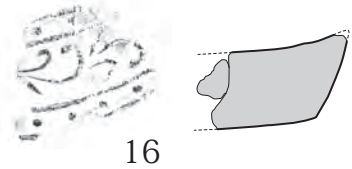
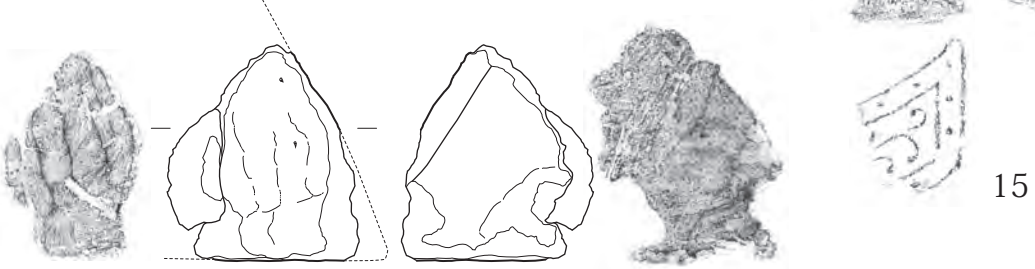
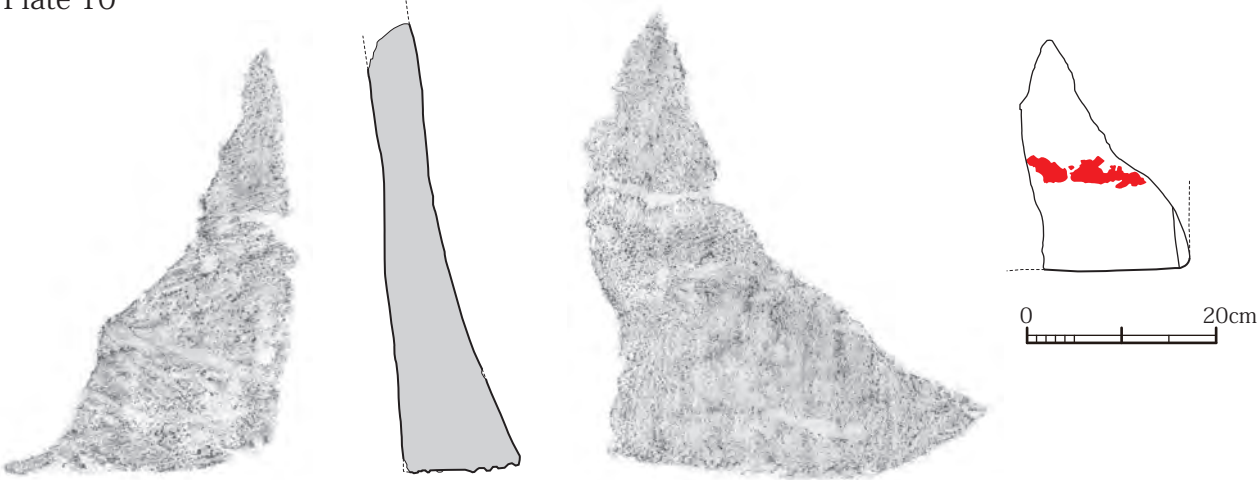
その他



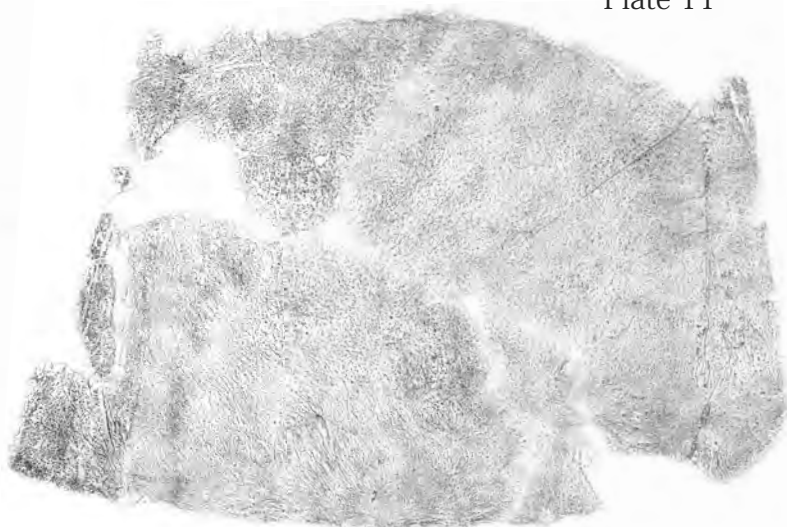
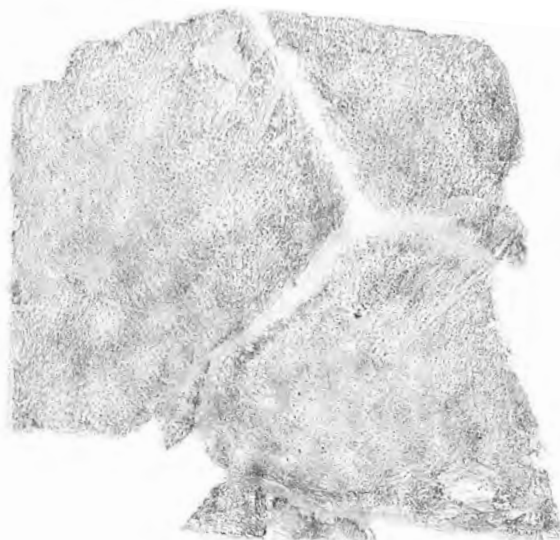
伊勢国分寺跡軒平瓦型式 (3)



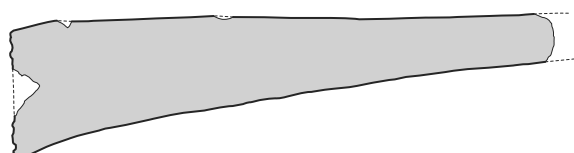




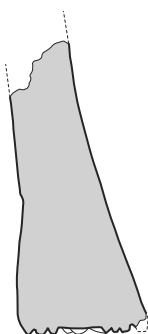
南門の瓦 (2)



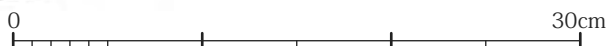
20



21



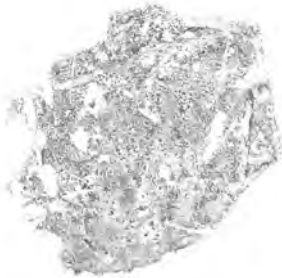
22



南門の瓦 (3)



23



24



25



26



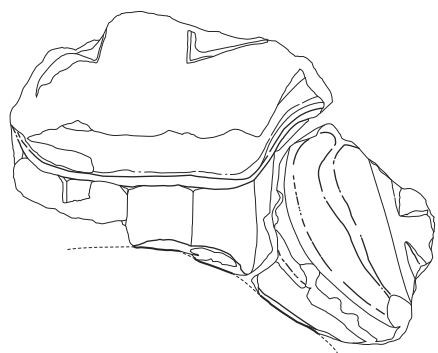
27



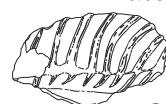
28



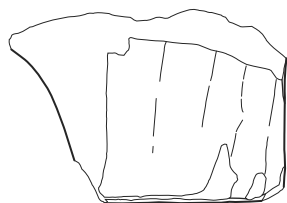
南門の瓦 (4)



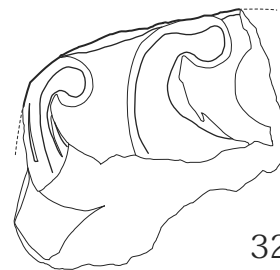
29



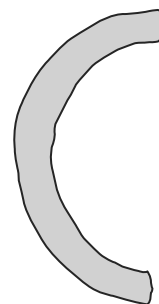
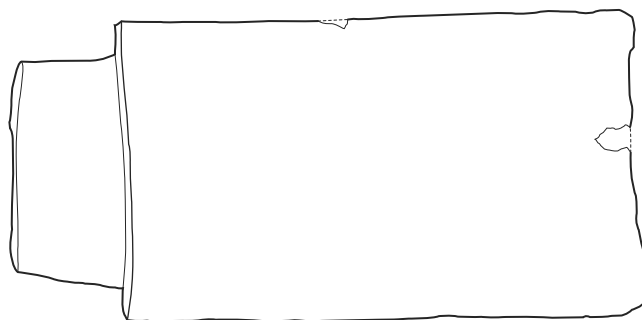
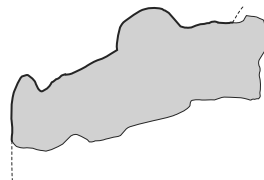
31



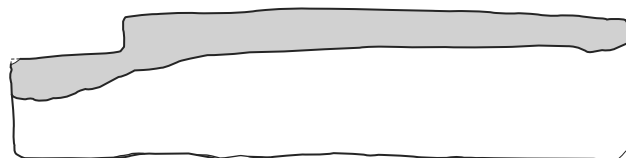
30



32

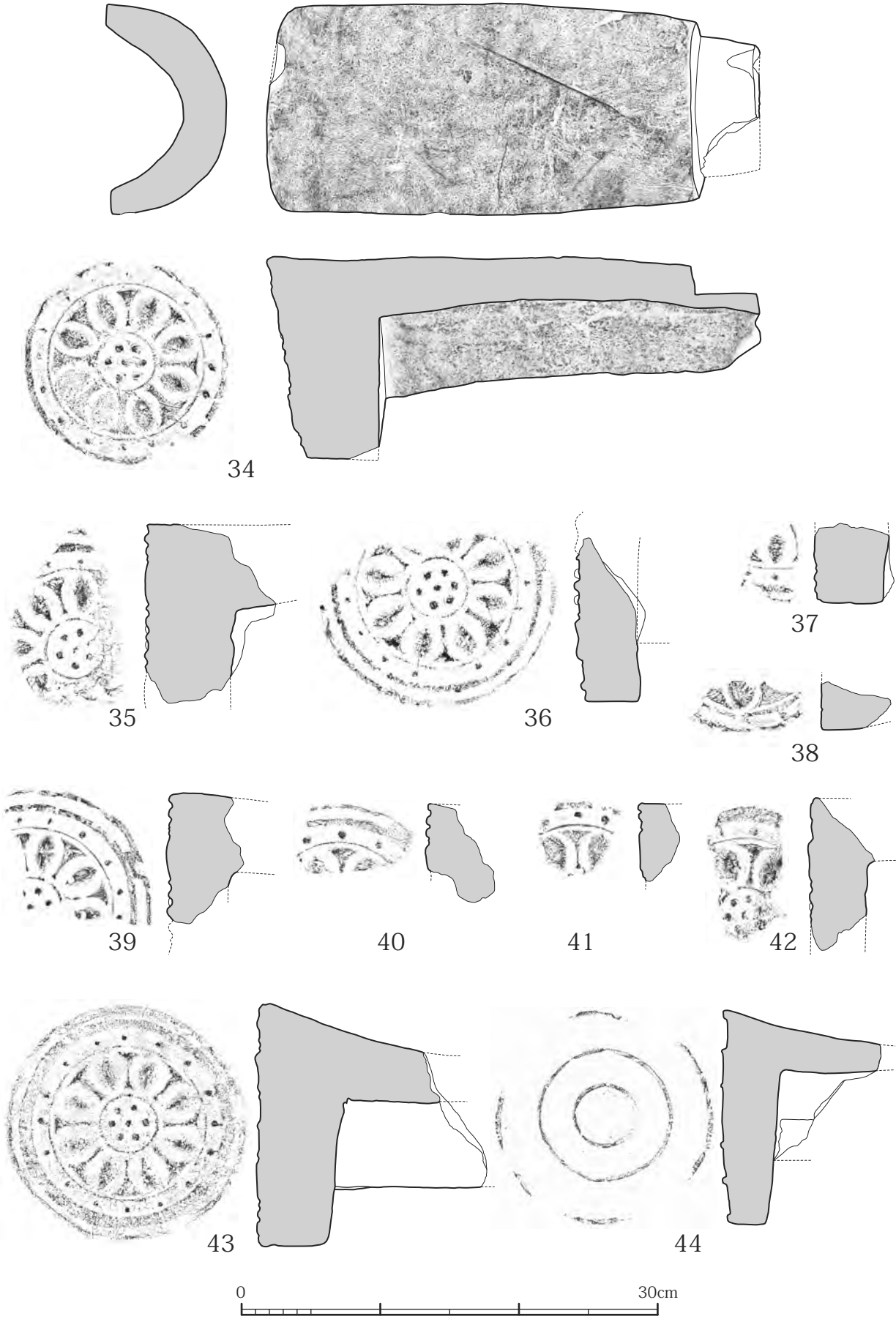


33

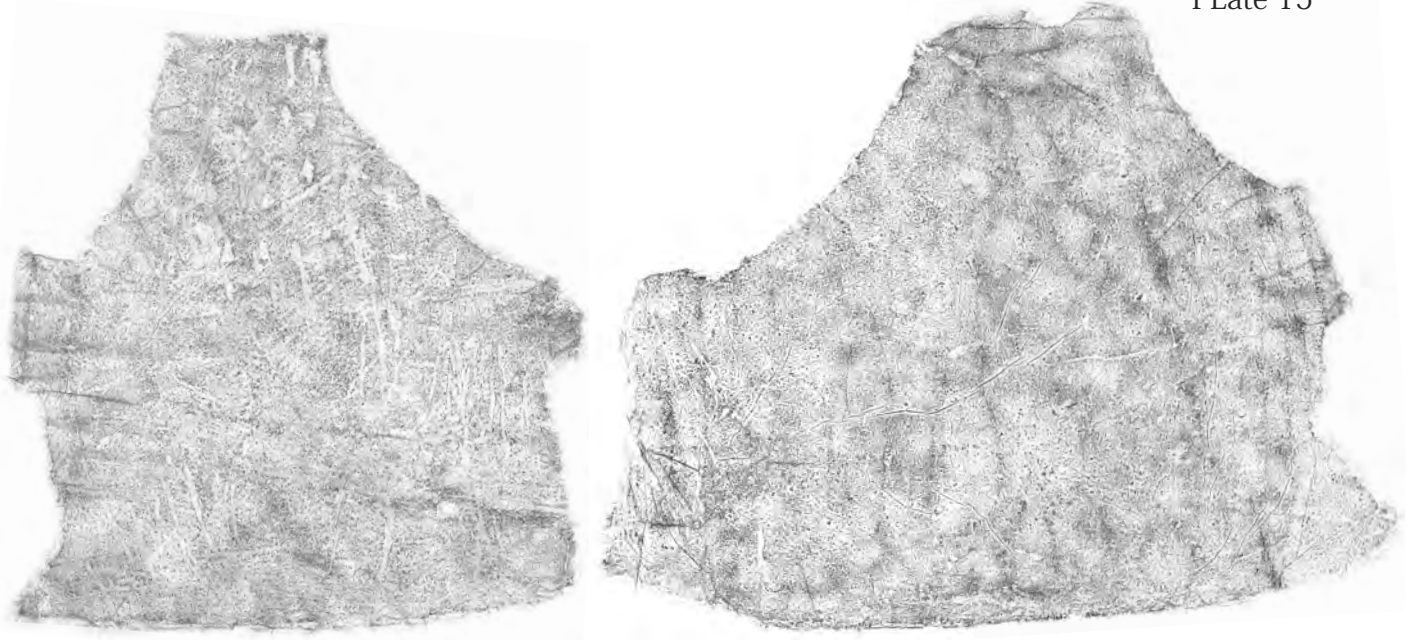


南門の瓦 (5)

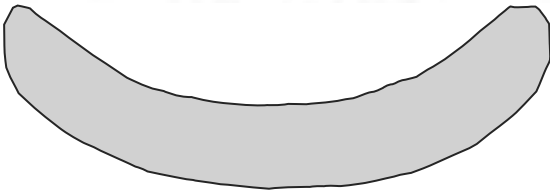
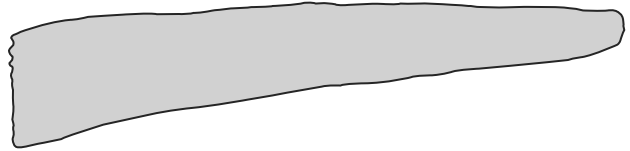




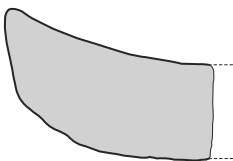
中門の瓦 (1)



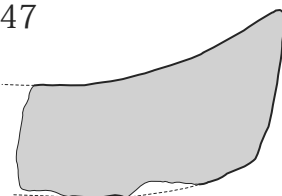
45



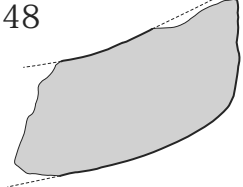
46



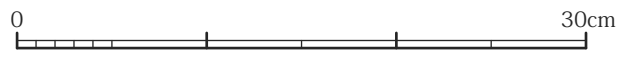
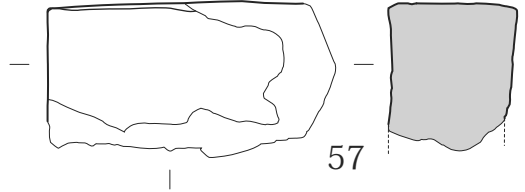
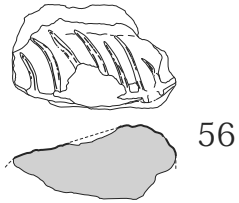
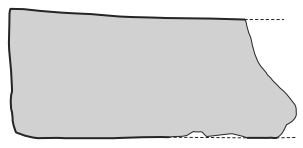
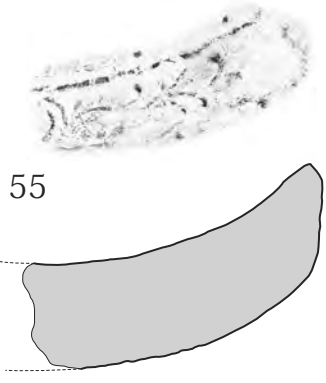
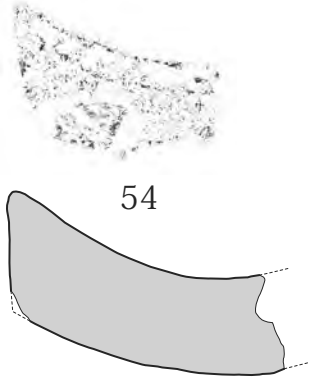
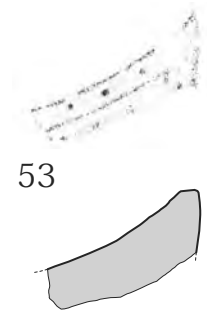
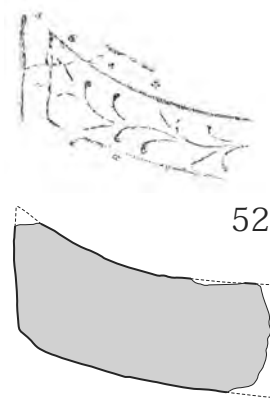
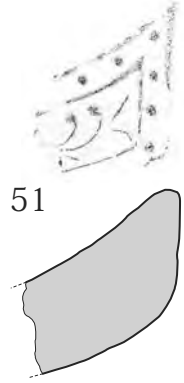
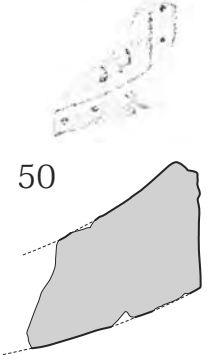
47



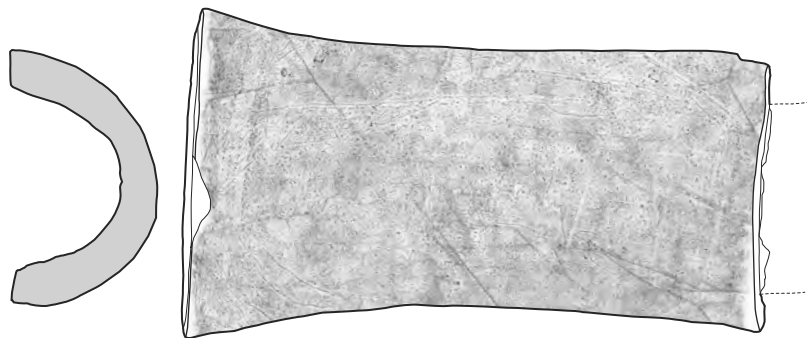
48



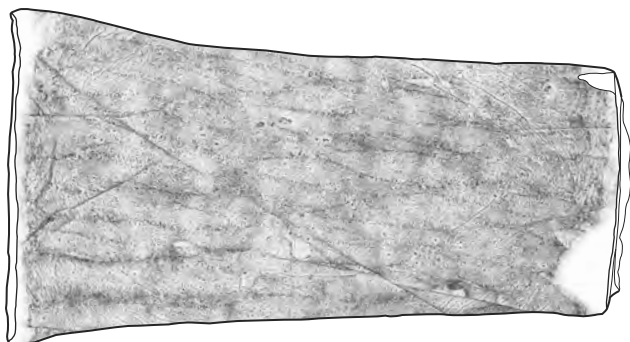
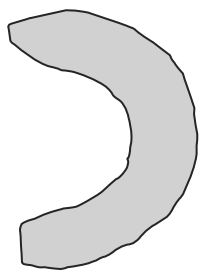
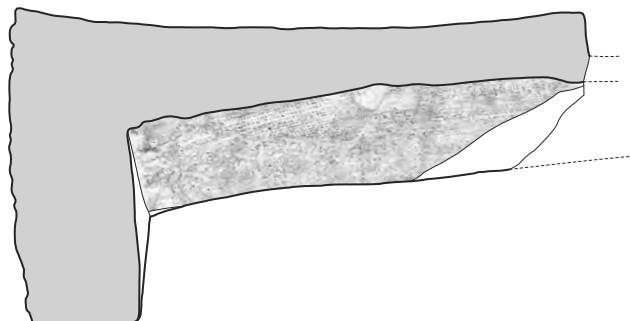
中門の瓦 (2)



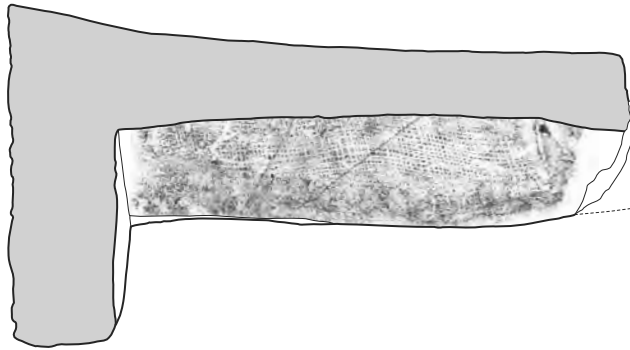
中門の瓦罨



58



59



60



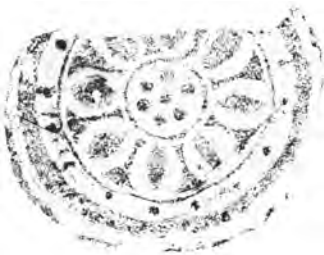
61



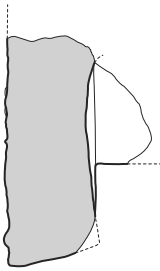
62



回廊の瓦 (1)



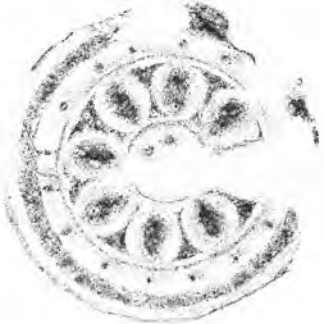
63



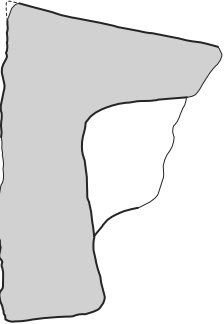
64



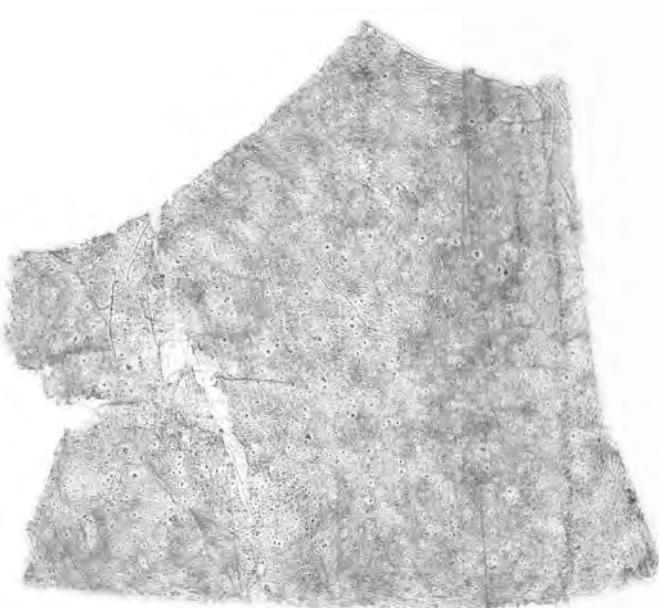
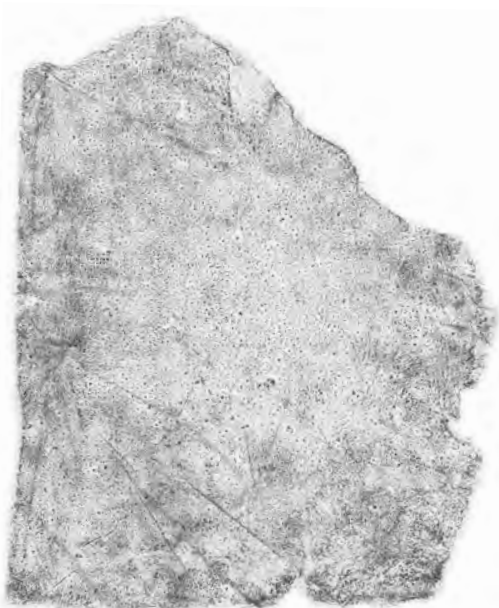
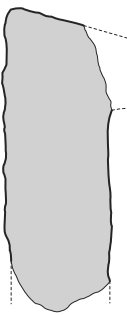
65



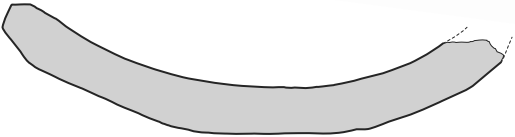
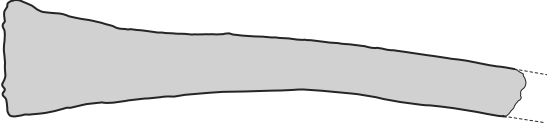
66



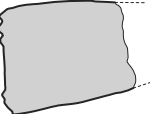
67



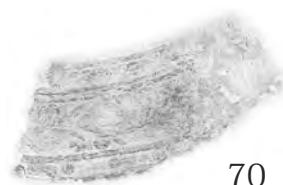
68



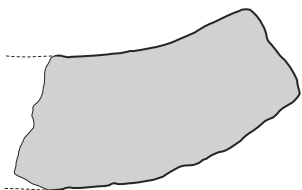
69



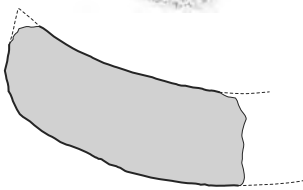
回廊の瓦 (2)



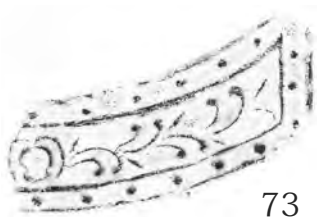
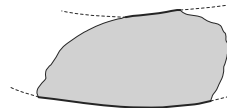
70



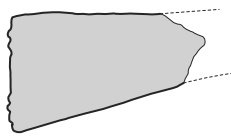
71



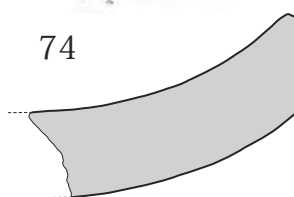
72



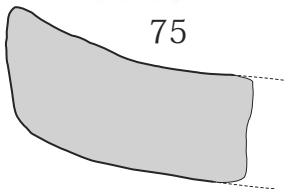
73



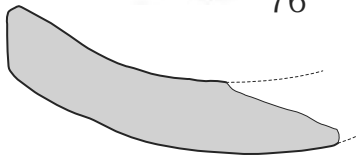
74



75



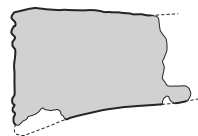
76



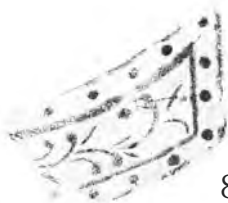
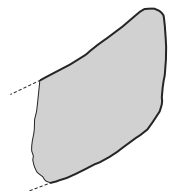
77



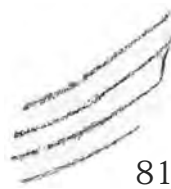
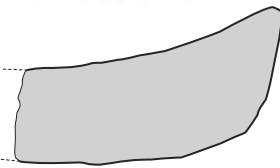
78



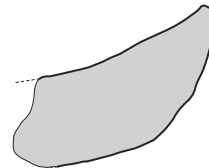
79



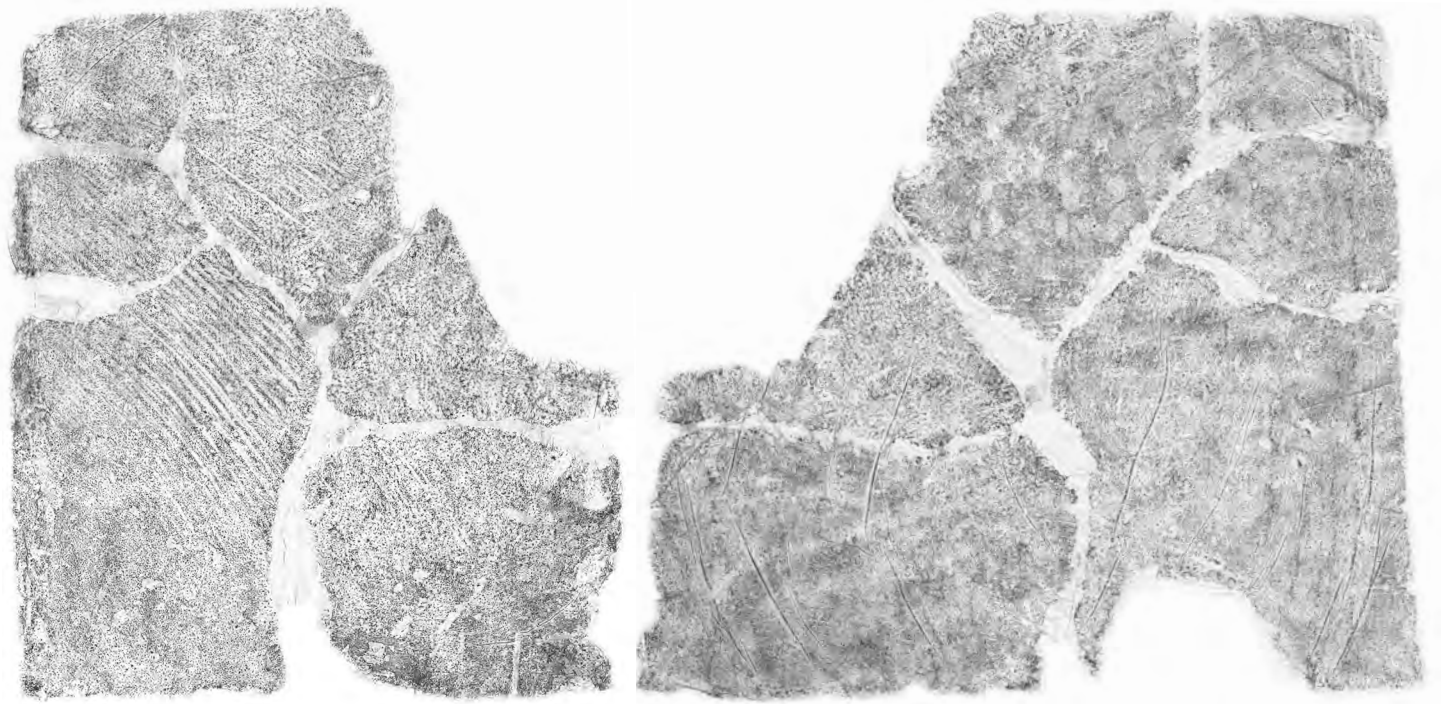
80



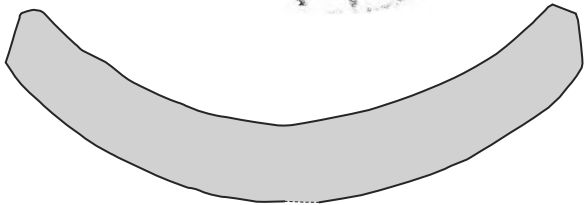
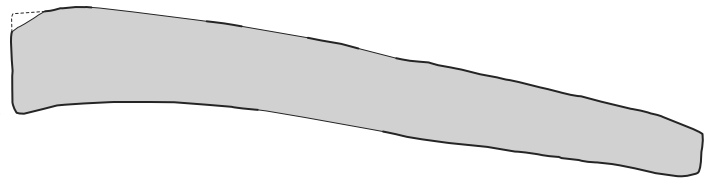
81



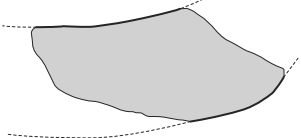
回廊の瓦 (3)



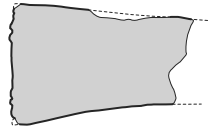
82



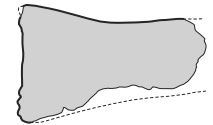
84



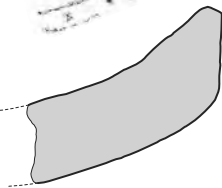
83



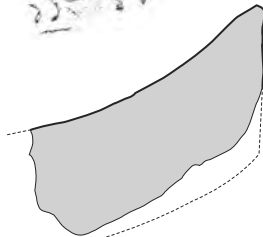
85



86



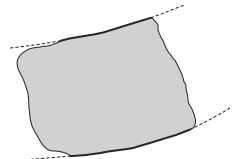
87



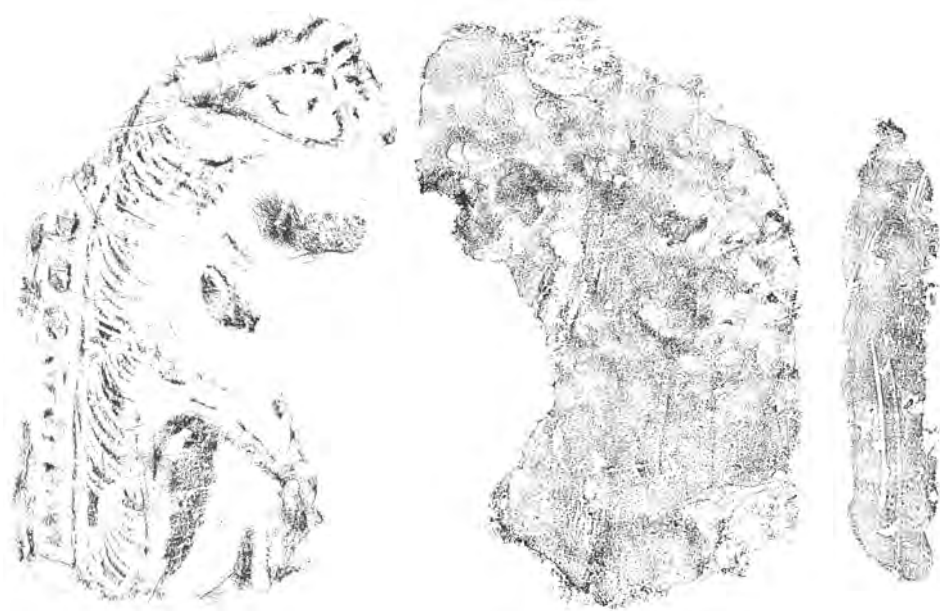
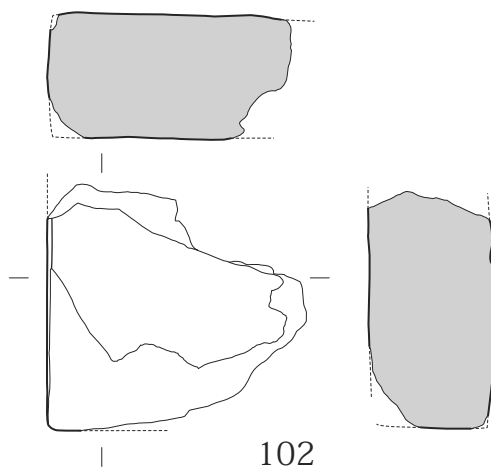
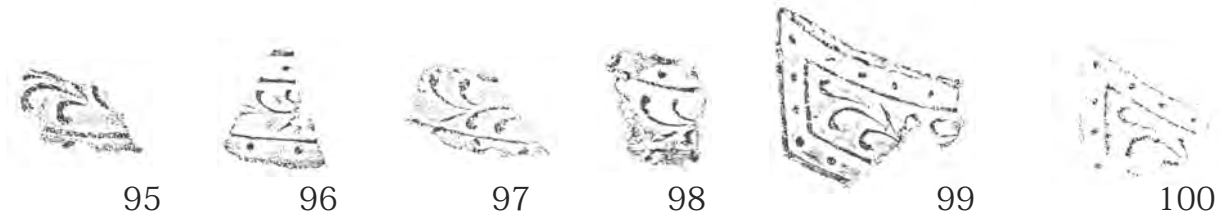
88



89

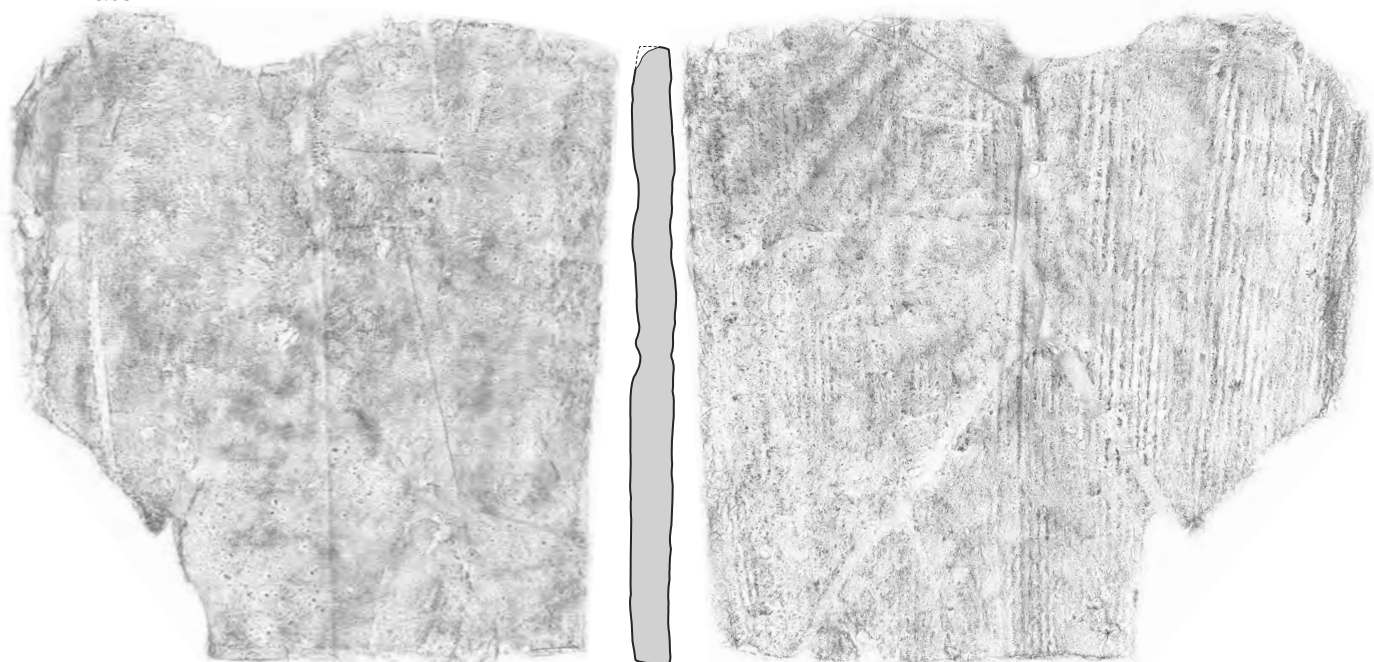


回廊の瓦 (4)

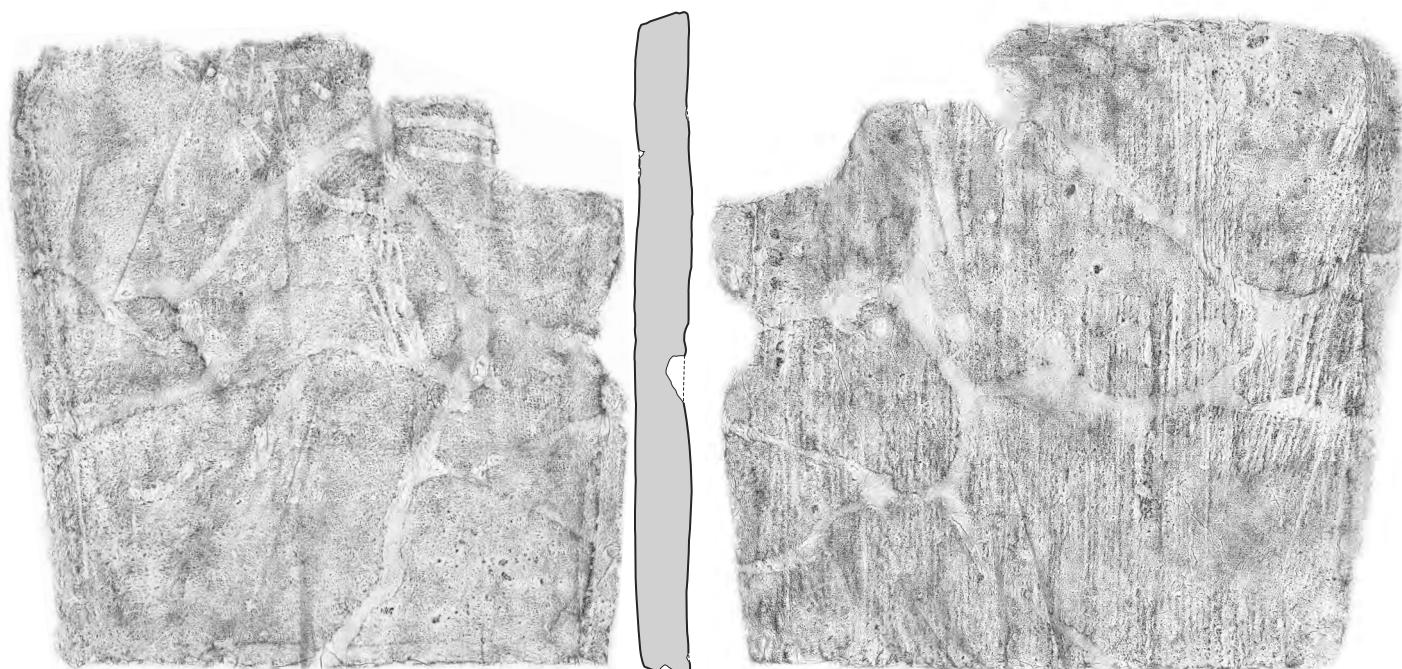
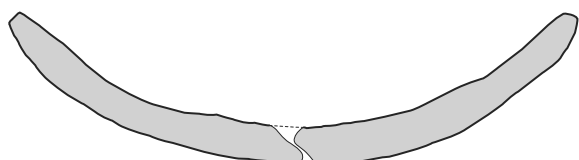


回廊の瓦博

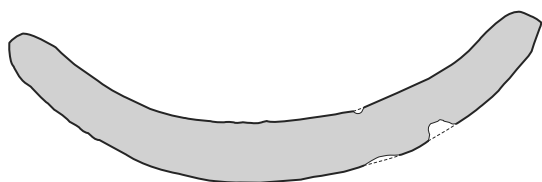




103



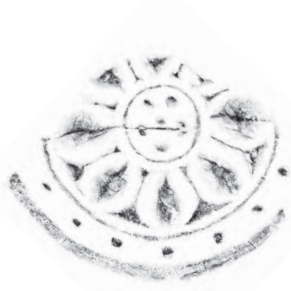
104



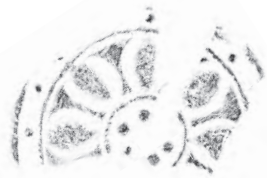
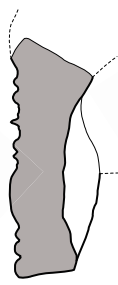
105



回廊の瓦 (5)



106



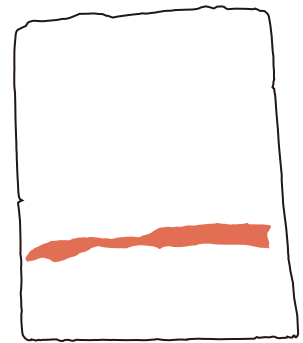
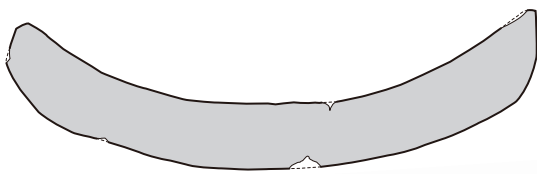
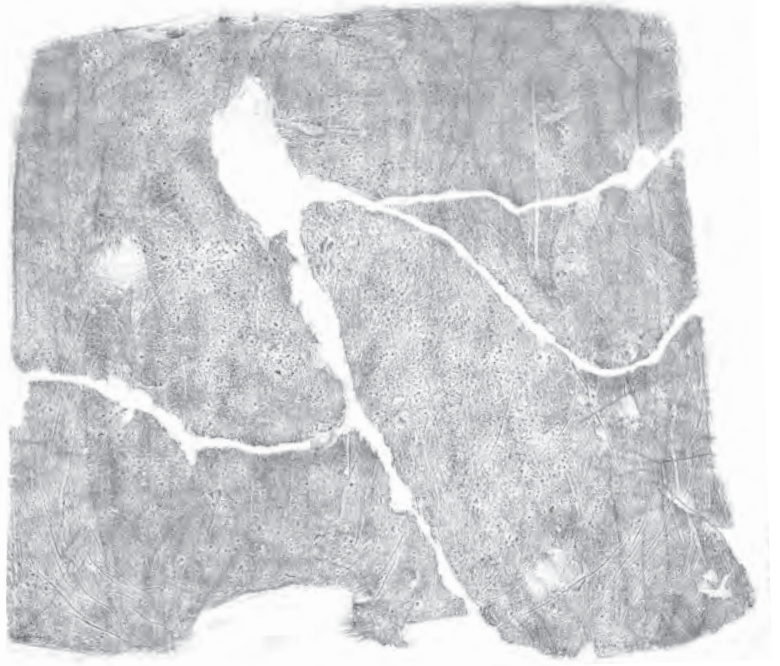
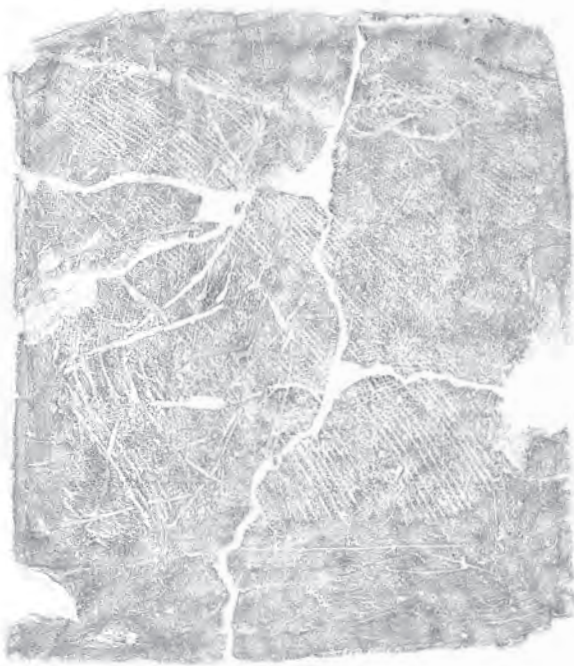
107



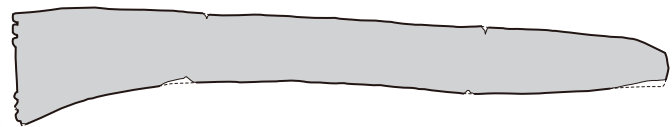
119



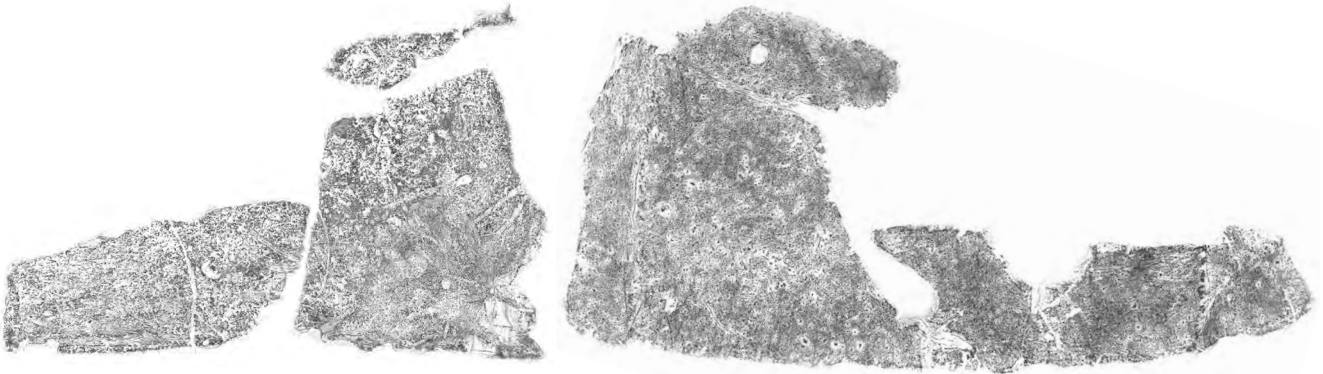
108



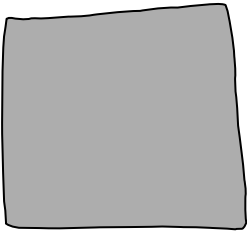
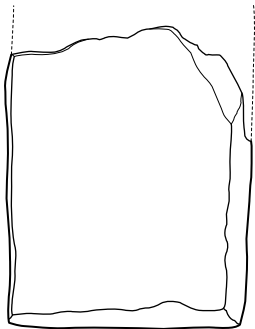
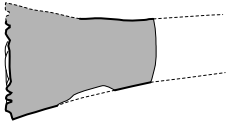
109



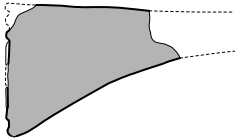
金堂の瓦 (1)



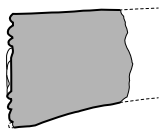
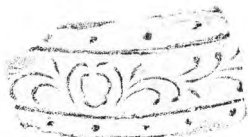
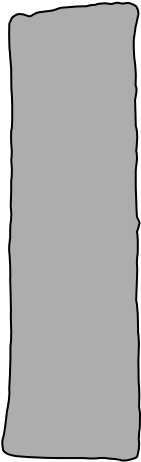
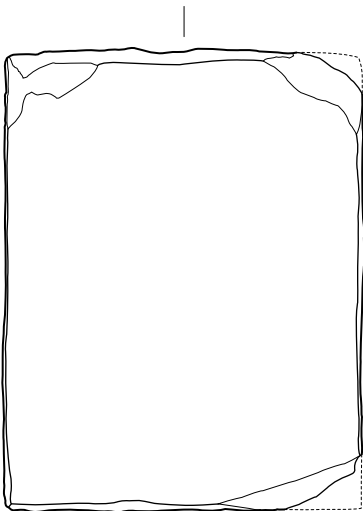
110



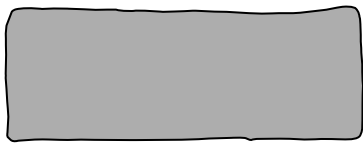
113



111



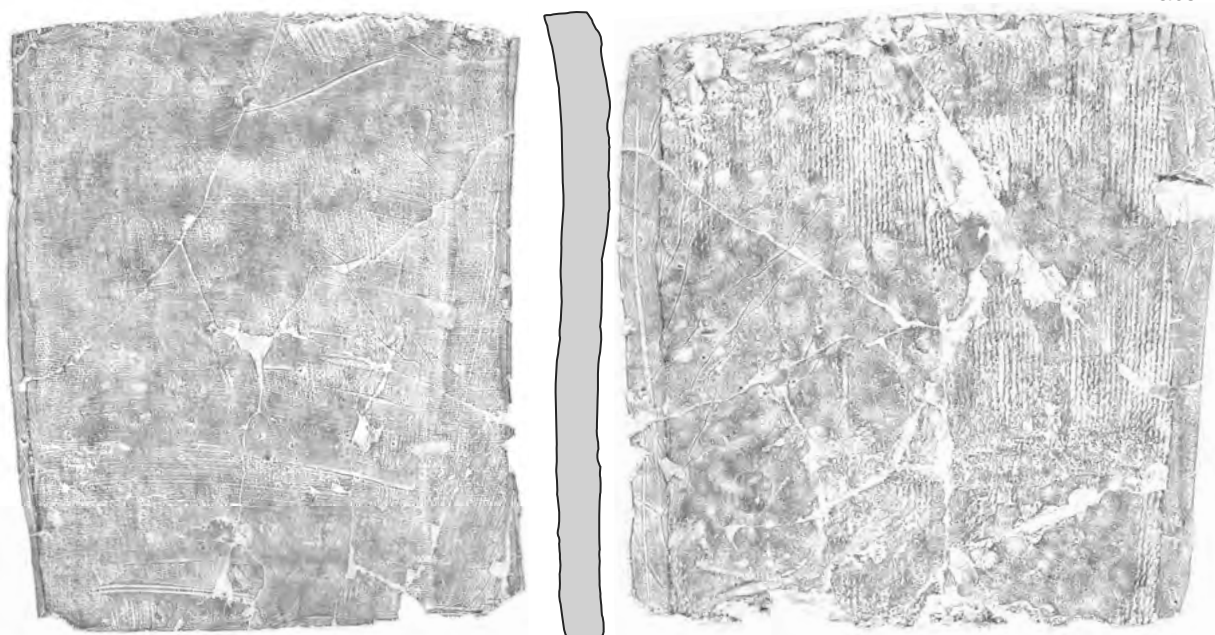
112



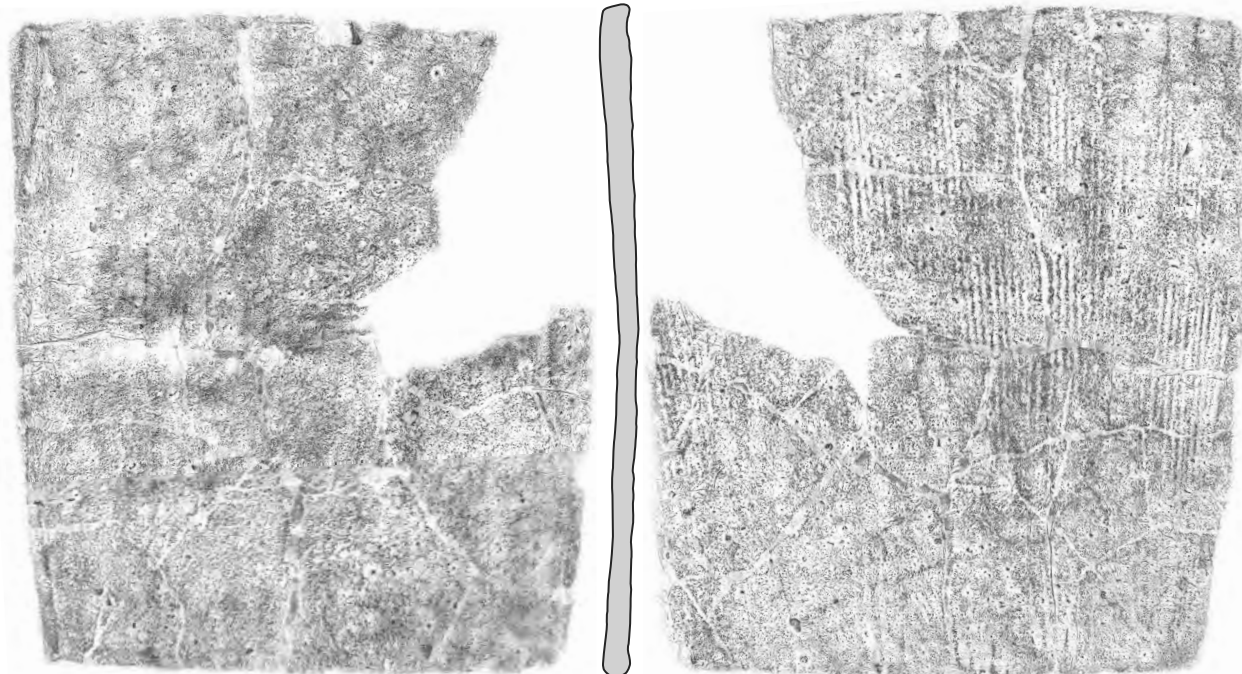
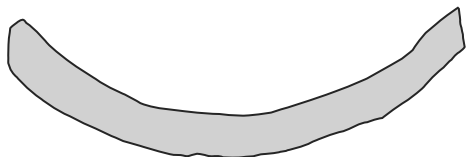
114



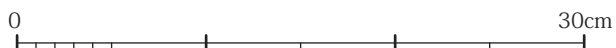
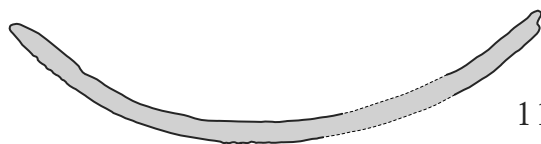
金堂の瓦磚



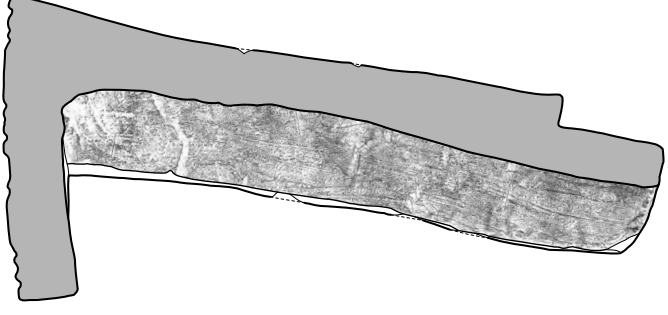
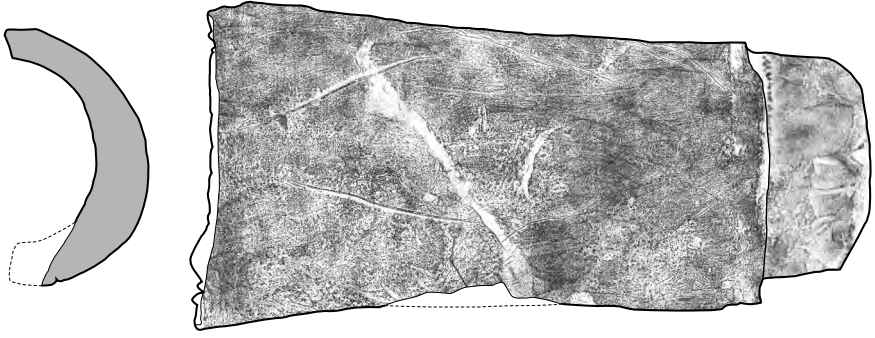
115



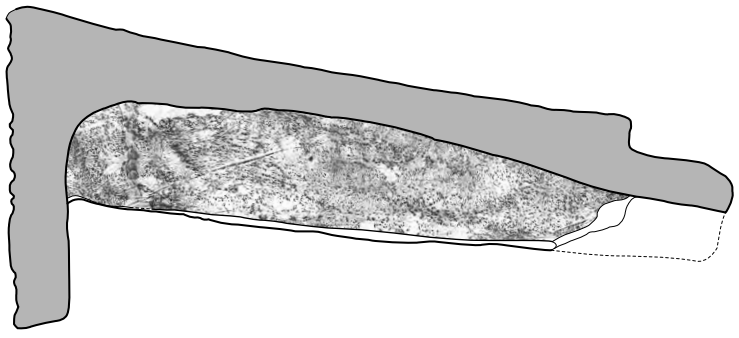
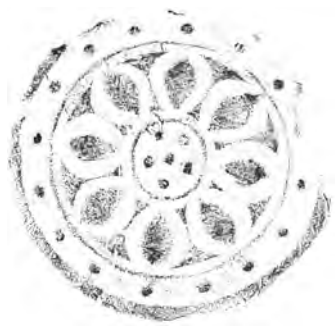
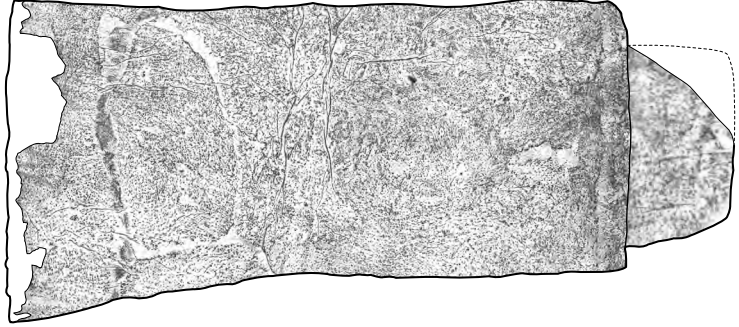
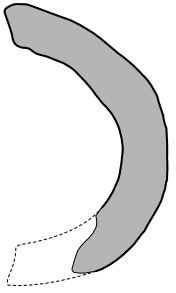
116



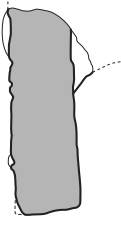
金堂の瓦 (2)



117



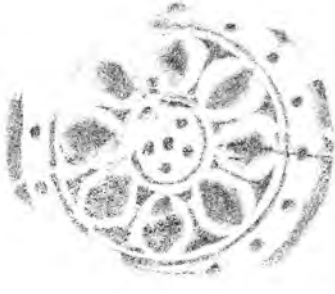
118



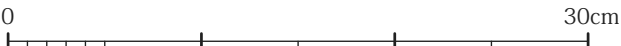
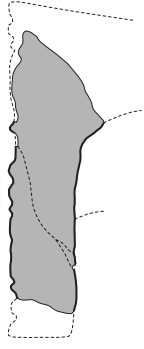
204



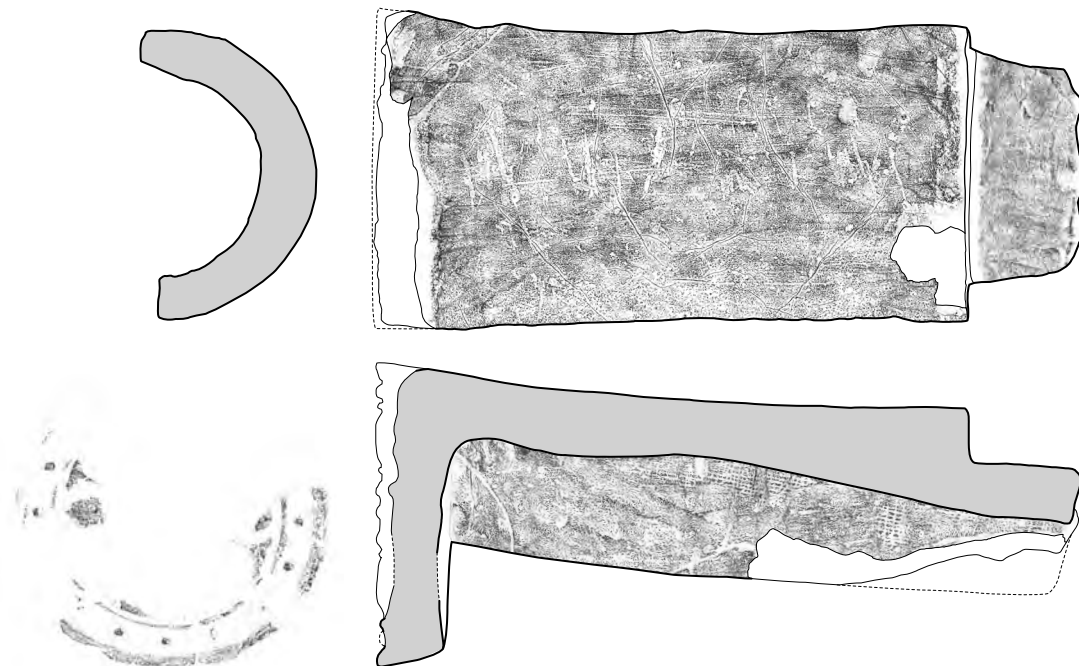
120



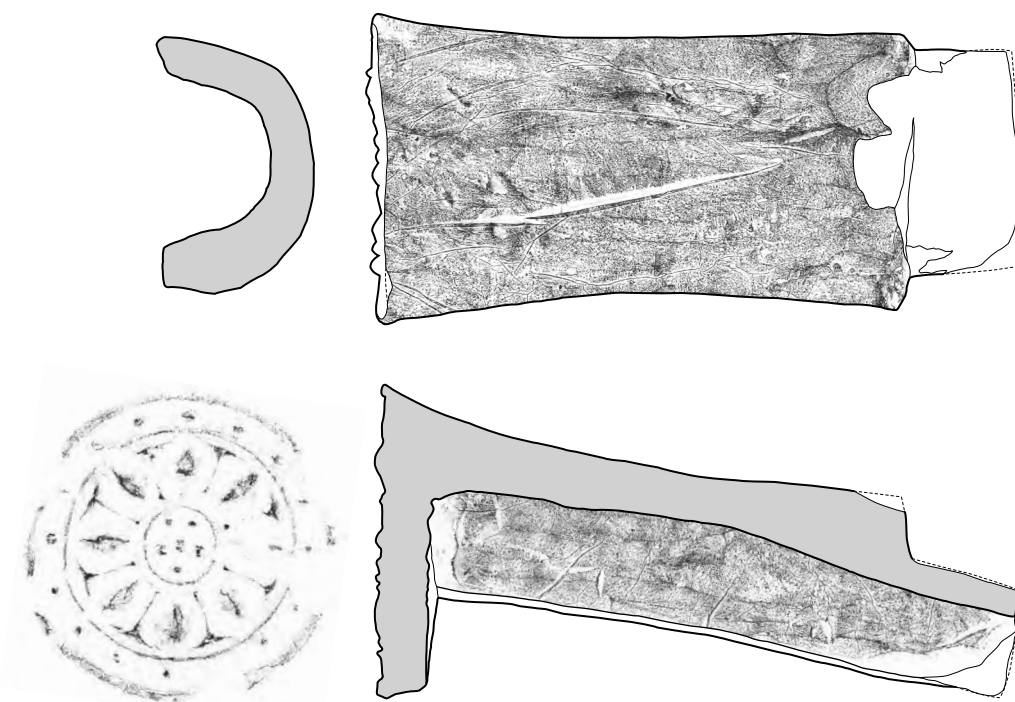
121



講堂の瓦 (1)



122



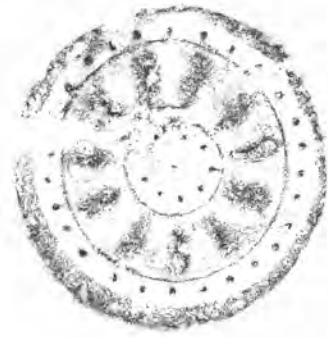
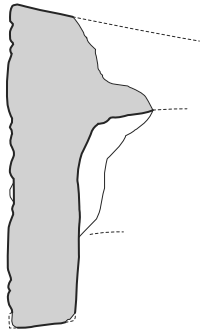
123



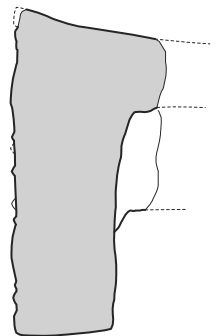
講堂の瓦 (2)



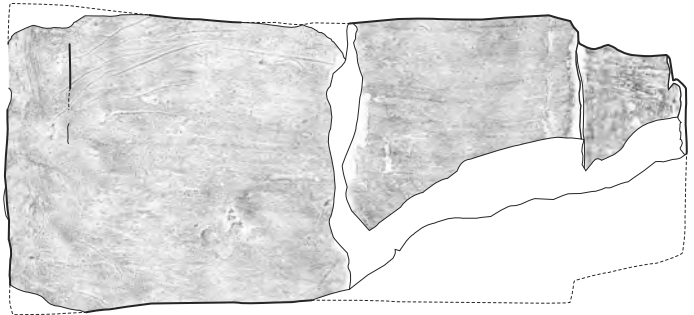
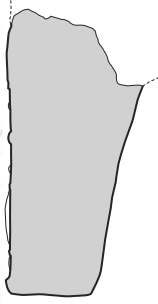
124



125



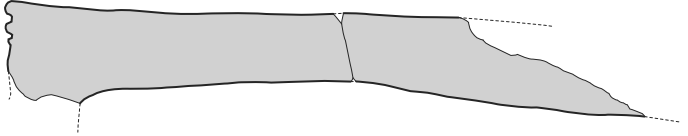
126



127



128



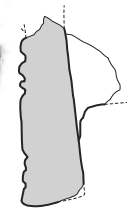
129



130



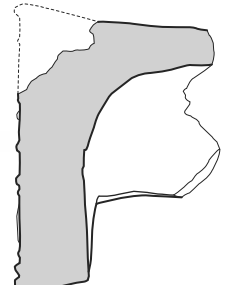
131



132



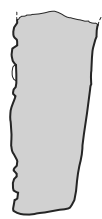
133



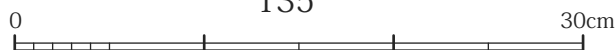
134



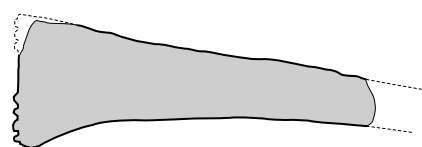
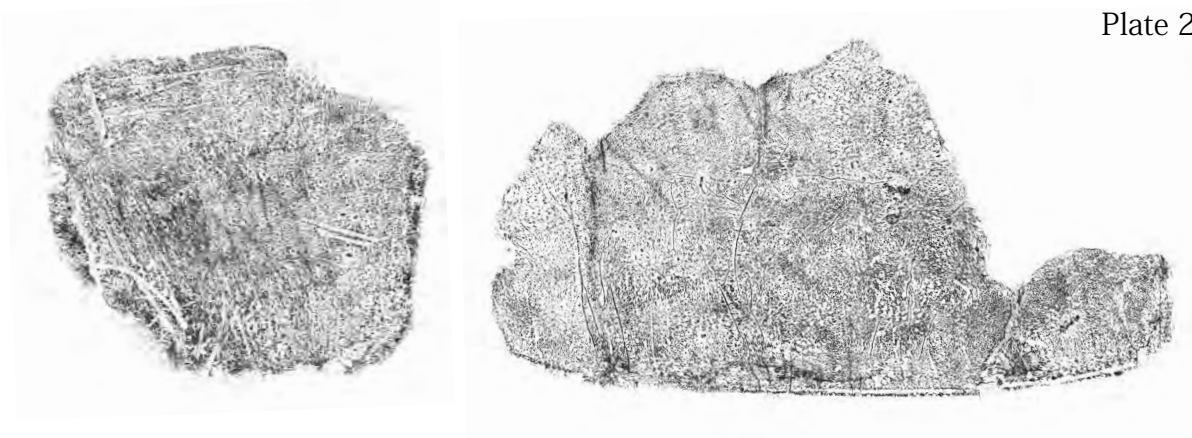
135



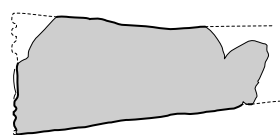
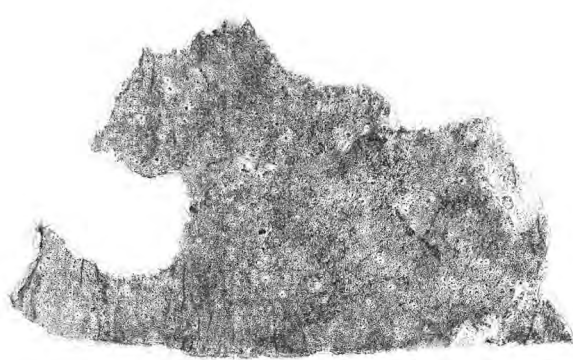
136



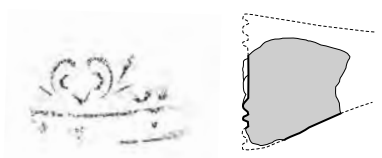
講堂の瓦 (3)



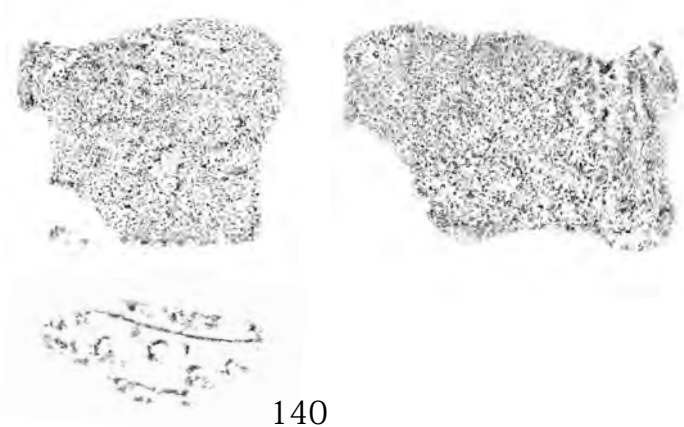
137



138



139

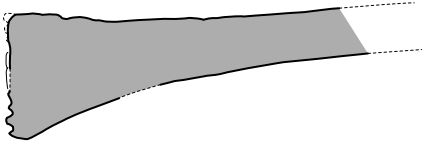


140

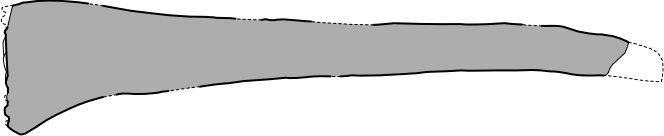
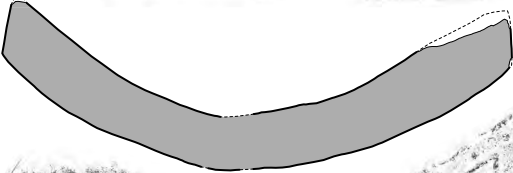
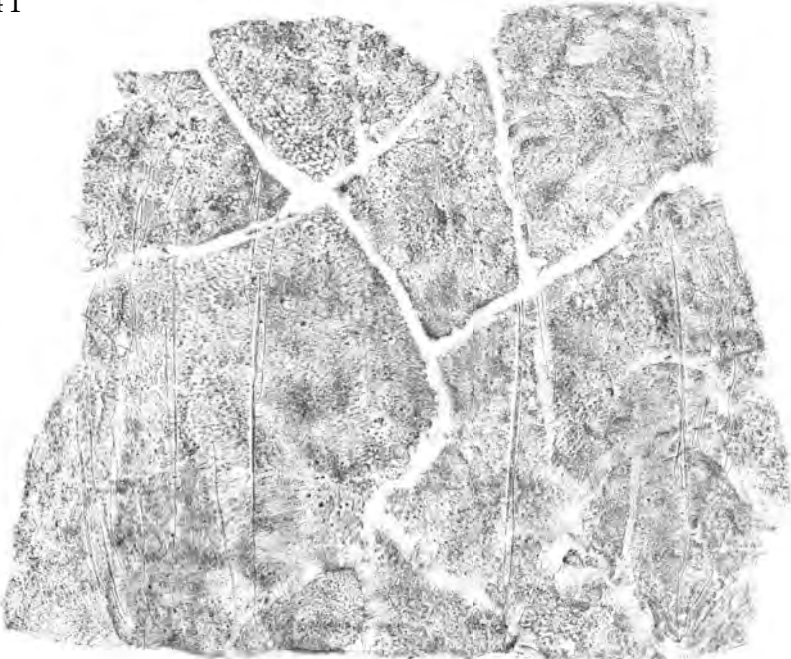
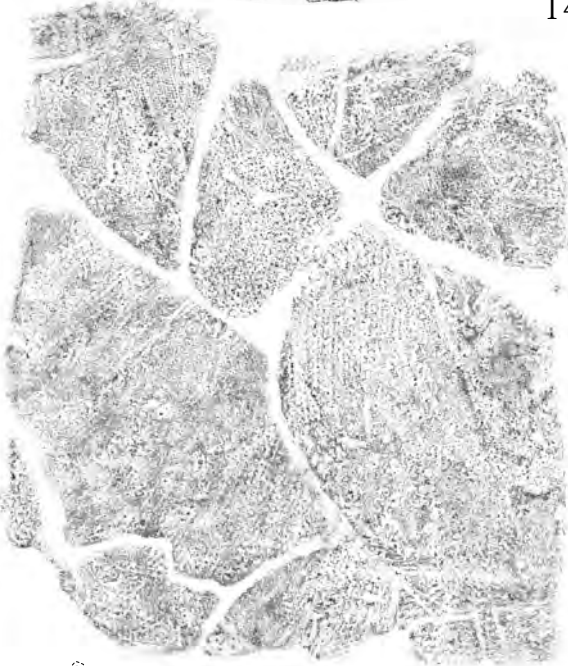


講堂の瓦 (4)

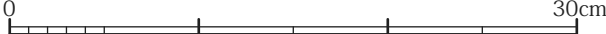




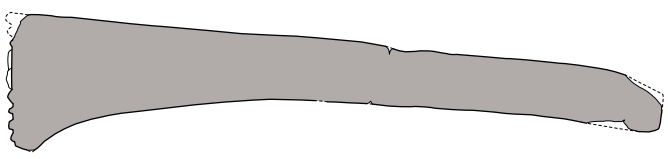
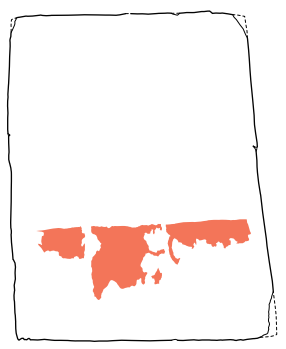
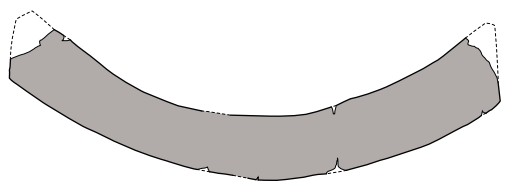
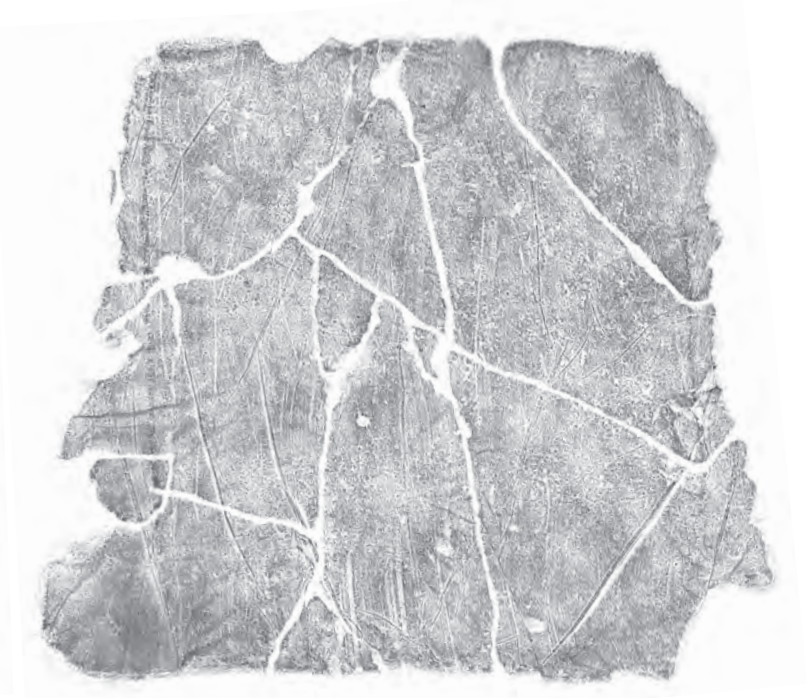
141



142



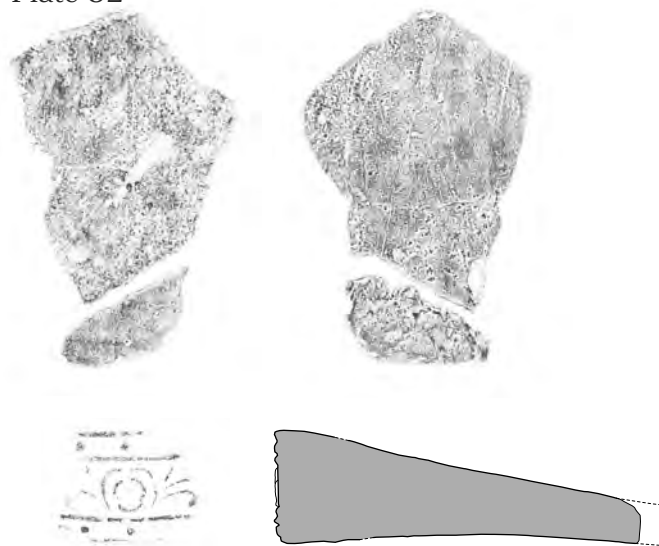
講堂の瓦 (5)



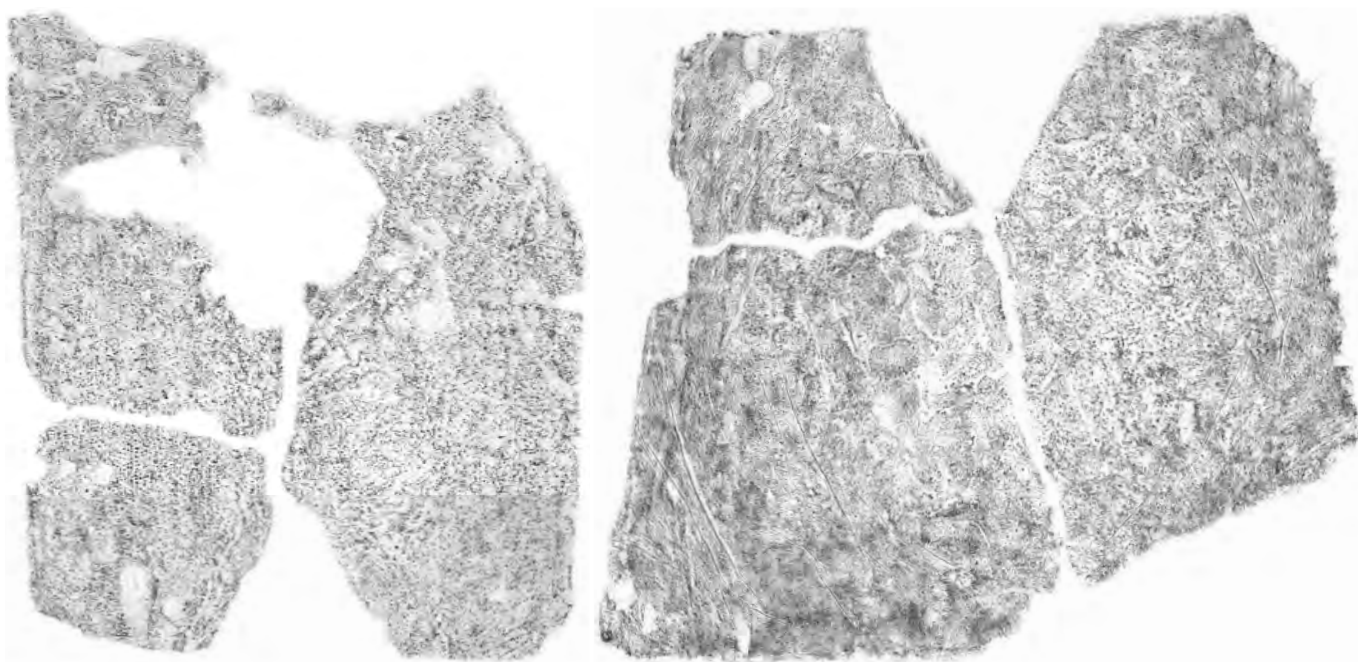
143



講堂の瓦 (6)



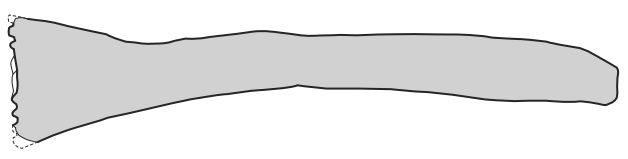
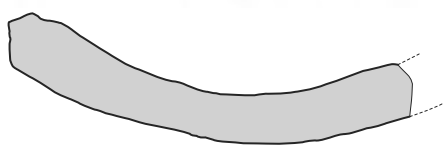
144



145



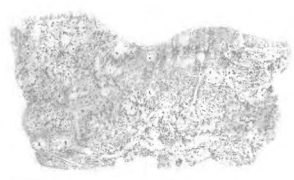
講堂の瓦 (7)



146



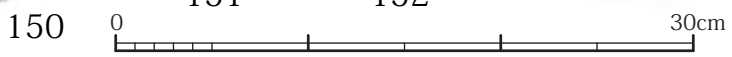
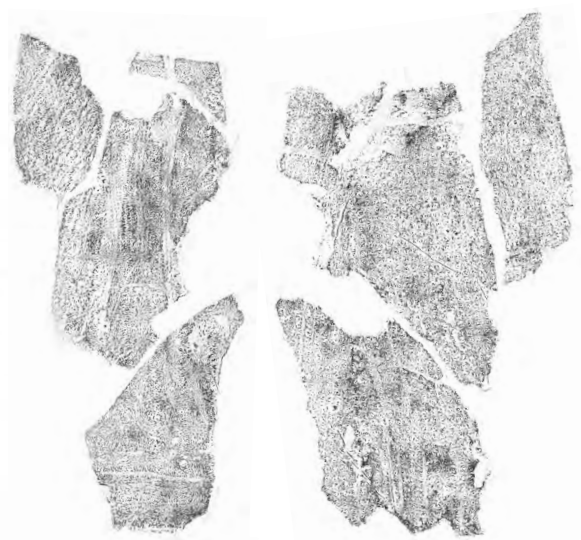
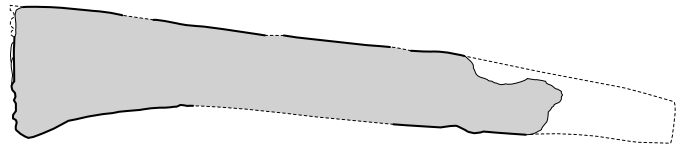
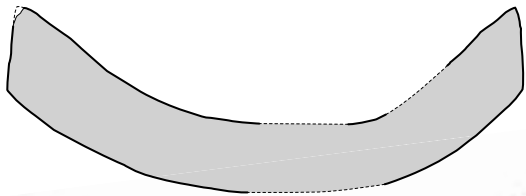
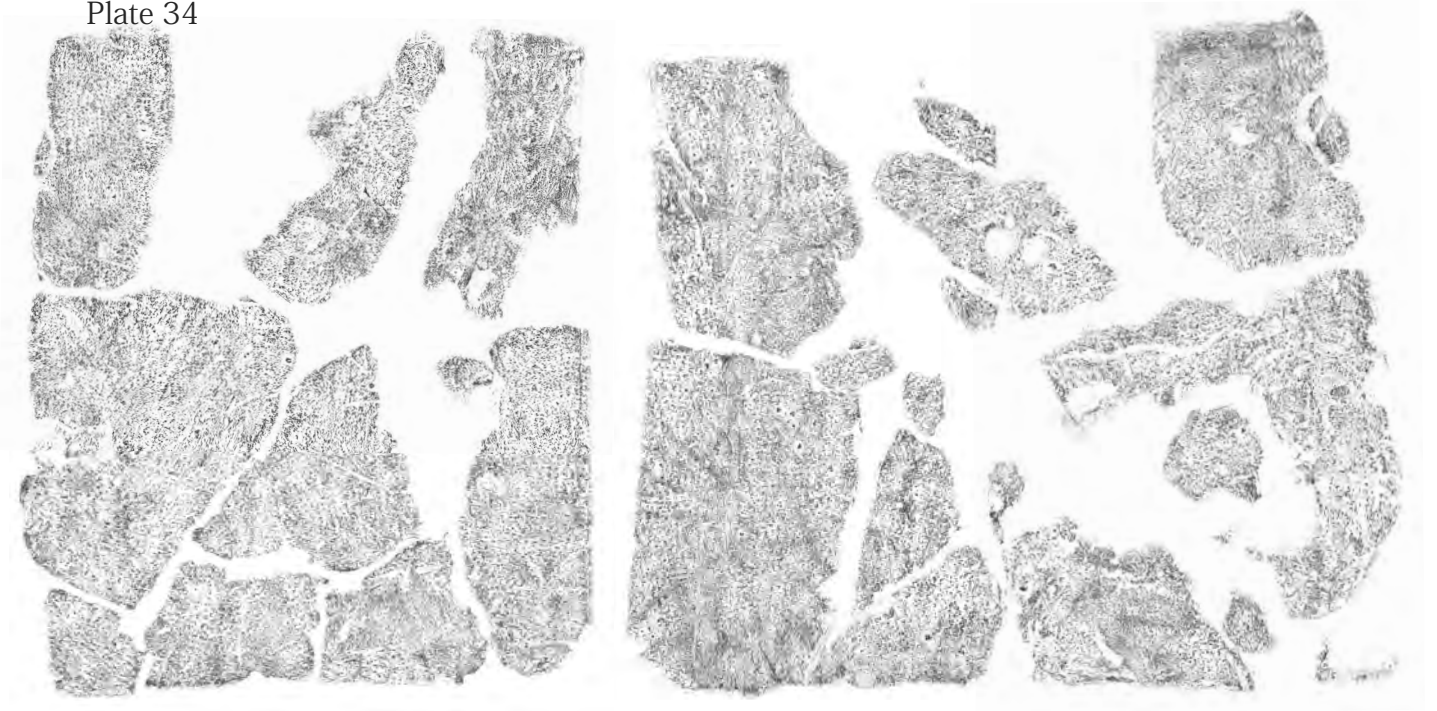
147



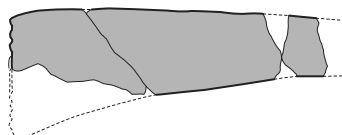
148



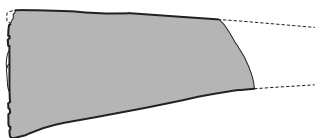
講堂の瓦 (8)



講堂の瓦 (9)



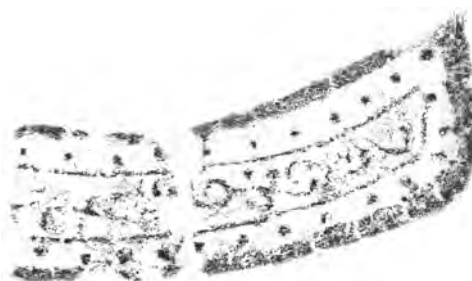
154



155



156



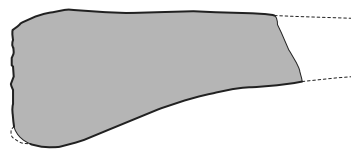
157



158



159



講堂の瓦 (10)



160



161



162



163



164



165



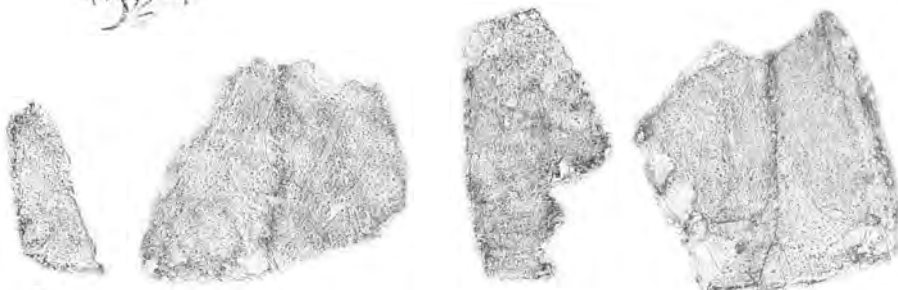
166



167



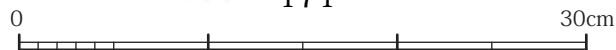
168



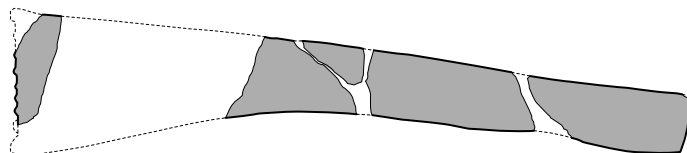
170



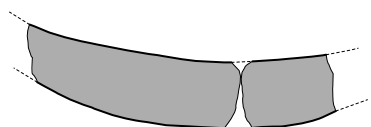
171



講堂の瓦(11)



172



173

174



175

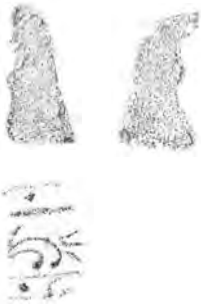
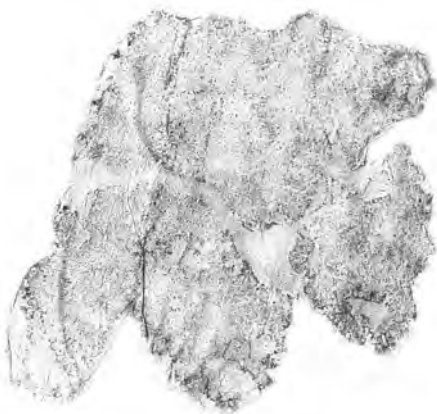
176

177



講堂の瓦 (12)





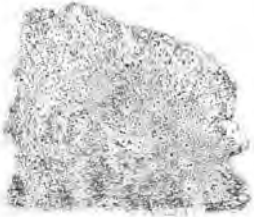
179



178



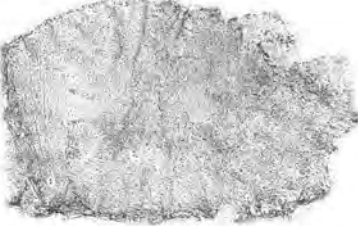
180



181



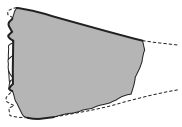
183



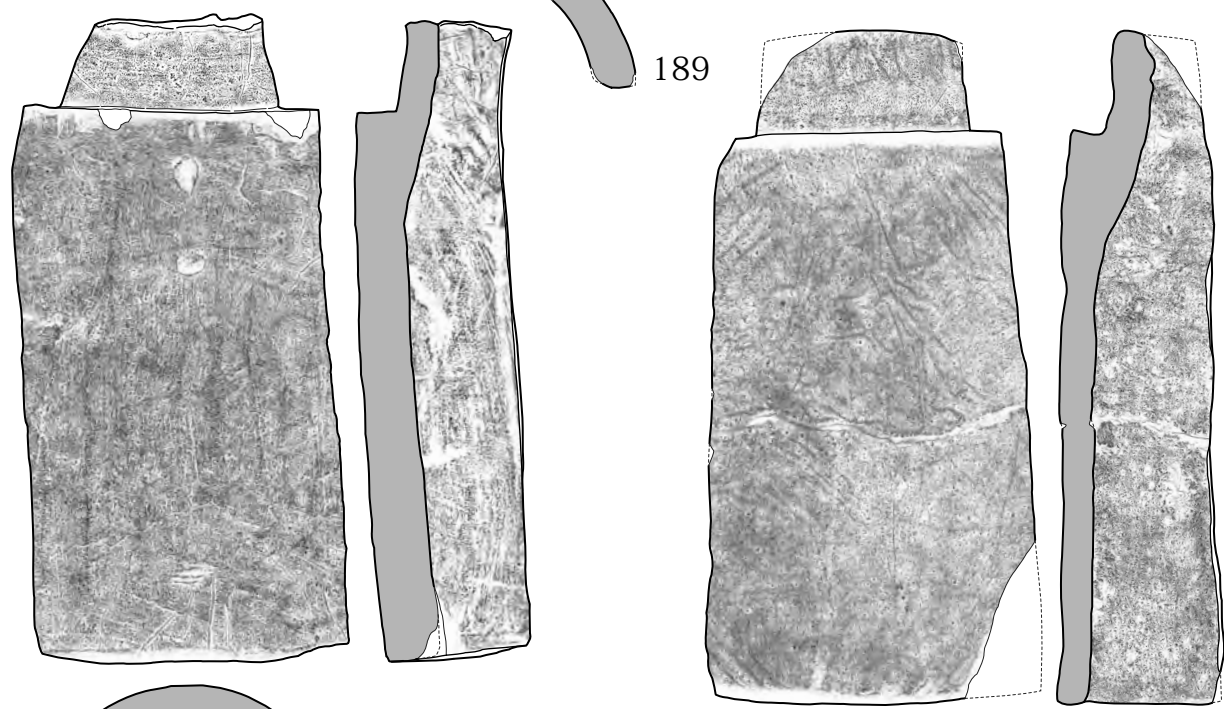
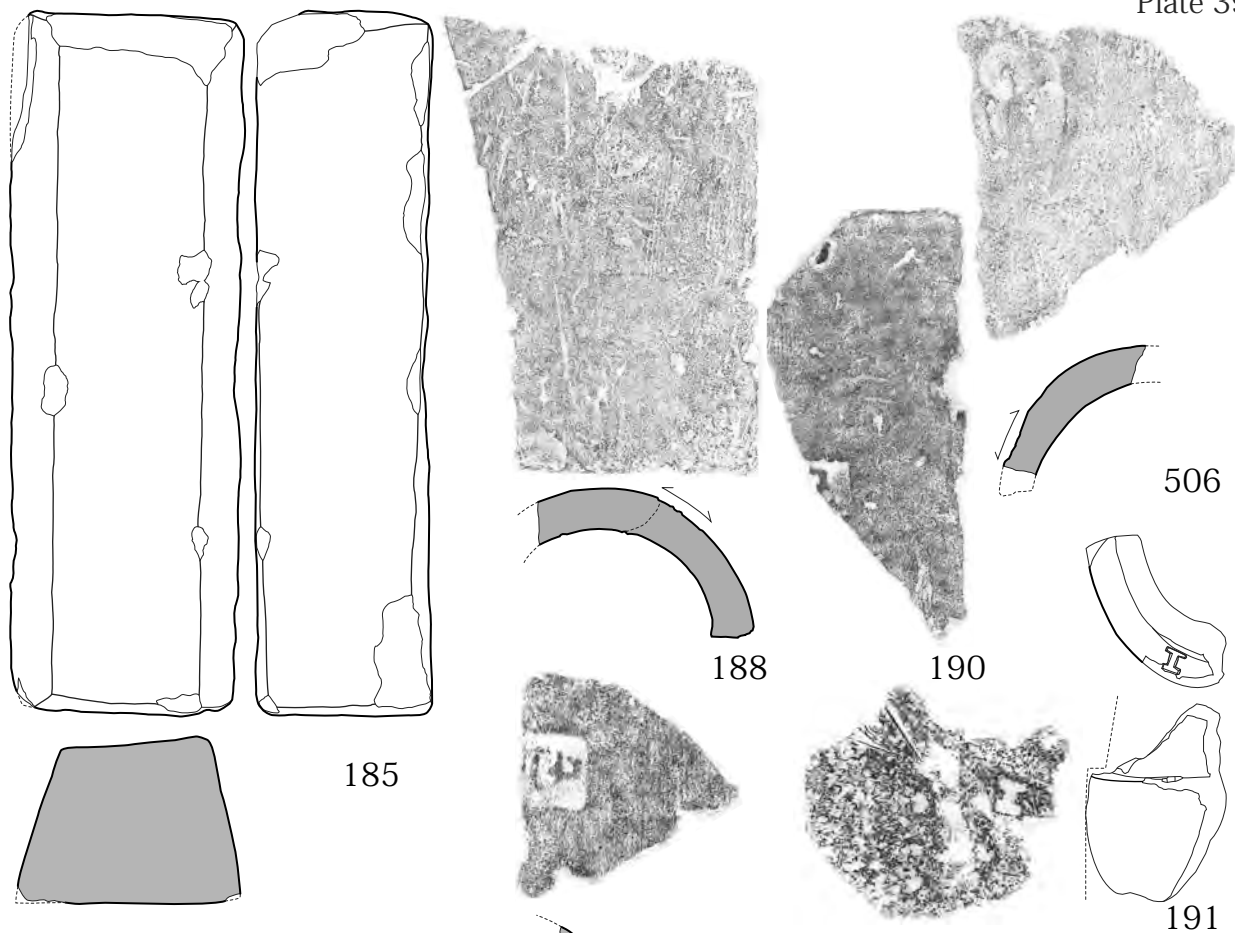
182



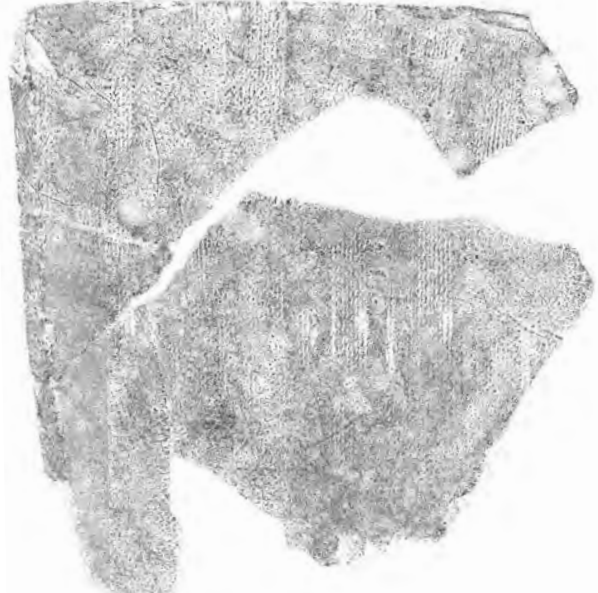
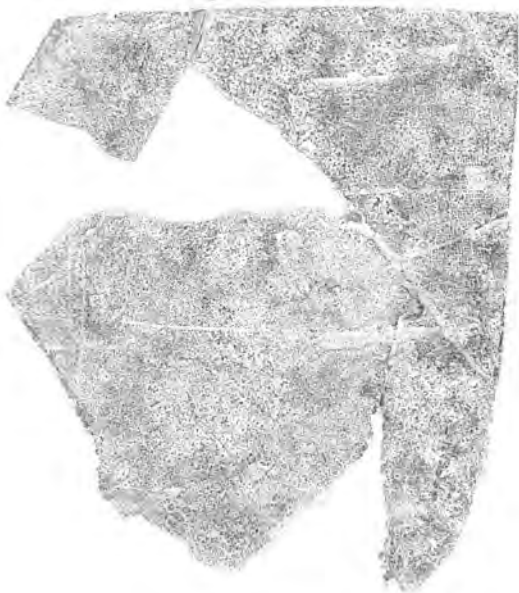
184



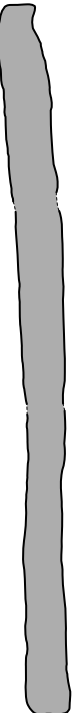
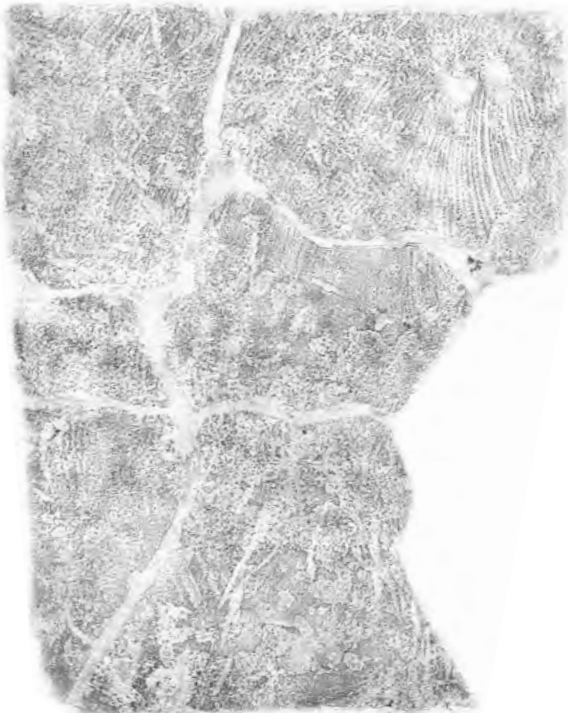
講堂の瓦 (13)



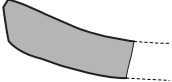
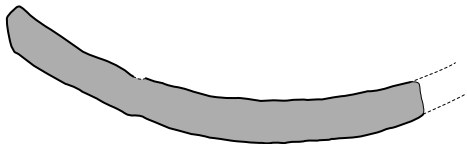
講堂の瓦埴



192



193



194



323



392



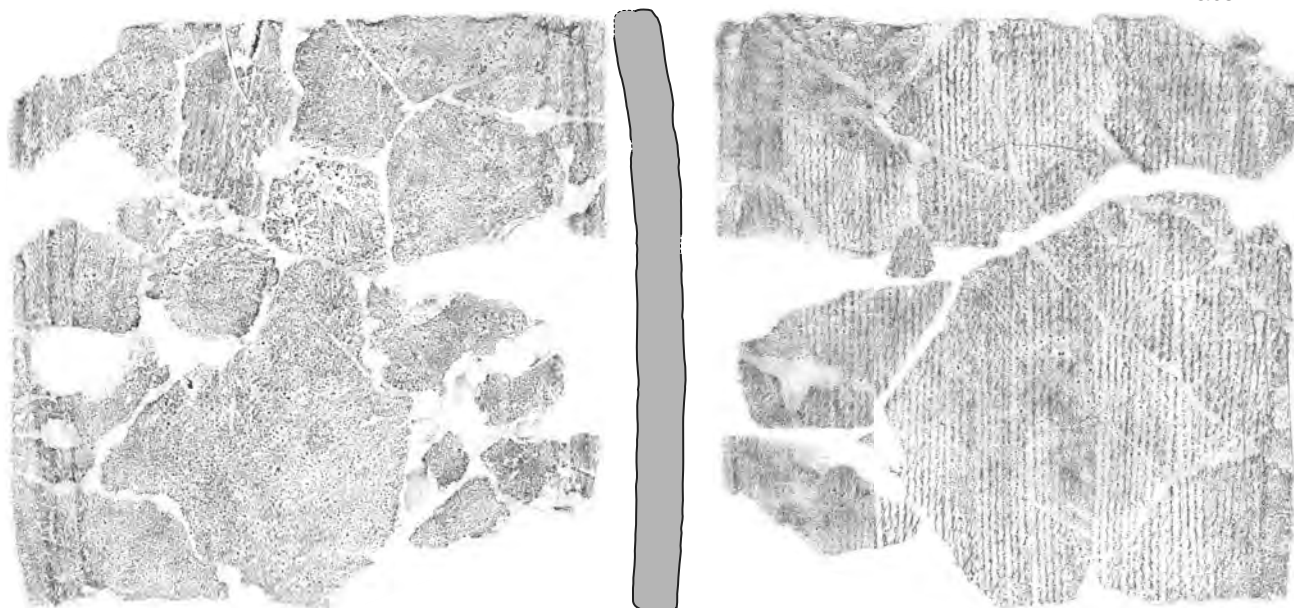
195



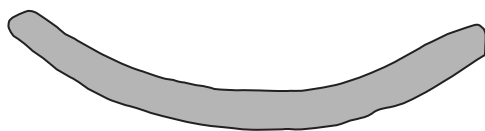
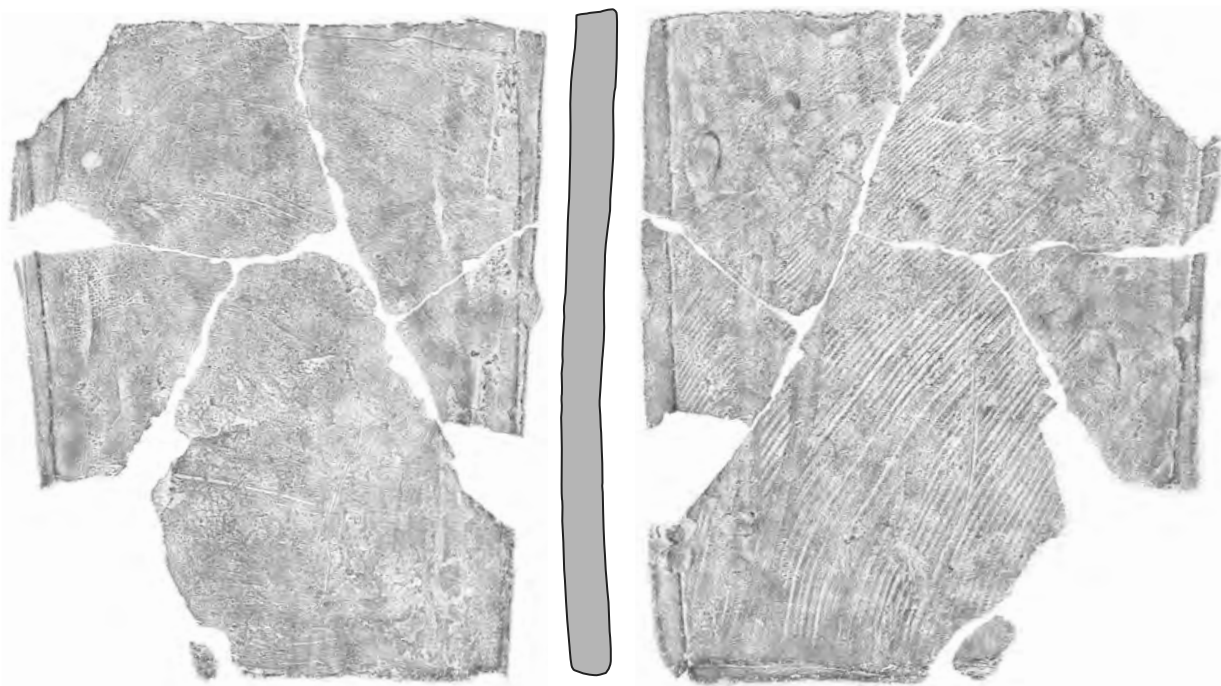
196



講堂の瓦 (14)



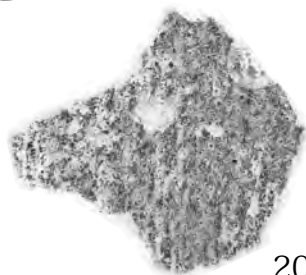
197



198



199



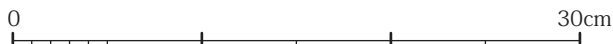
200



201



507



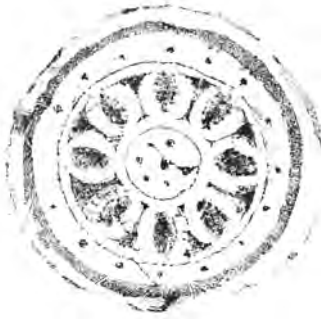
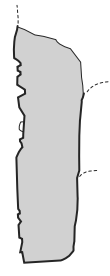
講堂の瓦 (15)



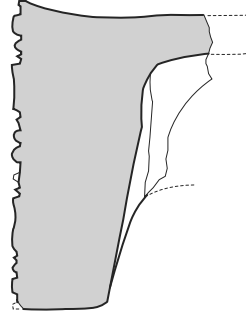
202



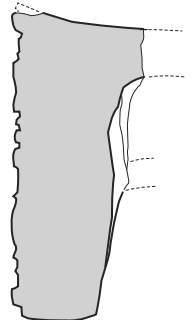
203



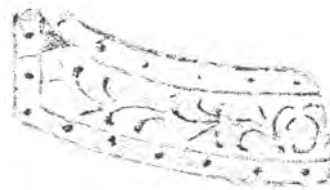
205



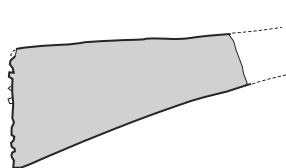
206



207



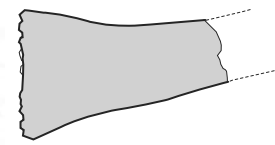
208



209



210



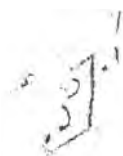
211



212



213



214



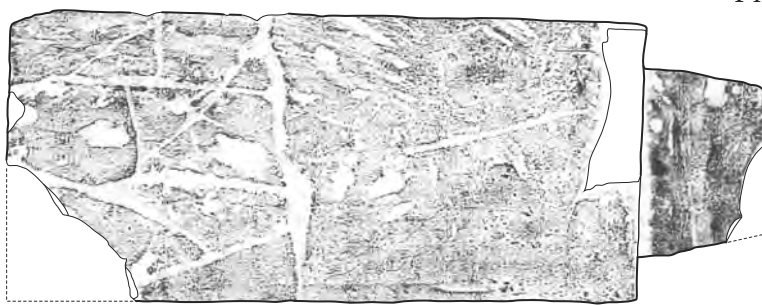
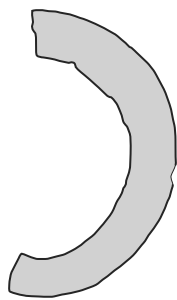
215



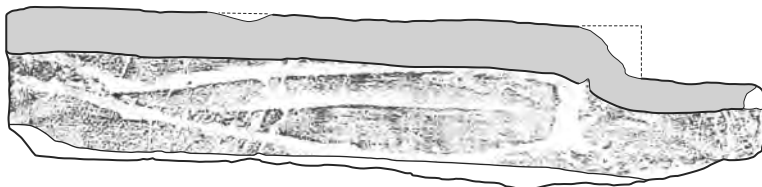
216



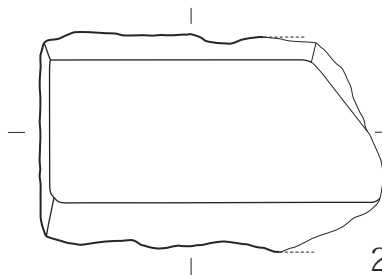
僧坊の瓦



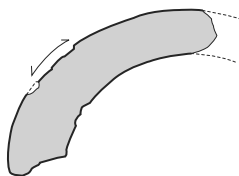
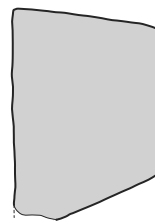
218



219



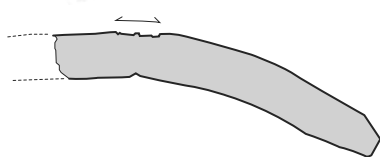
217



223



220



221

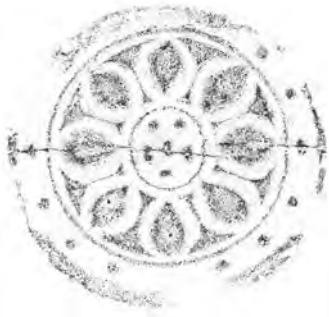
222



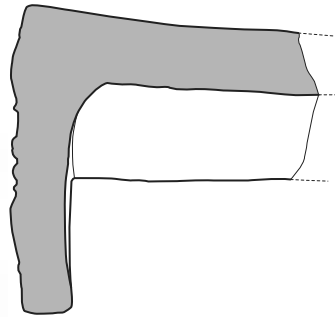
224



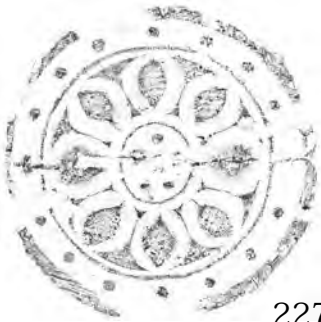
僧坊の瓦磚



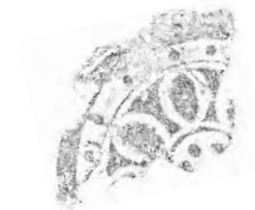
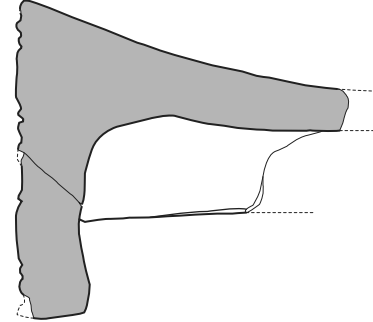
225



226



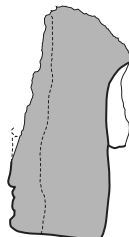
227



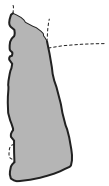
228



229



230



231



232



233



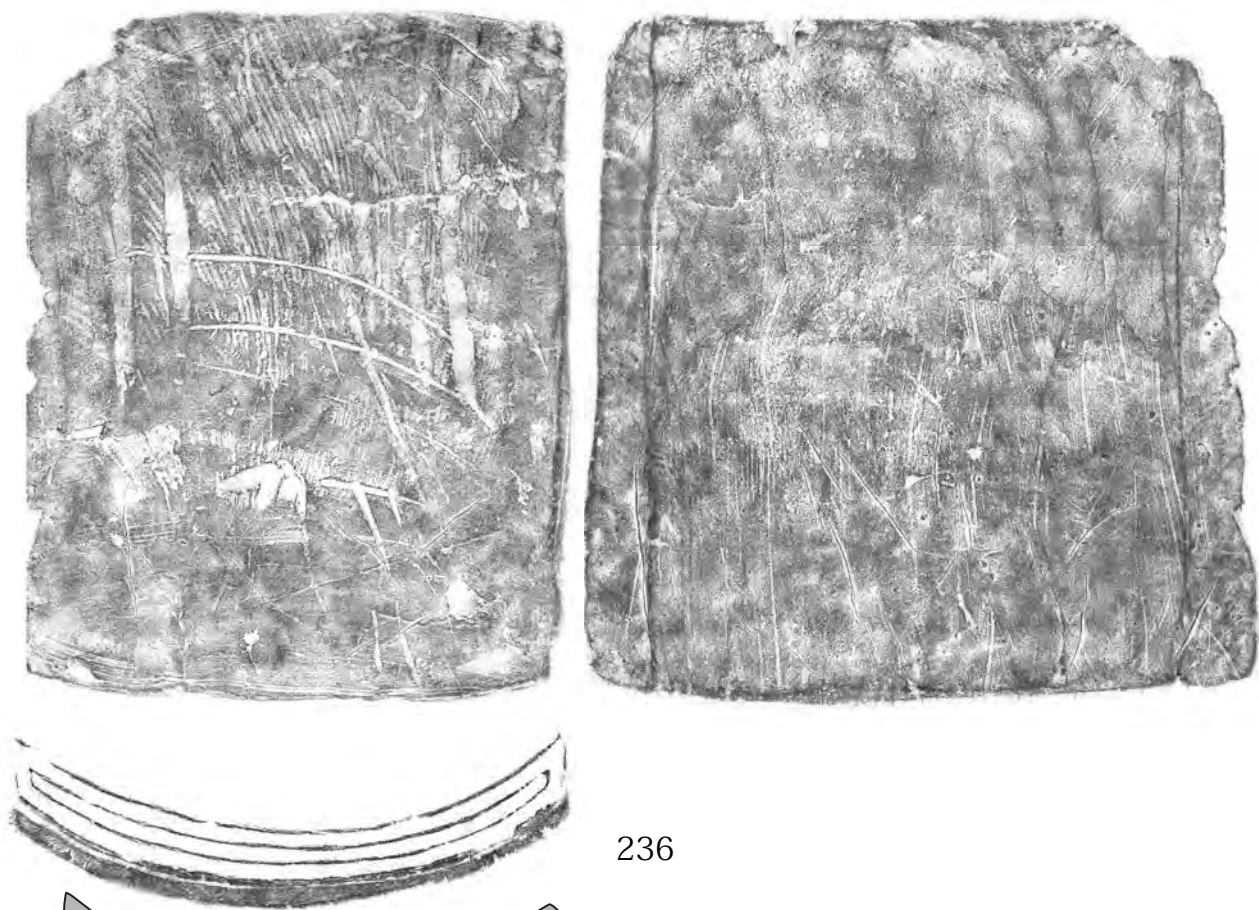
234



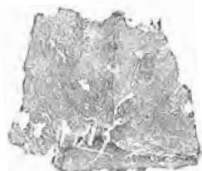
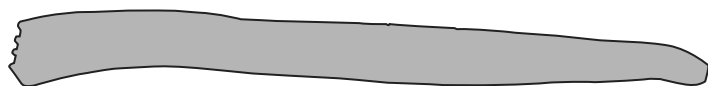
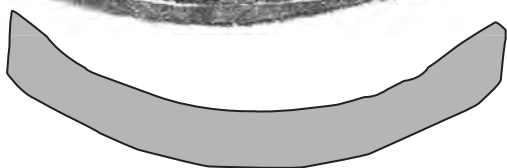
235



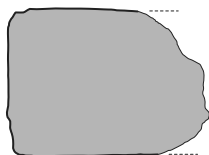
小院の瓦 (1)



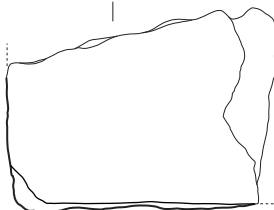
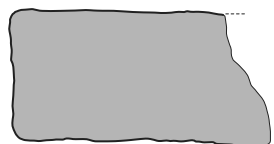
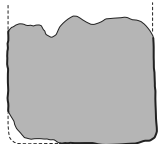
236



237



238

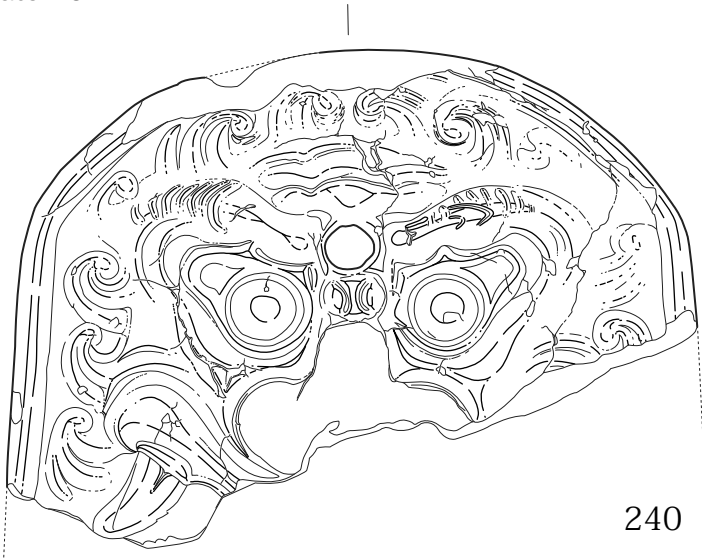


239



小院の瓦埴

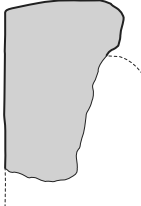
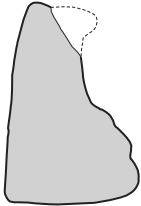
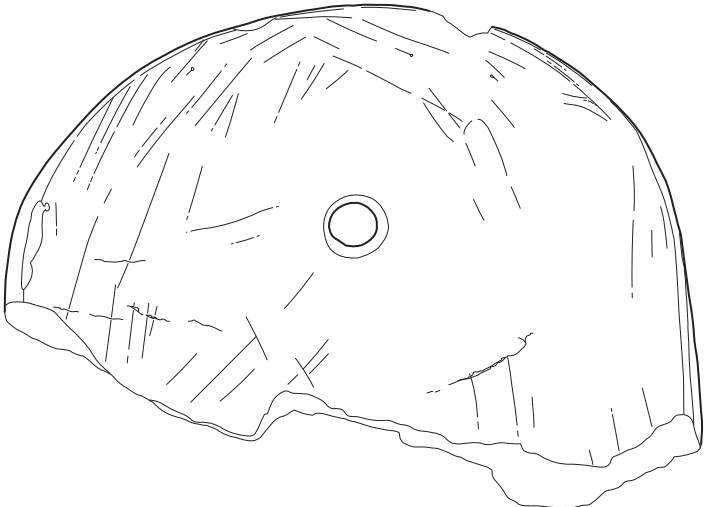




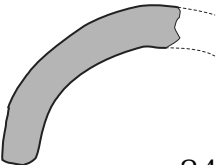
240



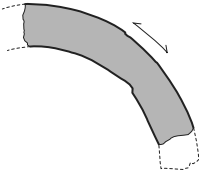
241



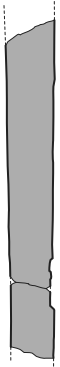
242



243



244



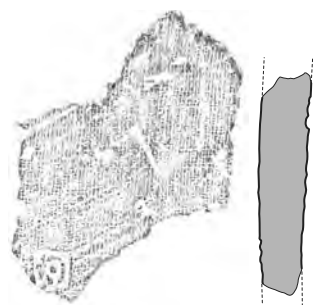
245



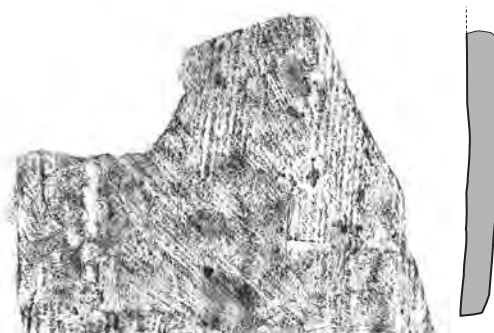
小院の瓦 (2)



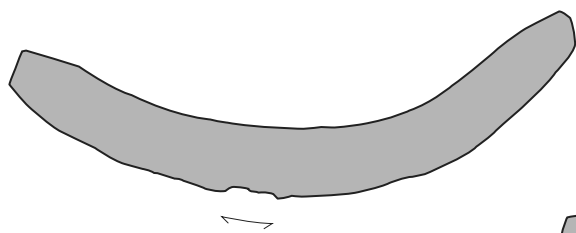
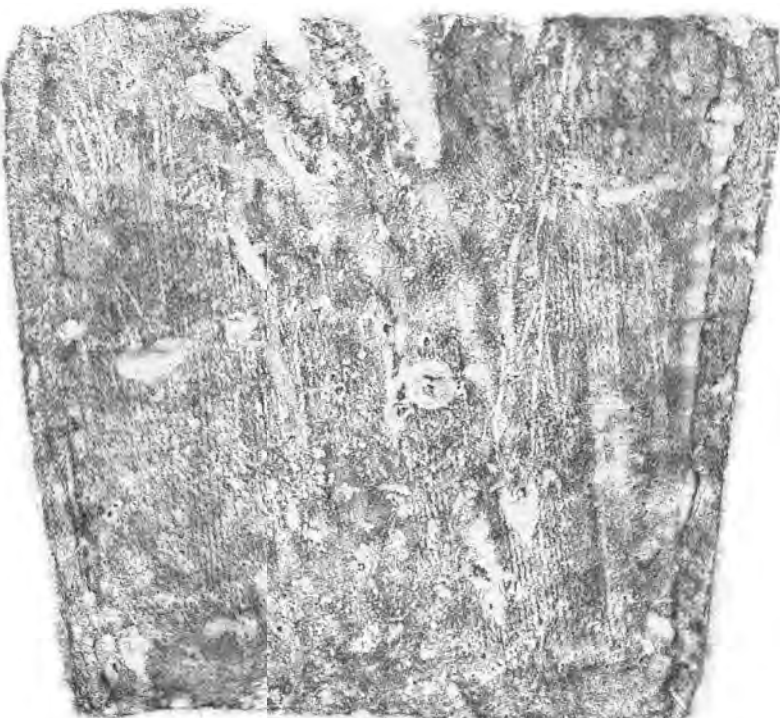
246



247



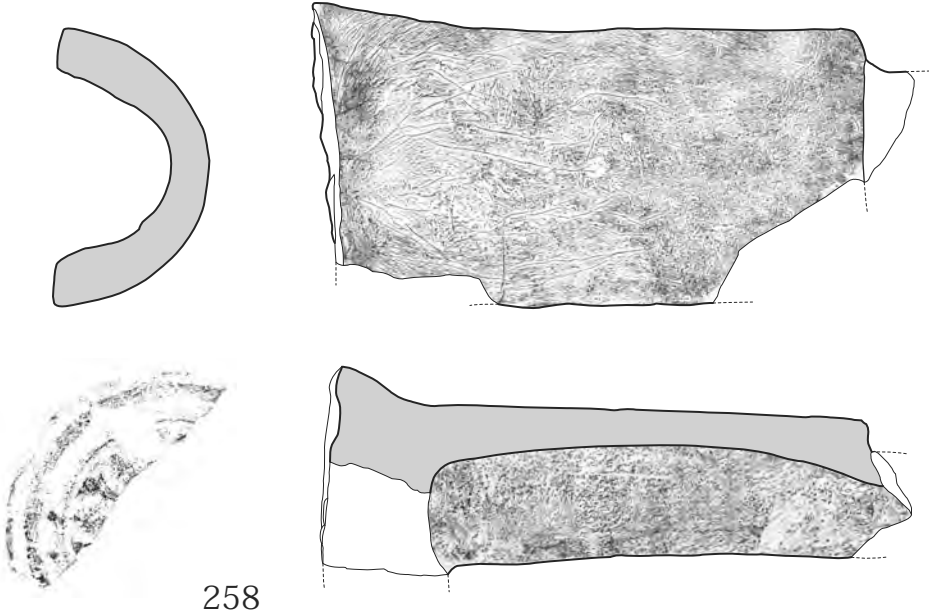
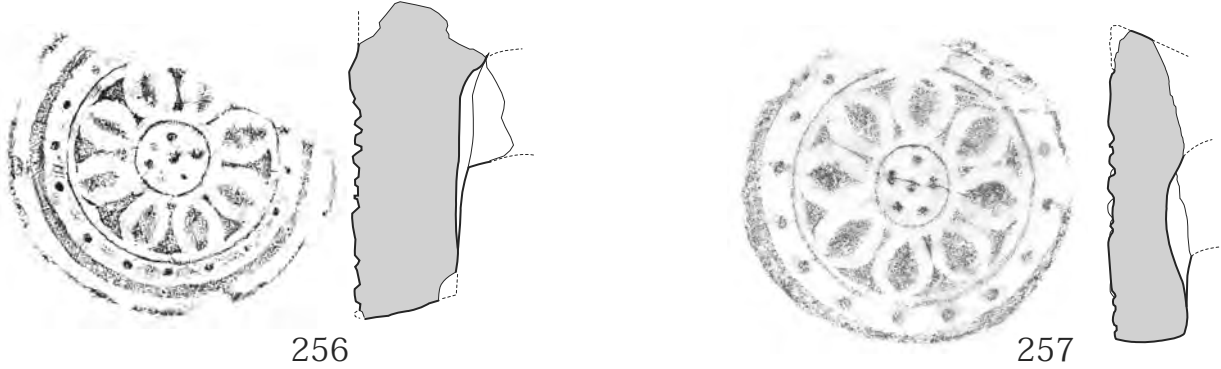
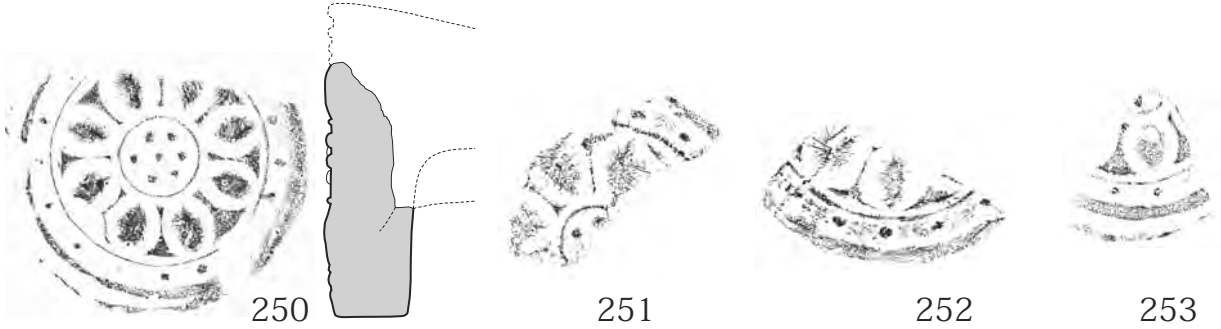
248



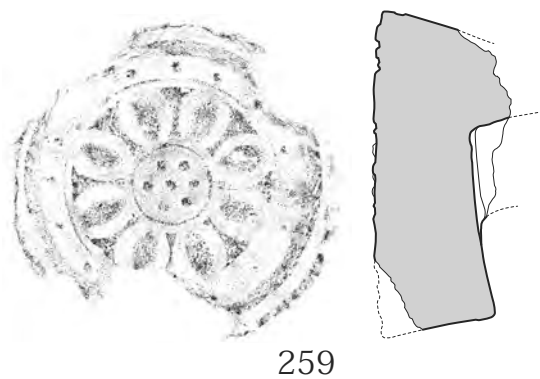
249



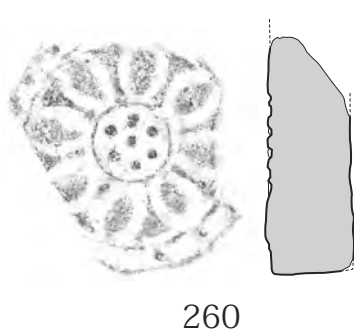
小院の瓦 (3)



北東院の瓦 (1)



259



260



261



262



263



264



265



266



267



268



269



270



271



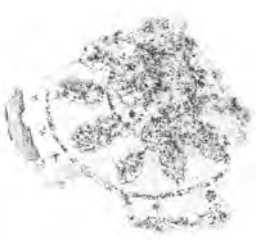
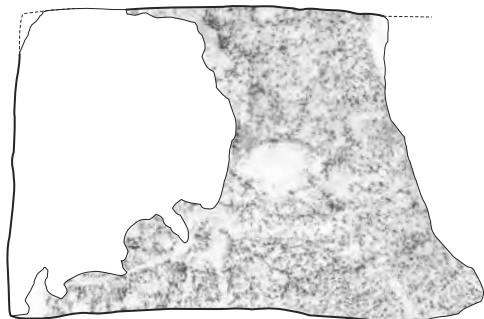
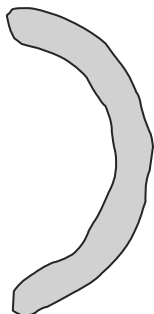
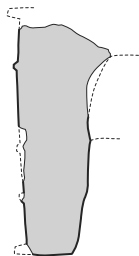
272



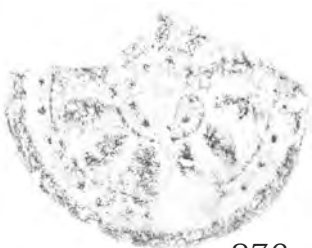
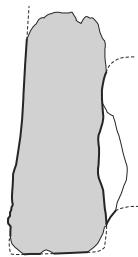
273



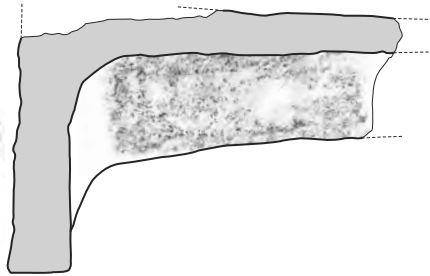
274



275



276



277



278



279



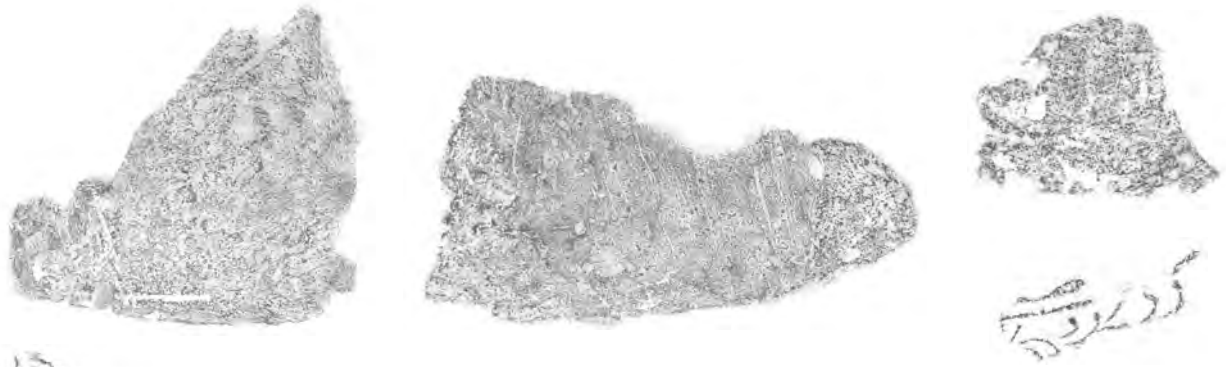
280



281



北東院の瓦 (2)



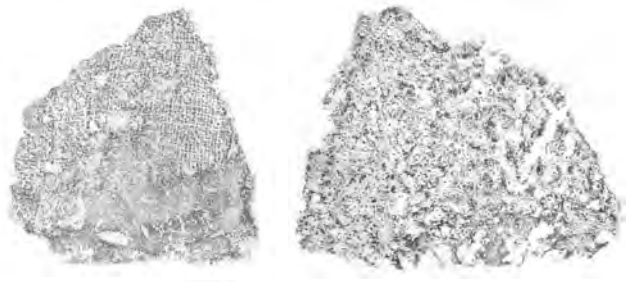
283



282



284



285



287



286



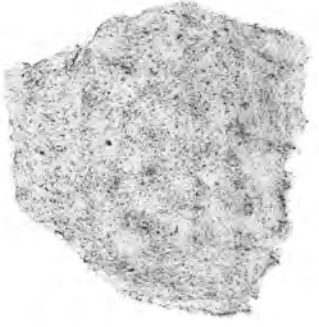
288



289



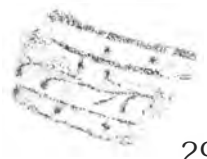
292



290



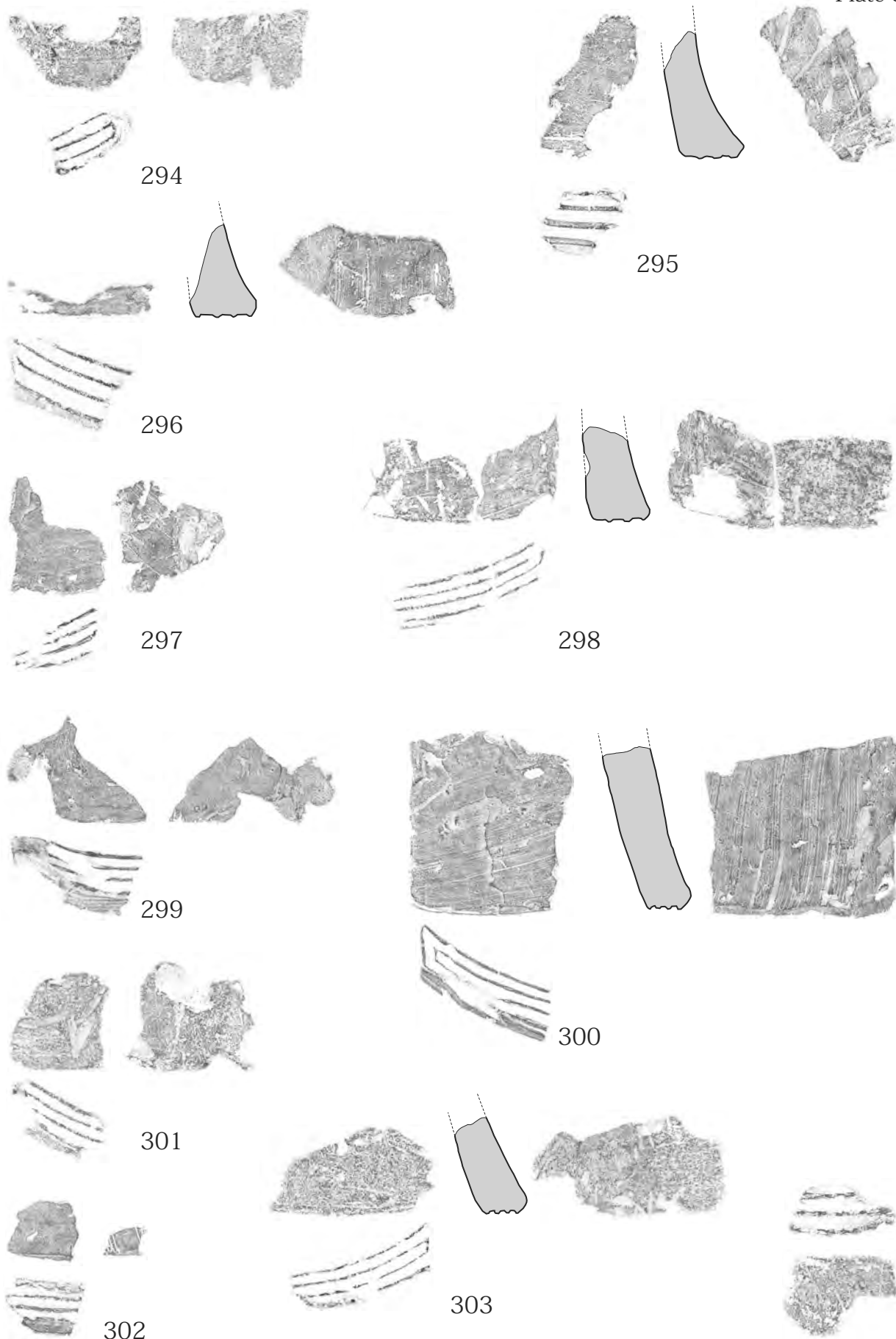
291



293



北東院の瓦 (3)



294

295

296

297

298

299

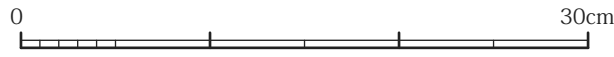
300

301

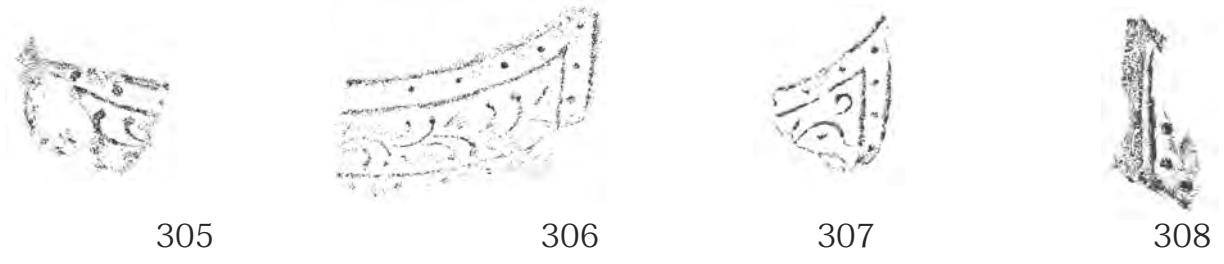
303

302

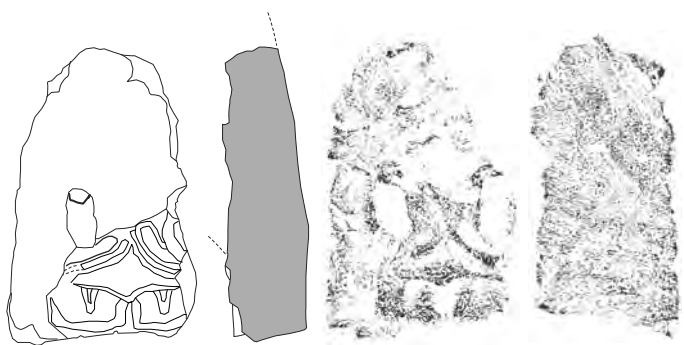
304



北東院の瓦 (4)

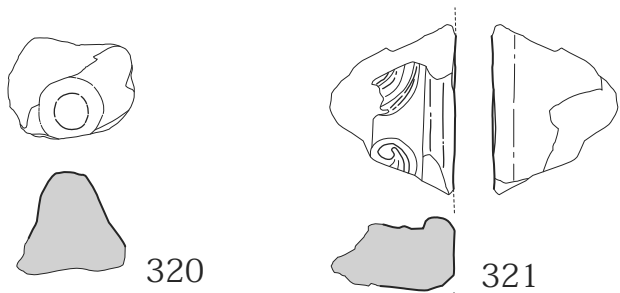


北東院の瓦 (5)



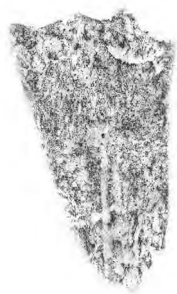
318

319



320

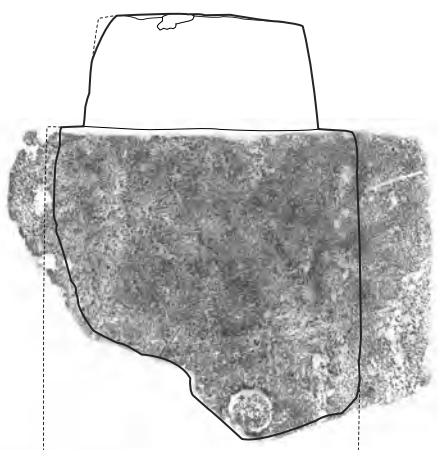
321



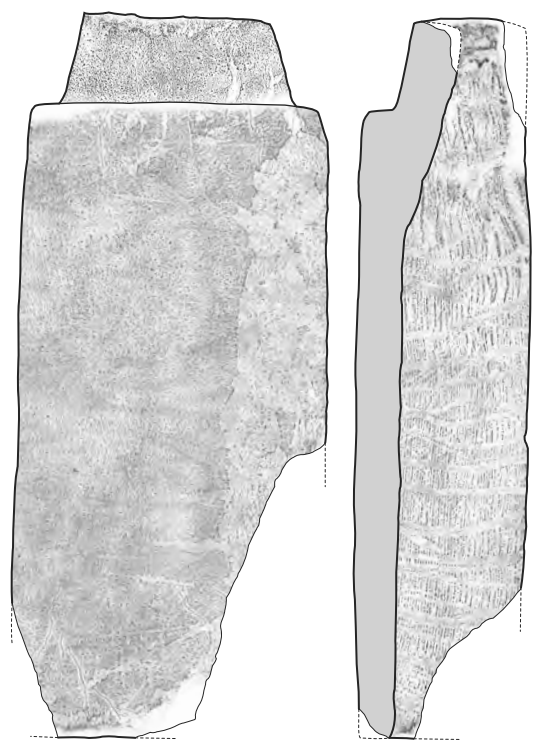
322



324



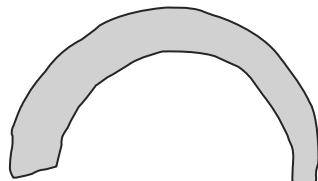
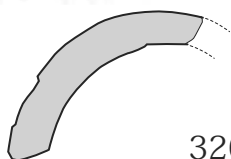
325



327

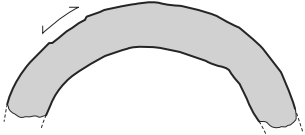
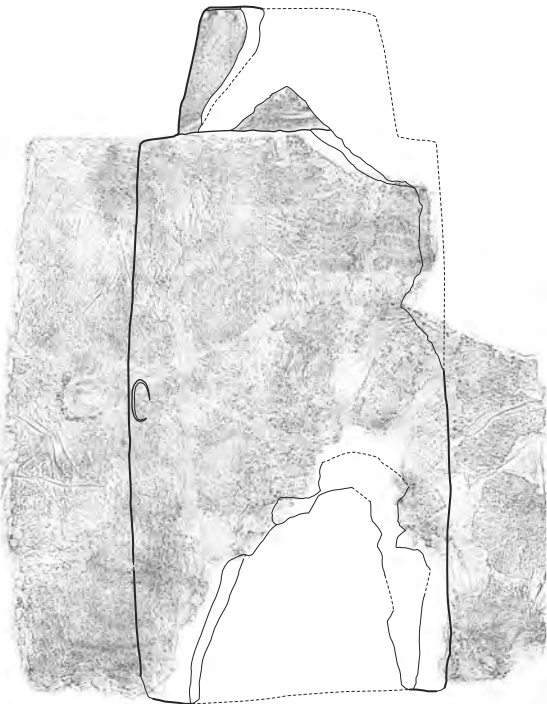


326

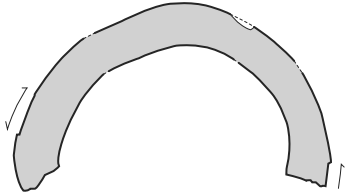


北東院の瓦 (6)

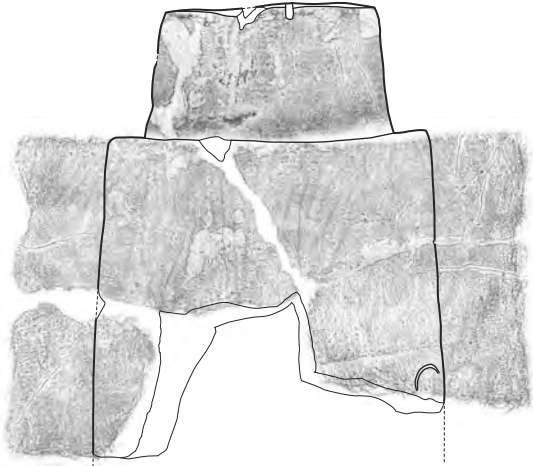




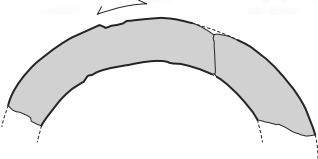
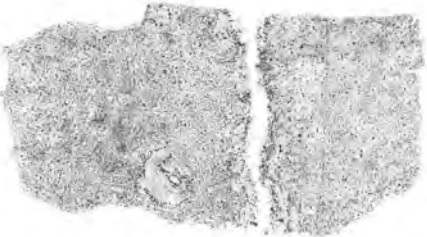
329



328



331



330



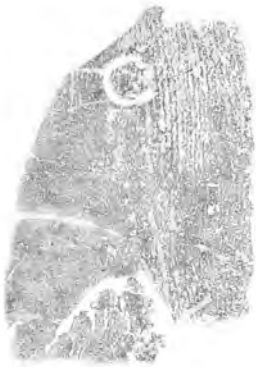
332



333



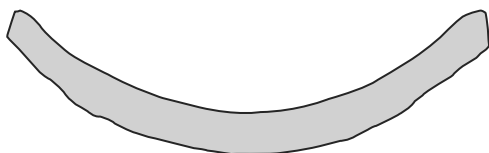
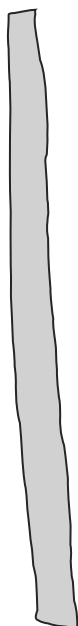
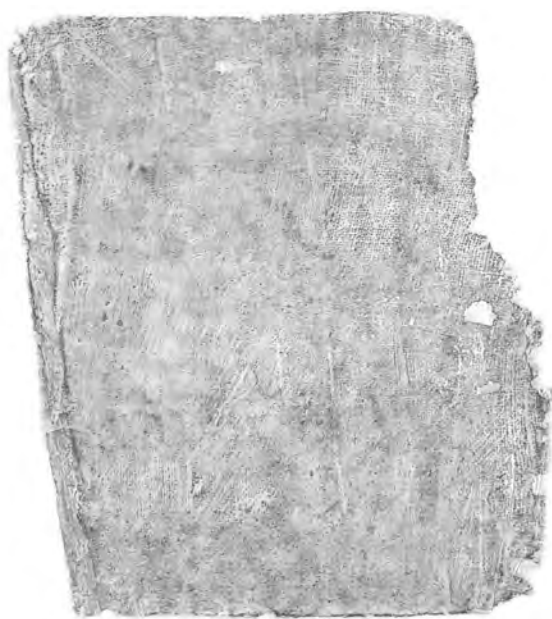
334



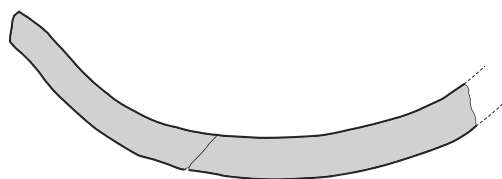
335



北東院の瓦 (7)



336

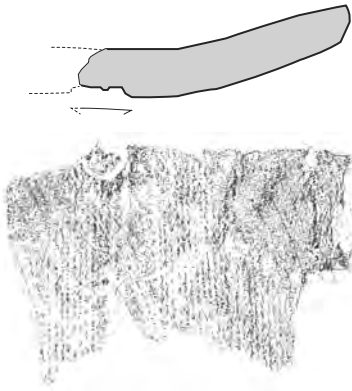


337



北東院の瓦 (8)

Plate 56



338



339



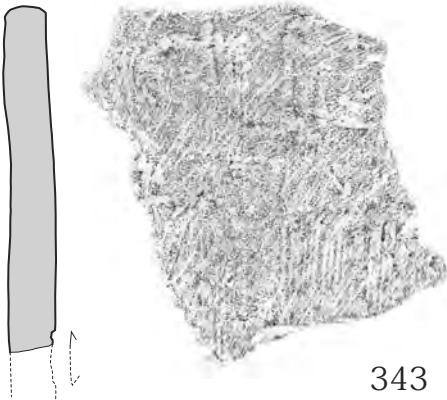
340



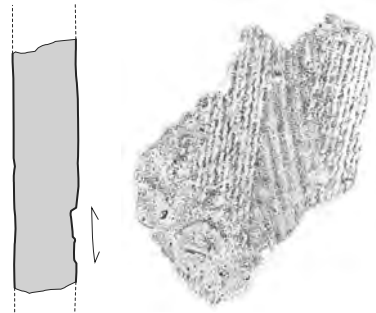
341



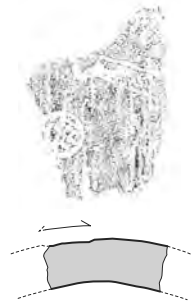
342



343



344



345



346



347



348



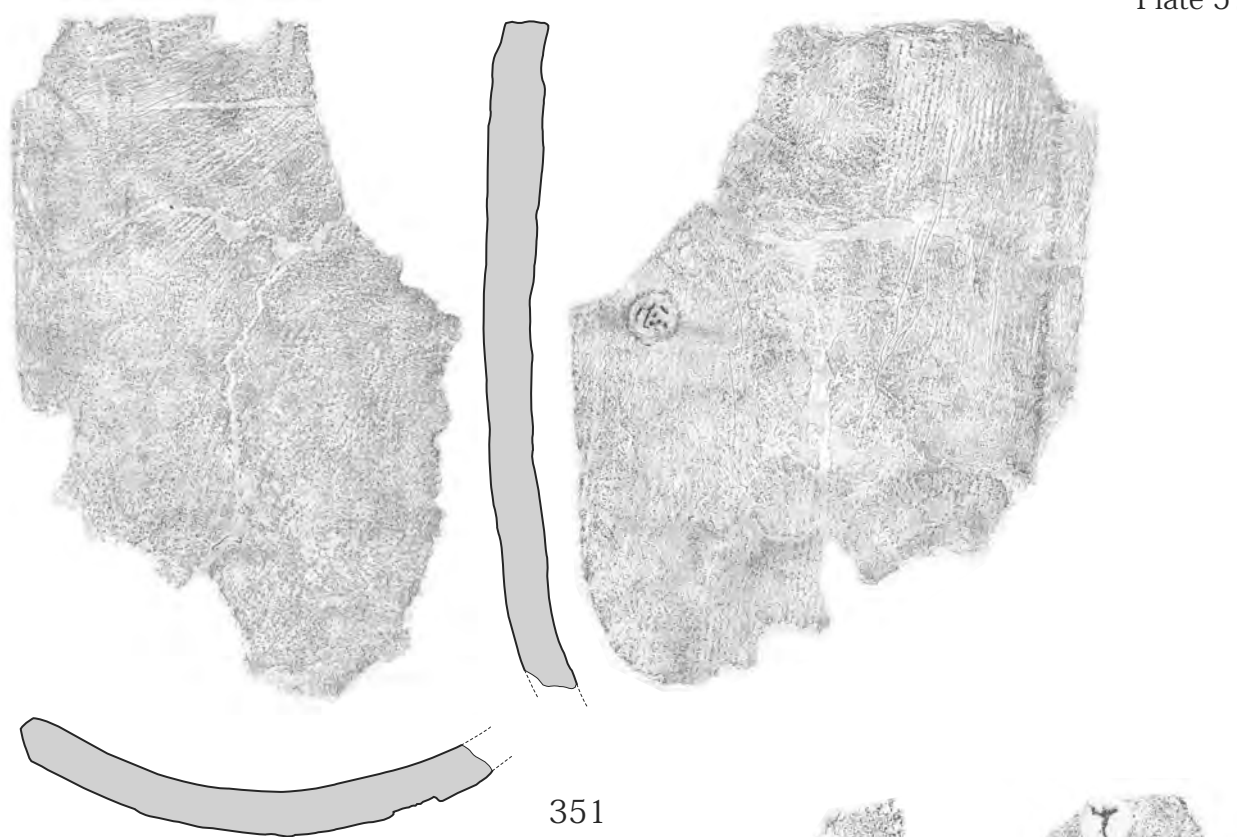
349



350



北東院の瓦 (9)



351



352



353



354



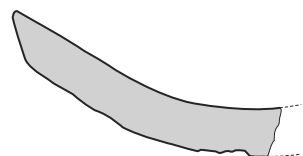
355



356



357



358



359



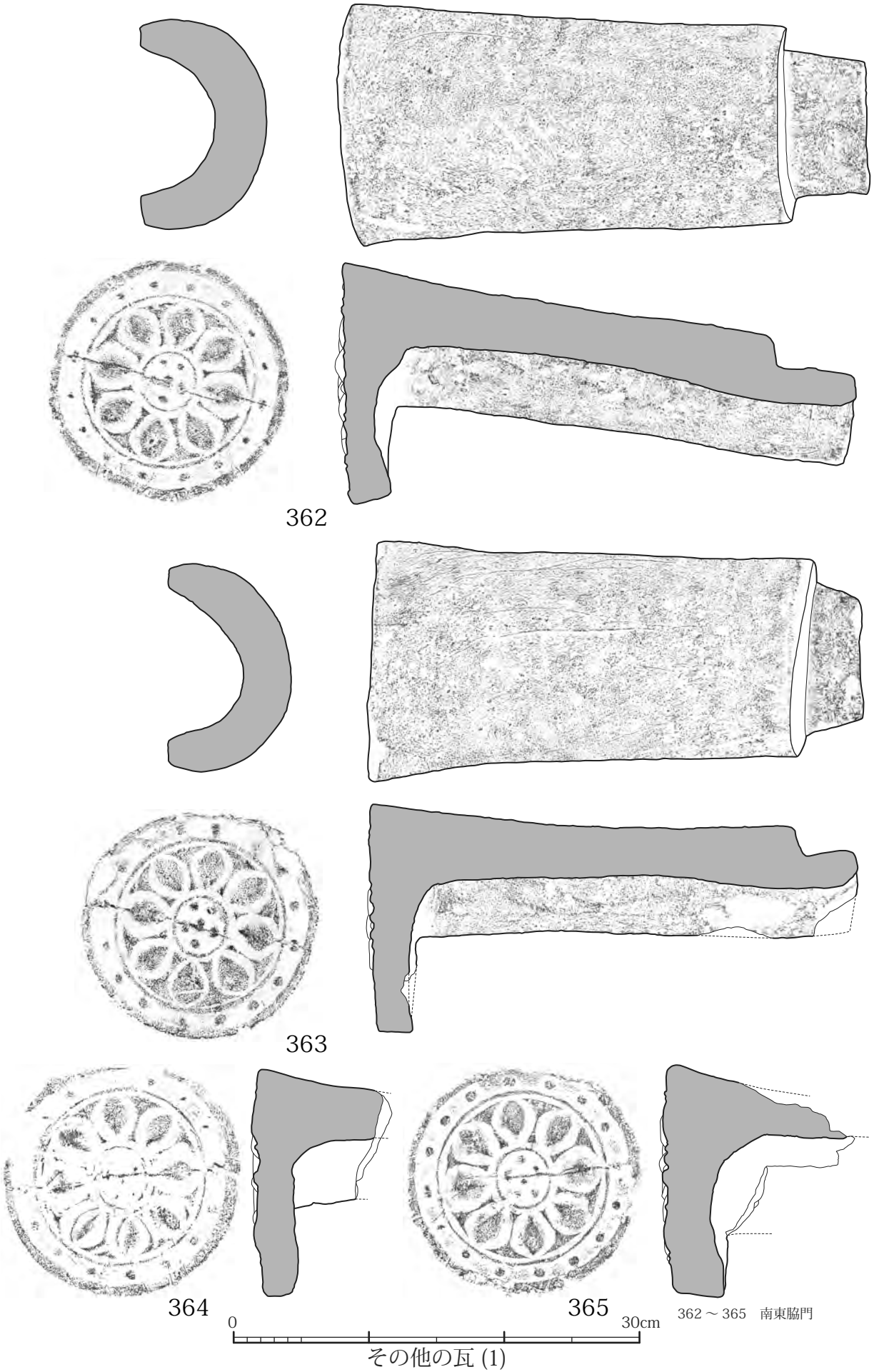
360



361

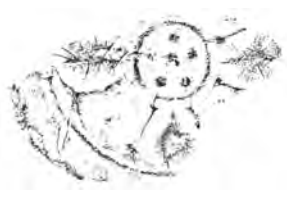


北東院の瓦 (10)





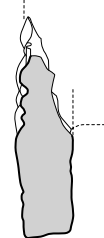
366



367



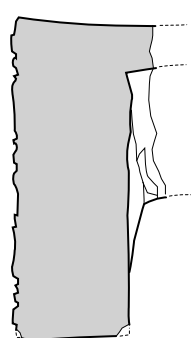
368



369



370



371

366・367・370・375・378 北門  
 368 南東脇門  
 369・376・380 築地（西）  
 371 築地（南東） 372 築地（南西）  
 373・374・377・379・381 鐘楼・経蔵（東）



372



373



374



375



376



377



378



379



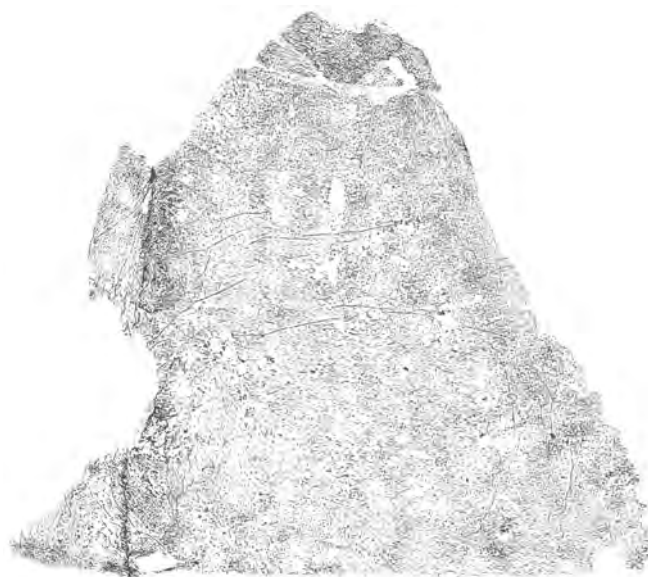
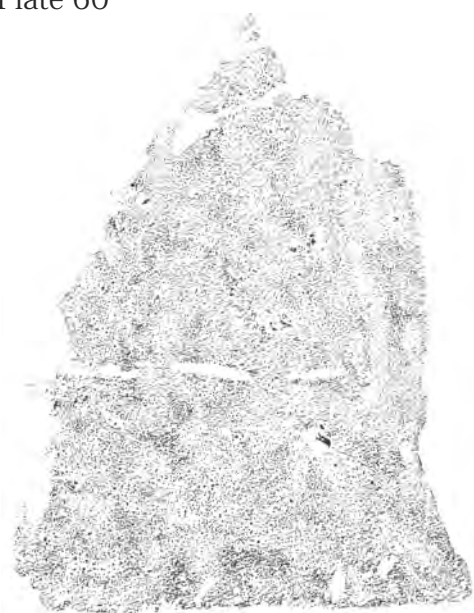
380



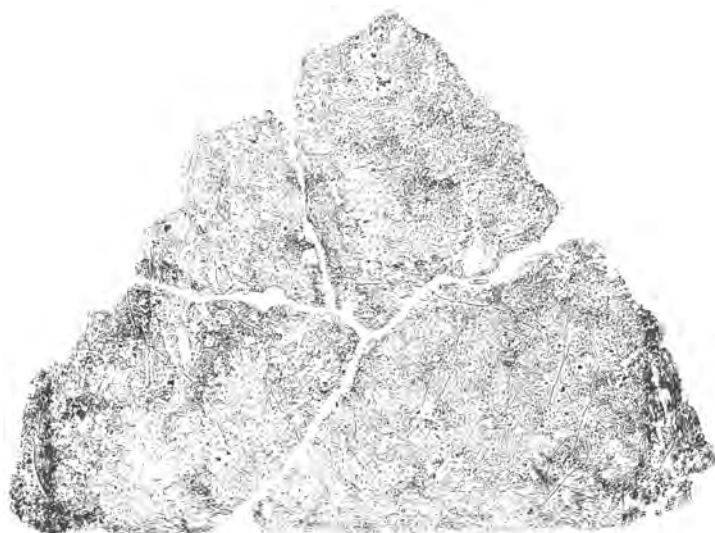
381



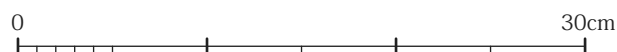
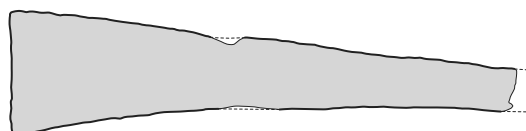
その他の瓦 (2)



382

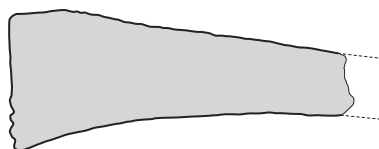
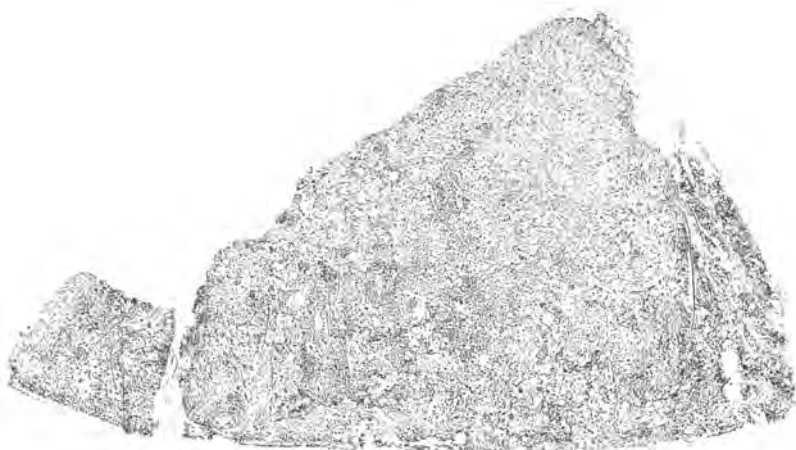


383

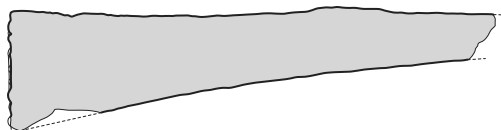


382・383 南東脇門

その他の瓦 (3)



384



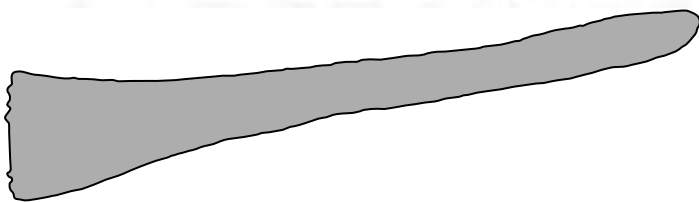
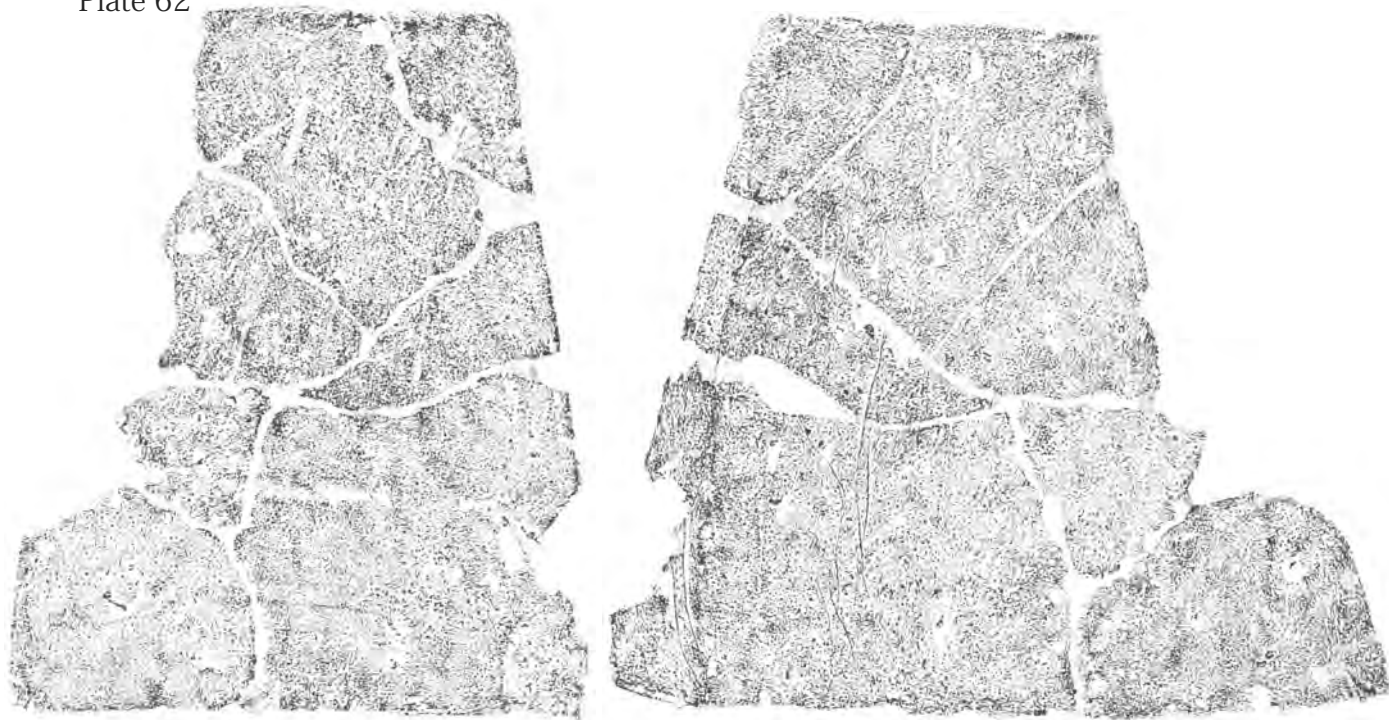
385

384・385 南東脇門



その他の瓦 (4)





386



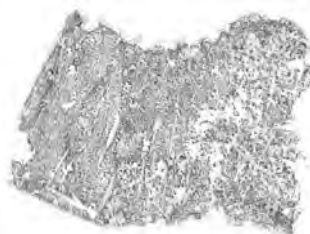
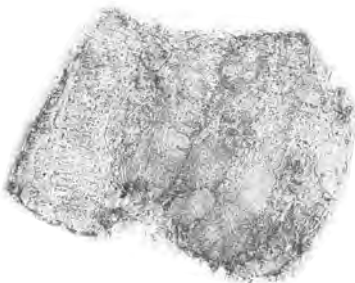
387



388



389



391

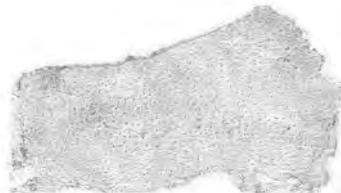
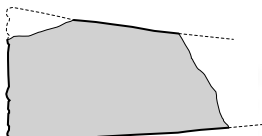
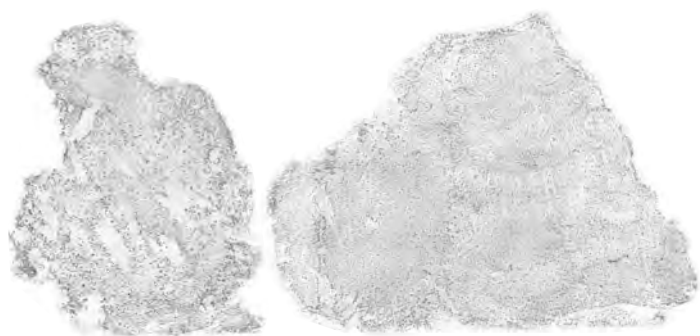


390

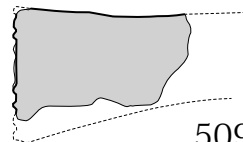
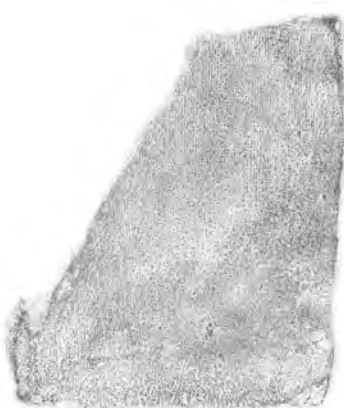
386 ~ 389 南東脇門  
 391 鐘楼・経蔵 (西)  
 390 築地 (南東)



その他の瓦 (5)



508



509

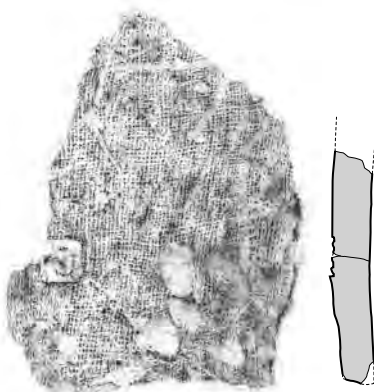
509・510・396・511 南東脇門  
 508・397 築地（東）  
 395 築地（南東）  
 393・394 鐘楼・経蔵（東）



510



394



395



396



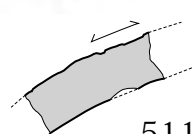
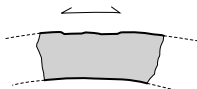
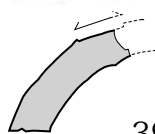
393



397

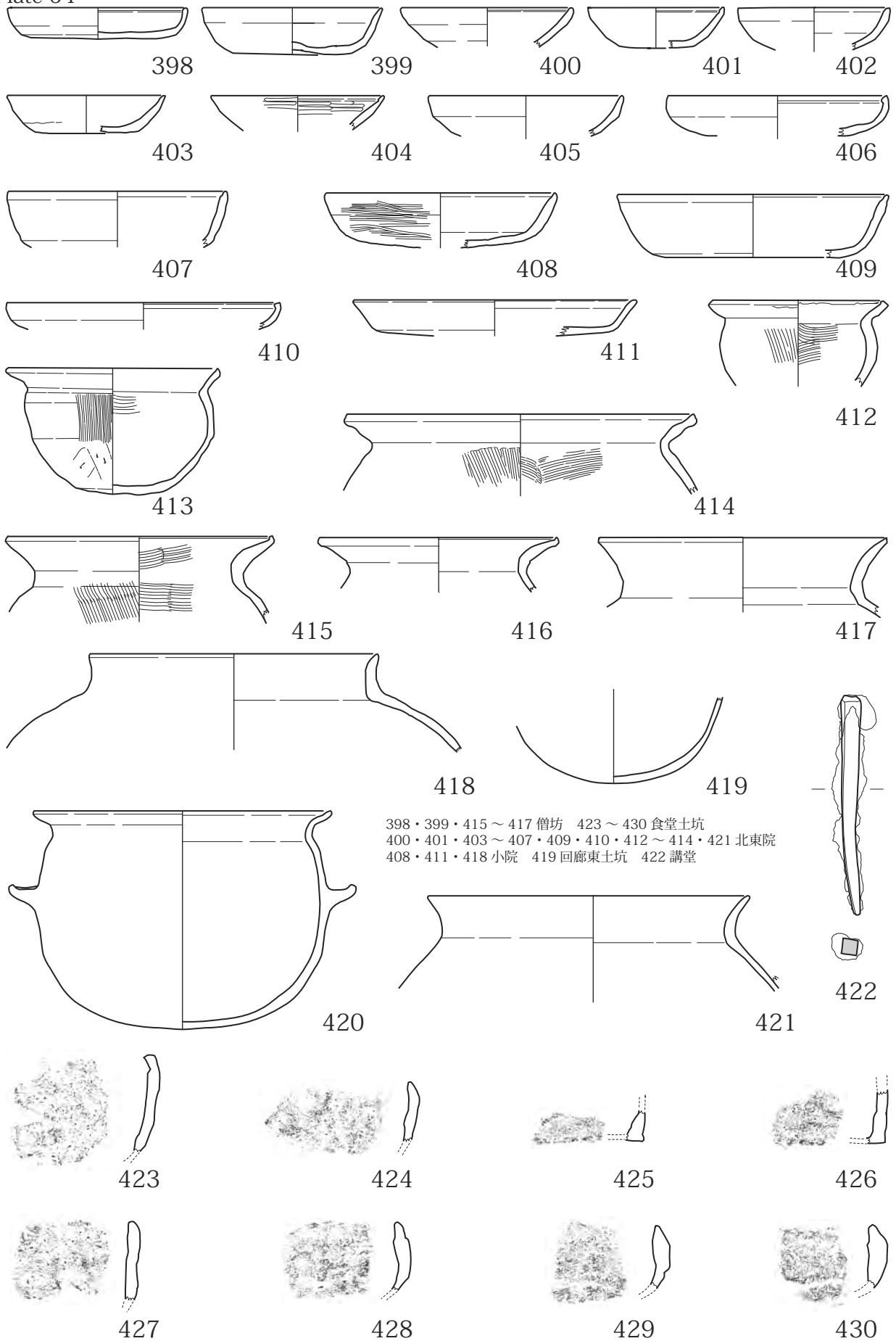


511



その他の瓦 (6)

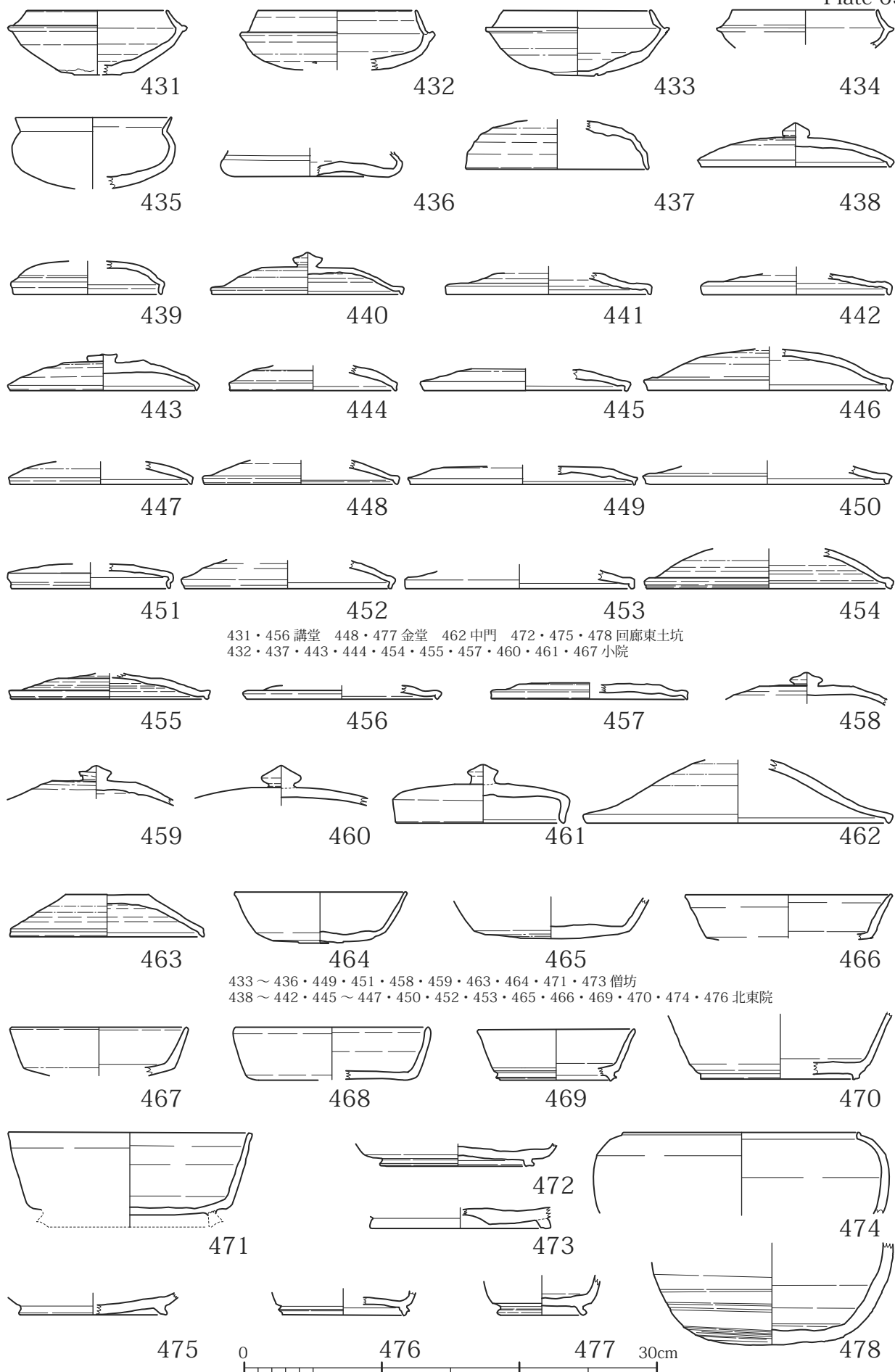
Plate 64



398・399・415～417 僧坊 423～430 食堂土坑  
 400・401・403～407・409・410・412～414・421 北東院  
 408・411・418 小院 419 回廊東土坑 422 講堂

0 30cm

土器その他 (1)

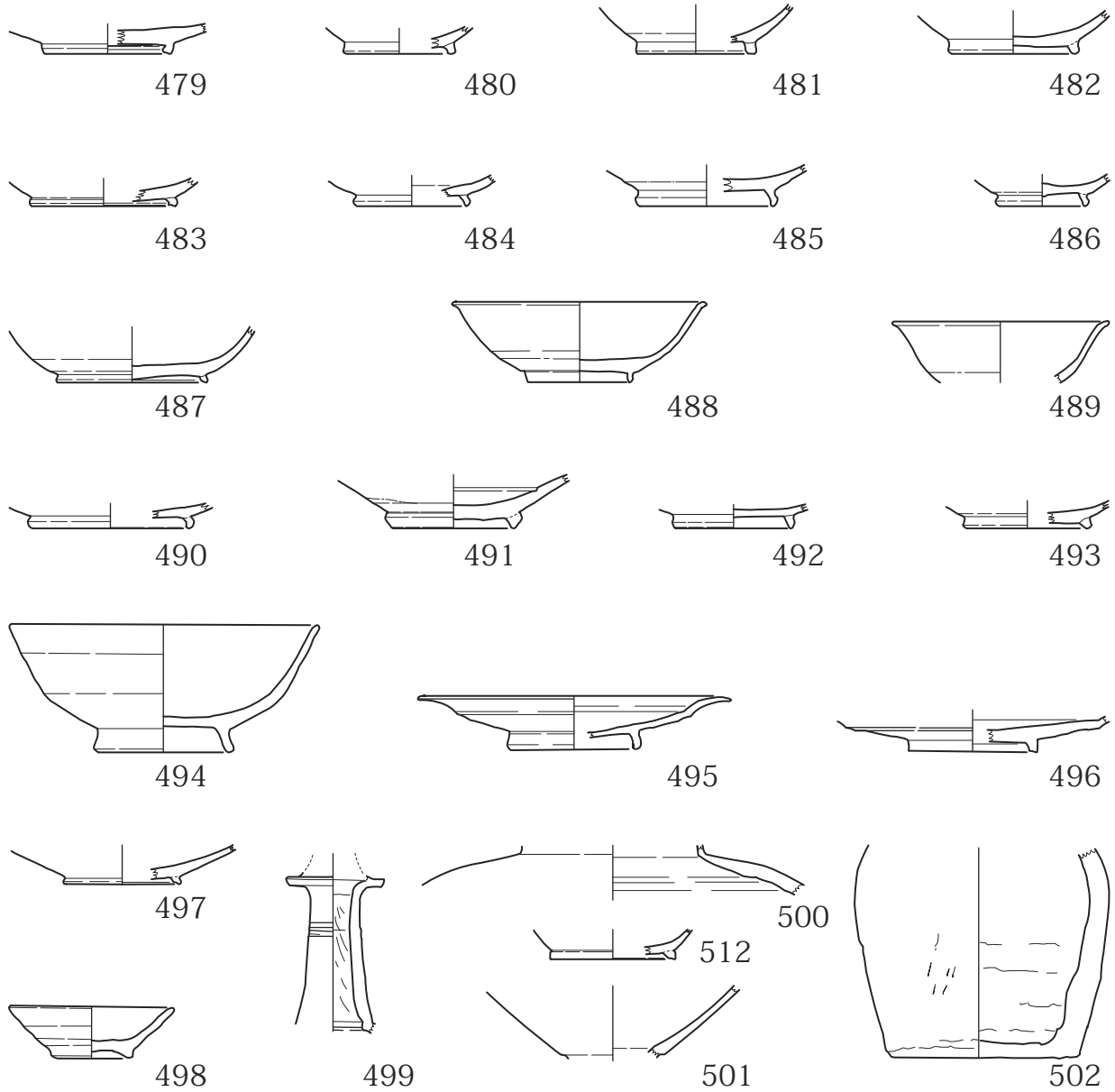


431・456 講堂 448・477 金堂 462 中門 472・475・478 回廊東土坑  
432・437・443・444・454・455・457・460・461・467 小院

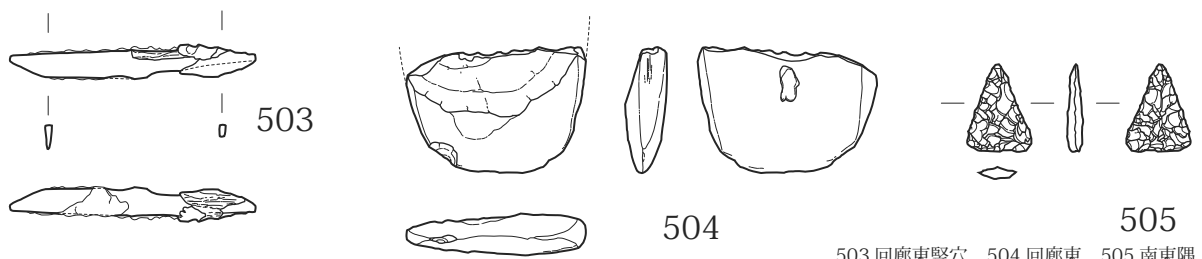
433～436・449・451・458・459・463・464・471・473 僧坊  
438～442・445～447・450・452・453・465・466・469・470・474・476 北東院

土器その他 (2)

Plate 66



479 中門 480 ~ 484・486・490・492・493 講堂  
 485・489・494・496・500・502 北東院  
 487・488・495・499・501 北門  
 491 金堂 497 僧坊 498 小院 512 築地(東)



503 回廊東壁穴 504 回廊東 505 南東隅



土器その他(3)



1



2



3



4



5



6



7



8

南門の瓦 (1)



9



10



11



12



13



14



15



17

南門の瓦 (2)



南門の瓦 (3)





24



25



26



27



28



29



30



31

南門の瓦 (4)



34



34



35



36



37



38



39



40

中門の瓦 (1)



41



42



43



44



45



46



47



48

中門の瓦 (2)



49



50



51



52



53



54



55



57

中門の瓦 (3)



58



58



59



59



60



61



62



63

回廊の瓦 (1)



64



65



66



67



68



69



70



71

回廊の瓦 (2)



72



73



74



75



76



77



78



79

回廊の瓦 (3)



80



81



82



84



83



86



85



87

回廊の瓦 (4)





88



89



90



91



92



93



94



95

回廊の瓦 (5)



96



97



98



99



100



102



101

回廊の瓦埴



103



103



104



104



105



105

回廊の瓦 (6)



106



107



108



109



112



113



109

金堂の瓦埴 (1)



110



111



116



114



115



115



117



117

金堂の瓦埴 (2)・講堂の瓦 (1)



118



118



119



120



121



124



122



122

講堂の瓦 (2)



123



123



125



126



127



128



129



130

講堂の瓦 (3)



131



132



133



134



135



136



137



139

講堂の瓦 (4)





138



140



141



144



142



145



146

講堂の瓦 (5)



143



150



143



151



152



153



147



148

講堂の瓦 (6)



149



160



155



157



154



156



159



158



161

講堂の瓦 (7)



162



163



164



165



166



167



168



169



172



170



171



173

講堂の瓦 (8)

Plate 90



174



175



176



177



178



179



180



182



181



183



185

講堂の瓦 (9)



184



192



186



186



187



187



188



188

講堂の瓦 (10)



189



189



190



190



191



191



506



506

講堂の瓦 (11)



323



323



392



392



193



193



196



196

講堂の瓦 (12)





198



198



194



195



197



199



199

講堂の瓦 (13)



200



200



201



201



507



507



202



203

講堂の瓦 (14)・僧坊の瓦 (1)



204



205



206



207



208



209



210  
僧坊の瓦 (2)



211



212



213



214



215



216



217



218



219



219

僧坊の瓦埴



220



220



221



221



222



222



223



223

僧坊の瓦 (3)



224



224



225



226



227



228



229



230

僧坊の瓦 (4)・小院の瓦 (1)



小院の瓦 (2)



204



204

小院の瓦 (3)





238



239



241



241



244



244



243



243

小院の瓦埴



242



242



245



245



246



246



247



247

小院の瓦 (4)



248



248



249



249



250



251



252



253

小院の瓦 (5)・北東院の瓦 (1)



254



255



256



257



258



259



260



261

北東院の瓦 (2)



262



263



264



265



266



267



268  
北東院の瓦 (3)



269



270



271



272



273



274



275



276  
北東院の瓦 (4)



277



278



279



280



281



282



283



284

北東院の瓦 (5)



285



286



287



288



289



290



291



292  
北東院の瓦 (6)



293





294



295



296



297



298



299



300



301

北東院の瓦 (7)



302



303



304



305



306



309



307



308



312

北東院の瓦 (8)

Plate 112



315



316



310



314



311



313



317

北東院の瓦 (9)



318



319



320



321



322



322



324



324



325



325

北東院の瓦 (10)



326



326



328



328



328



328



329



329

北東院の瓦 (11)



330



330



331



331



332



332



333



333

北東院の瓦 (12)



334



334



335



335



327



360



360



360

北東院の瓦 (13)



338



338



336



336



337

北東院の瓦 (14)



337





339



339



340



340



341



341



342



342

北東院の瓦 (15)



343



343



344



344



345



345



346



346

北東院の瓦 (16)



347



347



348



348



349



349



350



350

北東院の瓦 (17)



351



351



352



352



353



353



354



354

北東院の瓦 (18)



355



355



356



356



357



357



358



358

北東院の瓦 (19)



359



359



361



361



362



362



363



363

北東院の瓦 (20) ・ その他の瓦 (1)



364



365



366



367



368



369

その他の瓦 (2)



370



371



372



373



374



375



379



376



377



378



380



381

その他の瓦 (3)





382



383



384



385



386

その他の瓦 (4)



387



389



388



390



391



508



509



510

その他の瓦 (5)



393



393



394



394



395



395



396



396

その他の瓦 (6)



397



397



511



511



398



411



408



399



412



413



415

その他の瓦 (7) ・土師器 (1)

Plate 130



416



418



419



420



423



424



425



426



427



428



429



430



431



434



436



432



433

土師器 (2)・製塩土器・須恵器 (1)



435



437



439



438



440



441



442



445



443



444



446



447



448



449



450

須恵器 (2)

Plate 132



451



456



458



454



455



460



457



459



462



461



463



464



466



467



468



469

須恵器 (3)



470



474



477



471



478



472



473



475



479



482



484



485



481



486



483



480



487

須恵器 (4) ・ 灰釉陶器 (1)



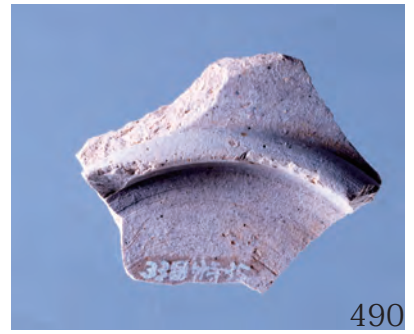
Plate 134



488



489



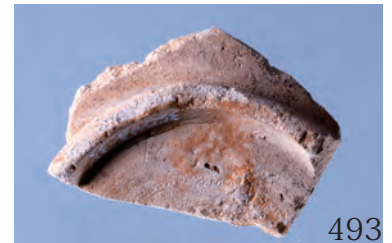
490



491



492



493



497



495



496



499



500



501



512



498



502



422



503



504

灰釉陶器 (2) ・ 緑釉陶器 ・ 山茶碗 ・ 陶器 ・ 鉄製品 ・ 石器

報告書抄録

ふりがな	しせき いせこくぶんじあと いぶつへん							
書名	史跡 伊勢国分寺跡 - 遺物編 -							
編著者名	新田 剛・藤原秀樹							
編集機関	鈴鹿市文化スポーツ部文化財課発掘調査グループ							
所在地	〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224番地 TEL059-374-1994							
発行年月日	平成30年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
伊勢国分寺跡 (第22～25次 第28～31次 第35次)	三重県鈴鹿市国分町 字堂跡・西谷・西高木	24207 361	34度 54分 32秒	136度 33分 50秒	22次：990715-990930	153	学術調査	
					23次：000204-000331	132		
24次：000508-000919	216							
25次：011514-011031								
020207-020312	1,100							
28次：020509-030228	1,891							
29次：030804-040312	2,374							
30次：040723-050128	1,100							
31次：050728-051209	1,022							
35次：080714-090310	2,082							
	計 10,070							
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
寺院 集落 古墳	古墳・飛鳥 奈良・平安 中世	南門・中門・回廊 金堂・講堂・軒廊 僧坊・北門 伽藍地築地 南面脇門 南東隅掘立柱建物 小院築地・小院南門 方形外周溝（塔？） 北東院築地 北東院南門・西門 二面廂建物（食堂） 古墳・竪穴住居 土坑・掘立柱建物 中世墓・溝・道路跡 火葬墓	瓦類・埴 須恵器・土師器 製塩土器 緑釉陶器・灰釉陶器 中世陶器 金属製品・石器		第22～31次の調査は、史跡整備計画策定のための伽藍配置の確認調査で、主要伽藍の位置・規模を確認した。 第35次調査は、整備に先立つ講堂基壇の構造確認および伽藍地東半の小院・北東院の追加調査である。 本書は上記調査の本報告遺物編である。			

史跡 伊勢国分寺跡 - 遺物編 -

発行日 平成30(2018)年3月31日  
 編集・発行 鈴鹿市文化スポーツ部文化財課発掘調査グループ  
 〒513-0013  
 三重県鈴鹿市国分町224番地 鈴鹿市考古博物館内  
 TEL 059(374)1994  
 FAX 059(374)0986  
 E-mail: bunkazai@city.suzuka.lg.jp  
 URL: http://www.edu.city.suzuka.lg.jp/museum/  
 印刷 株式会社三ツ星

# Ise Kokubun-ji Temple Site

Artifacts

March, 2018

Suzuka City, Mie-pref., Japan